



銀杏ぎんなん協奏曲



—青潟大学附属シリーズ—
中学編
第四シーズン 1

舞夜じよんぬ

——あの六年間、私はどうして梨南ちゃんと一緒にいなくちゃならなかったんだろう。

親友、って言葉の意味が、小学校時代とだんだん違ってきているような気がしていた。私にとって、「親友」って誰？ 私にとって、大好きな友だちって誰？ 何度も問い掛けてみたけれども、答えが出なかった。

この前の日曜日、佐川さんに会った時打ち明けてみた。

「親友？ 俺にとってのおとひっちゃんのことかなあ」

いつものように、なんにも気にしてない風に、にっこり笑ってくれた。

「けど、女子みたいにいつもべったりしたりしないしさ。佐賀さん、女子同士ってさ、どうい話するのかなあ。いつも友だち同士、ひそひそ話して笑っているけど、それって男子の俺たちからしたら意味不明なんだよね」

「噂、かもしれないです。テレビ番組とか、漫画の連載とか、あと」

口籠もった。佐川さんは無理やり聞き出そうとせずに、学生服の袖口を軽くひっぱるようなしぐさとした。私と二人並んでいると、それほど背丈が違うようには見えない。男子の中では低い方じゃないかなって思っている。健吾よりはずっと小さいのに、一緒にいると健吾よりもほっとするのはどうしてなのか、わからない。私は肩をすぼめて、ひざに手を置いた。

「男子の場合さ、言うことがそのまんまだから、裏をいろいろ考えることってそうそうないんだよ。生徒会のことは違うかもしれないけどね。だからおとひっちゃんとも、それほど打ち明け話をしたりはしないしさ。たとえば女子って、好きな男子の話とかして喜んでるだろ？」

意識する前にこくっと頷いてしまい、かあっとなってしまいそうだった。うつむいたまま耳を傾けた。

「男子も、一部する奴がいないわけじゃないよ。けど、大抵の場合そういう話したらあっという間に馬鹿にされるかからかわれるかのどっちかだから、絶対に言わないはずだよ。今度佐賀さんが、男子たちとおしゃべりする機会があったら聞き耳立ててみなよ。ほんと、泣けてくるくらい単純な話しかしてないよ」

「佐川さんも、そうなんですか？」

大きな瞳がくるくると動いた。また私の顔を見て、こっくり頷く。

本当ならずと、健吾よりも子どもっぽく見える顔なのに、どうして私は敬語を使ってしまうのだろう。どうしても、佐川さんに対しては、きっちとしなくちゃと思うところがある。二週間に一度、こうやって青潟郷土資料館で待ち合わせて、資料室真中の大きなソファに座ってふたり語らっているのは、そんな緊張感が心地よかったからだった。

「うん、俺も、佐賀さん相手でないとなんなまじめな話、絶対にしないよ。だって、ばかにされるにきまつてるものな。おとひっちゃんにうっかり、誰か好きな女子がいるとか話してみたらたいへんだよ。すぐ、『どこの誰だ？ いったいどういうところが好きなんだ？ もし俺ができるこ

とあったらなんでも協力するから 言ってみろ』こんな感じで質問攻めに遭うに決まってる。俺がやめてくれって言ったってすぐ、あいつのことだ、行動しまくってせっかくのチャンスをだめにしてしまうに決まってるんだ。おとひっちゃんさえそうなんだから、他の友だちだったらどうなるか、目に見えてるよ。だから俺は絶対に、誰にも、言わない」

「そうなんですか」

「佐賀さんくらいだもん、俺とまじめな話できる人ってさ」

ほら、と佐川さんは私に、ピンク色のメモ帳らしきものを差し出した。手のひらに収まるくらいの、本当にちっちゃなハート型のものだった。受け取っていいのかな、少し迷うと、

「これ、今日返品した雑誌の付録なんだ。父さんにちゃんとOK貰って持ってきたものだから、大丈夫だよ」

「でも、これは私が受け取っていいんですか？」

問い返した。私だって、このハート型とピンク色に意味がないなんて、思っただけじゃない。

だって佐川さんには。

言いかけた言葉を佐川さんはさえぎった。

「さっきたんには黄色いタイプの同じ型のをあげるから大丈夫だよ」

何が、大丈夫なんだろう？

胸の真中がちくんと痛んだような気がした。受け取ろう、だって私たち、何も悪いことをしているわけではないんだもの。もちろん健吾に内緒で会って話はしているけれども、このことは今年の三月段階で、ある程度了解しあっていることだった。健吾と佐川さんが互いの学校情報を交換することは約束されていることだったし、たまたま佐川さんのお家が経営している書店に立ち寄る機会が多いこともあって、私が情報を持っていくのも自然なことだった。健吾には、何時行くかまでは報告しないけど、ちゃんと佐川さんに会ってきたことだけは伝えておく。ただ「青潟郷土資料館」で待ち合わせることは言わないでおくけど。健吾もそれほど詳しいことは聞きたがっていないので、説明しないだけのことだった。

佐川さんは「さっきたん」と呼んだ瞬間、思わず顔を私からそむけた。すぐにもとに戻してくれたけども、私も今、見たくないものをちらっと観てしまったような気がして、うつむき直した。

「さっきたん」、愛称で呼ぶ人が、佐川さんにはいる。

同学年の、同じクラスの女子だと噂には聞いていた。

私も一度、顔を見たことがある。お下げ髪のおとなしそうな女子だった。私より一学年上だと言うけれど、言われてみないとたぶんわからないと思う。クラスに混じっていたらきっと同級生の扱いをされよう。その人と佐川さんが現在、水鳥中学内では彼氏彼女の関係であり、いつもはふたりで登下校していると言う。これは私が聞いたり見たりしたわけではない。全部佐川さんが報告してくれるのだ。そう言っておかないと、いろいろあとでまずいことになるからとっているらしい。佐川さんは「さっきたん」さんのことを話す時、私の目をいつも見ないようにする。だから私もちゃんと合わせた。

「それより佐賀さん、最近そちらの評議委員会はどうなんだろうなあ。俺たちのところはそろそろ生徒会選挙が近くて、ばたついているけど」

「評議委員会は三月までずっと同じですから、あまり影響はないみたいです」

実際その通りだし、そう答えるしかなかった。

青潟大学附属中学の場合、生徒会よりも委員会の方が実権を握っていて、ほとんどの学校行事を牛耳っている。健吾から教えてもらったところによると、三年前の評議委員長さんがそういう風に決めたらしい。特段誰も変更する気もなかったらしくって、そのままの状態が今も続いているって話だった。一応、生徒会も機能してはいるけれども、あまり積極的に活動はなされていないみたいと聞いている。私もそのあたりは健吾を通じてしか教えてもらえないのでわからない。クーデターが起こる気配もなさそうだし、ってことくらいだろうか。

佐川さんはひざを抱えて、天井を見上げた。青潟のささくれた古地図が、ずらっと目の前に広がっていた。昔の青潟はたくさんの小さな街に分かれていたけど、いろいろな事情があって合併し、今の青潟市になったって習ったことがある。

「ふうん、そうかあ。順調なんだね」

「表向きはたぶん、そうだと思います」

「表向き？」

私は頷いた。

「立村委員長は今、学校祭と球技大会のことで頭が一杯だと思うんです。特に球技大会、男子クラス対抗リレーの選手に選ばれてしまったから」

「選ばれて、しまった？」

少し驚き目をしている佐川さん。なんだか、ひきずられそうだった。

「そうなんです。これも新井林くんから聞いたことなんですけど、立村先輩本当だったら、毎年恒例の卓球競技に出てそれで終りなはずだったそうです。卓球だけはあの先輩、ものすごく強いんです。でも今年から、卓球がなくなってしまって、出る競技が見つからなくて、仕方なく男子リレーの方にまわされたって話です」

「けど、それ聞いたらおとひっちゃん、感動すると思うけどなあ。ほら、あいつ、元陸上部の長距離やってたからさ」

関崎さんがすごいことは想像がついていたけれども、私はそんなのよくわからない。

だってあまり、関崎さんには興味がないから。梨南ちゃんの恋する相手、としか頭に焼きついていない。タイプではない、というよりも、どこことなく考え方が単純すぎて、話していても面白くなさそうな人だった。

佐川さんは私のつまんなさそうな様子をすぐに勘付いたのだろう。話を元に戻した。

「それで、立村って男子リレーに無理やり入れられたのかな。そんなに足遅いんだ」

「新井林くんが言うには、百メートルのタイムがだいたいクラスで五番か六番くらいなんだそうです。でも、今年、中体連の大きな大会と球技大会とが重なってしまって、いつも出るはずの陸上部員さんが出られなくなったんだそうです。それで、繰り上がりで自動的にってことみたいですよ」

あえて「新井林くんが」と繰り返した。

「ふうん、そうなんだ」

「でも、繰り上がりですからどうしても、最初の三人メンバーとは力量が違い過ぎて、ここ最近
は毎日ごかれているらしいって話、聞いてました。噂話ですから本当のこと、わかりません
けど」

「想像、できなくもないか」

佐川さんはあごのところにげんこつをふたつ、ちょこんとのっける格好でひざにつぶした。
「それに学校祭がからむってわけか。たいへんだよなあ。おとひっちゃん、生徒会に入ってから
陸上部やめたしさ。とにかく、今はそれどころじゃないってことなんだね」

私はしばらく佐川さんにいろいろ話をしていた。本当だったらこういうことは、健吾を通して
話すべきことかもしれない。すでに来年の評議委員長候補として、現評議委員長の立村先輩から
指導を受けている立場なのだから。私が間に入り込む必要はないはずだった。

「私、どうしても思うんです」

またひとり、おじいさんっぽい感じの人が目の前を通り過ぎた。

「どうしてあんなに、評議委員会にみんなのめりこめるのかなって、思うんです」

「健吾くんたちが？ 立村が？」

下から見上げるように、佐川さんは私を見上げた。子犬に似ていた。

「だって、いくら一生懸命に委員会準備をしたところで、やったことを誉めてもらえるのは生徒
会の人たちだけなんです。立村先輩も、新井林くんも、どうでもいいことに熱中して、結局先生
たちが評価してくれないまま終わっちゃうんです。もちろん顧問の先生とかは認めてくれるかも
しれませんが、でも、学校では結局」

「あれ、でも青大附中は委員会最優先主義なんだろう？」

「一応そうってますけど、最近は先生たちも、部活動や生徒会をやる人たちを誉めるようにし
ているみたいです」

意外そうな顔で、佐川さんは口をつぼめた。

「委員会の人たちが一生懸命がんばっているのはわかるのですが、ただそれだけって感じがして
ならないんです。もっと、やるべきことがみんなあるんじゃないかなってそんな気がして」

うまくいえなかった。語彙はそれなりに見つかるはずなのに、口からぽろんと出てこない。ど
の言葉を選んでも、嘘つきになりそうだった。

「もっとやるべきこと？」

「はい、評議委員会の人たちはなんで冬休みにビデオ演劇なんでやりたがるんだろうとか、規律
委員会の人たちはなんで『青大附中ファッションブック』にあんなに夢中になるんだろうとか。
もちろんそれは面白い人にとっては面白いのかもしれませんが、しょせん」

言っているのかな。迷う。人差し指をそっと唇に当てて見た。佐川さんもつられたように自分
の唇に触れ、すぐに離れた。

「しょせん？」

「学校の中のことだけであって、関係ない人にとっては関係ないんじゃないかなって思うんです。私の考え方って、やっぱり、おかしいんでしょうか」

時計の文字盤を握り締めるようにして、私は続けた。

「私だったら、交流会、もっと、もっとすごくやりたいのに。評議委員の人たちだけじゃなくって、一般生徒の人たちと交流もっとできるようなって。そうすればいいのになって」

そう、佐川さんは実質、生徒会とは関係ない人だった。

「親友」の関崎副会長の付き合いで知り合うきっかけは得たけれど、本当はまったく関係のない人だった。本当だったら健吾を通してしか、お付き合いする機会のない人だった。

「そうか、そうなんだ」

もう一度佐川さんは、座ったまま前かがみになり、げんこつの上にあごを乗せた。

「だったらさ、佐賀さん、そうすればいいんだよ」

少し冷たくされたような気がして、涙が出そうになった。どうしてだろう。健吾にはこんなこと感じたことないのに。佐川さんの言葉って、いつもは温かいのに、たまにこういう風に突き放されてしまう。甘えすぎだよ、そう言われているみたいだった。健吾には一度もこうされたことないのに。すぐに佐川さんはいつものようにやさしくしてくれる。その笑顔が元に戻るまでの間、思いっきり泣きたくなくなってしまう。今もそうだった。佐川さんはどうでもいい風に、言い放つ。

「佐賀さん、本当はやりたいこと、いっぱいあるんだろ？」

「私、もう梨南ちゃんと離れたし」

「あの人は最初からいなくていいんだから、計算になんて入れてないよ」

また、ぐさっとくる。唇をかみ締める。

「俺、よくわからないんだけどさ。今の佐賀さん、なんだかつまらなさそうに見えるんだ。いや、手を抜いてるとかそういう意味じゃないよ。一学期の頃はすっごくさ楽しそうだし。だけど、夏休みあたりからなんだか違うんじゃないかなって気がしてならないんだ。なんとなく、俺が感じるだけなんだけどね。やりたいことをぐぐっと飲み込んで、知らないふりしてるだけなんじゃないかって気がしてならないんだ。俺の直感で」

「直感」……佐川さんのよく使う言葉。

「佐賀さんは今、評議委員で、クラスの女子たちからも信頼されて、困った人間からは離れていられて、健吾くんには宝物みたく守られてるよね。本当だったらさ、それで満足するって男子はみんな思うな。けどさ、俺が見た感じだと、佐賀さんそんなのだと面白くないのかなって気が、すっごくするんだ。守られてるだけじゃやだなって、思っていないのかなあ。小学校の頃の俺見ているようでさ」

「佐川さんと、似ているってことですか？」

問い返した。やさしく顔をほぐす笑顔。よかった。怒られてないんだ。

「俺、おとひっちゃんにずっと守られてきたんだよね。弟分だったし。けど、中学入ってやっぱりそれは違うなって思うようになったんだ。小学生の頃の俺だったら、佐賀さんにこうやってま

じめな話なんて、絶対してないよ。きとおとひっちゃん通じて、健吾くと連絡しあう程度だよ。けど、何かが違うって思ったとたん、世界が変わったんだ」

「世界ですか？」

「そうなんだ。だからかな」

いきなり佐川さんは立ち上がった。時計を除くしぐさ。もう閉館時刻なのかもしれない。たった今来たばかりなのに、もう一時間も経ってるなんて、思いたくない。

「俺もそろそろ、店の手伝いしなくっちゃなあ」

「あの」

受験勉強はどうされてるんですか？ 尋ねようとした。見透かしたように佐川さんは頭を掻きながら、

「俺、学校の成績ぼろぼろだから高望みしてないんだ。ほら、言ったよな、俺、青潟工業受けるつもりでいるんだ。たぶんあの程度だったら大丈夫かなって思うんだけどさ」

私は黙っていた。佐川さんは口先で「成績が悪い」とか言うけれど、ほんとはそんなこと爪の先ほども思っていないって知っている。「学校の成績」は悪いけど、「頭」の出来とは違うんだってこと、わかってる。

たぶん、佐川さんに出会わなかったら、私もわからないままだったと、思う。

郷土資料館を出る時、水鳥中学の人たちと顔を合わせない用心のため、私が先に帰るのがいつものパターンだった。五時だけまだ夕暮れ道は明るかったし、二人で歩くななんてこと、できるわけがなかった。もし「さっきたん」と呼ぶあの人に会ってしまったらどう言い訳すればいいんだろう。もし健吾と鉢合わせしてしまったらなんて考えると眠れなくなりそうだ。

でも、佐川さんと会うには、健吾と「さっきたん」さんの存在が、どうしても必要だって、私にはわかっていた。佐川さんもあえて口には出さないけれども。お互いの会話で、「健吾くん」「さっきたん」「新井林くん」「水野さん」、ふたりの名を混ぜないことはなかった。くるっとコンパスで円を描き、その輪の上をとことこ歩くのが、私と佐川さんとの関係なのかもしれない。

「暗いから、バス停まで送るよ」

「あの、でも」

「言い訳は考えてるから大丈夫」

私と肩を並べると、やはり同じくらいの背丈しかなかった。もしかしたらうちのクラスの、一番背の低い男子と同じくらいかもしれない。もし一年遅れていたら、同級生だったかもしれない。そうしたら私も佐川さんを「くん」付けして呼んでいたかもしれない。

「私、どうすればいいんでしょうか」

「それは佐賀さんが決めればいいことだよ。俺は知らないよ」

また、ひゅんと冷えてくる言葉に、項垂れる。佐川さんはすぐに勘付いたのか首を小さく振って、

「佐賀さん、今、学校で誰とつるんで遊んでる？」

「ええと、遊んでません」

厳密に言うと、必修の刺繍クラブで一緒になったD組の子たちとたまにおしゃべりしたりはしている。クラスの女子たちとは当り障りのないことしかしゃべらないし、梨南ちゃんのことも考えてあえて聞き役に徹していた。もっともそれほど苦しいことはなかった。小学時代の友だちがたくさんいたし、それに健吾にもしっかり守られている。淋しくはなかった。

「そうなんだ、じゃあ、もし何かしようとする、ひとりぼっちになっちゃうんだよね」

「かもしれません」

「だったらさ、佐賀さん、俺とまず約束してくれないかなあ」

佐川さんはいきなり立ち止まり、小指を出した。

「まず二人、味方の女子を作るって」

「味方？」

「そうだよ、もし本当に、やりたいことするんだったら、あの学校では誰か味方が絶対必要だよ。女子の味方だよ、絶対にさ」

健吾、ではない。承知していた。

「そうしたら、俺も佐賀さんがどうしたいか考えて、いい方法見つけるよ」

「本当ですか」

その時の私は、佐川さんが何を言いたいのか全く想像つかなかった。

「指きりできる？」

「はい」

初めて指を絡めた。やわらかいけどちょっとだけささくれてて痛い佐川さんの指先。触れている間、健吾に「おしおき」されている時より、身体が震えた。

——親友。

もう、私にとって梨南ちゃんがそういう存在でないことだけははっきりしていた。

離れて淋しさを感じなくなった相手は、私にとって「どうでもいい人」なのかもしれない。

その感覚にまだ慣れないでいる。そう思ったらいけない、六年間、曲がりなりにもふたり仲良しでいたのだし、命令されることも、わがままに引っ張りまわされることも、言いなりになる振りをしたことも、自分の身を守るためにはしかたのないことだとも感じていた。そうしなくてもいい学校生活が存在するなんて、青大附中に進学するまでは想像したこともなかった。

でも、梨南ちゃんから離れて以来、何かが変わった。

一本調子の「はるみ、いったいなんでこんな見苦しい格好をしているわけ。きちんと礼儀正しくしなさい」と、髪形を指差すしぐさを一切視界に入れる必要がなくなってから、深呼吸が思いっきり深くできるようになった。呼吸するって、こんなに、空気いっぱい、肺に入ることなんだったって感じた。

もう、元に戻ることもなんて、考えられなかった。

——もし本当に、やりたいことするんだったら、あの学校では誰か味方が絶対必要だよ。女子

の味方だよ、絶対にさ。そうしたら、俺も佐賀さんがどうしたいか考えて、いい方法見つけるよ。

佐川さんがいい方法を見つけてくれるというのなら、必ず、大丈夫。

紺色の刺繍布にひしゃく星を刺繍した空が広がっている。明日は必修クラブの日だ。

そうだ、やってみよう。私はさっきまで佐川さんの指に絡んでいた小指を握り締めた。

学生服の後姿に約束した。

一年の教室はA組からD組まですべて、必修クラブ用の展示用に使用されていた。

去年までは大抵、各委員会ごとに一部屋ずつ与えられていて、そこからみな準備をしたり指示を出したりしていたのだけれど、いろいろあって今は三階に追いやられていた。三年評議委員の人たちと健吾以外の評議委員は、時間の割り当てさえ守ればあとは特にすることもなく暇だった。

私は一年B組の教室へ向かった。刺繍クラブの展示室だった。去年までは自分の教室だったはずなのにすっかり記憶が薄れてしまっている。壁一杯に飾られているタペストリー、机を固めた島の中にちんまりと収まっているクッションや手提げ袋。ひとつひとつ眺めて行くと、みな欲しくなってしまう。ファンシーショップで選んでいる時と同じ気分だった。

「ハルのが一番、すごく目だってるね」

隣で風見さんがささやいた。私の作品まん前で、人差し指を突き刺すようにして頷いている。机がわから振り返ってみた。マッシュルームカットが全くはねずに整っている風見さんの髪。つるんとすべりそうなほどに光っていた。

「だってこれ、キットになっているのをそのまま刺しただけだし」

「でもこんなに細かく色を変えてこしらえるなんて、ハルみたいに根気がなかったら続かないよね。一番私、好きだよ」

クロスステッチ用の刺繍布は、たてと横交互に織られていて、近くで見ると市松格子に似ている。男の子と女の子が手をつないで、ハート型の枠に収まった結婚式風のものだった。淡い桜色の刺繍布にそのままxで刺していっただけだった。たぶん、誰でもできると思う。夏休みと必修クラブの時間をたっぷり使って完成させたタペストリーだった。飾ることも考えて、四方の布端から横糸を抜いて、フリンジっぽく仕上げた。これは私のオリジナル。気に入っている。

「ありがとう、風見さんののも好きよ」

「ああ、あれね。私もハルみたいな感じで刺したかったんだけどね。時間オーバーしちゃったんだ」

きのこちゃんと言いたくなるような髪を崩さず揺らし、風見さんは私の隣に並んだ。机には「2D 風見百合子」と名札が置かれている。ちゃんとお上品に、ランチョンマットとコースターが並んでいた。

「もっと色をたくさん使って、ハルみたいな可愛いものにしたかったんだけど。やり直しばかりで結局ブルーにしちゃったんだ」

小花模様が四隅に施されていて、途中に螺旋っぽいラインで繋がれている。深い水色に白の刺繍布。「ロイヤルコペンハーゲン」だったかな。確かそういう有名な食器があって、その柄に似ていた。地味って言うけど、可愛いと思う。そう伝えると、

「先生にも言われた。北欧風ですねって。でも私は、思いっきり明るいアメリカムードが好きなんだけどね」

また私の作品に向かった。壁につるされているせいか、自分の刺した作品でないみたいだった。時折光が入ってきて、刺繍布が白っぽく見える。

誉め殺しじゃないかって思うくらい風見さんは私の作品を絶賛した後、次に他のクラブ員たちが刺した作品を批評していった。「感想」ではなく、「批評」だった。それも「毒舌」の。

「いっちゃんだけど、なんでみんなやたらとテディベアにこだわるんだろうねえ。それにこれも、なんだか手は込んでるんだろうけど、見てて目が痛くなりそうな幾何学模様、こういうの私大嫌い！ それよりもみんな、観ていてほっとするものもいいのにね」

「テディベアは私、嫌いじゃない……」

「ハルはいいのよ。ハルはいつも、明るい色合い選ぶでしょ。刺繍キットって言っても、こういう風にふわっと明るい、見ても刺しても幸せな気持ちになれそうなものを選ぶよね。でも、これなんでなんで好き好んで『モナリザ』刺したがるわけ？ こんな陰気な絵、見たって嬉しくならないよ。百歩譲って原画はいいかもしれないよ。でも、クロスステッチでこんなのこしらえてもいやあな気持ちになるだけじゃない。ほら、これだって……」

風見さんの好みはなんとなく私も似てるなって思った。

私も、モナリザや渦巻きや、猫のしましま模様っぽいものとか、あまり選びたくない。

いくら「大人っぽくて上品」と言われても、なんか抵抗がある。

頷きながら一通り、風見さんの厳しい批評を聞き終えた後、私は時刻を確認した。

今日は評議委員会の手伝いがない日だから、大丈夫。

「少し、お茶飲まない？」

「待ってました！」

細い目で微笑んだ風見さん。私の手を取るとすぐ、「お茶場」と呼ばれる家庭科室へと向かった。一階で奥まった部屋だけど、大抵の人たちはここか、大学の学食かのどちらかで休んでいるはずだった。一部の生徒を除いては。

「ハルは何にする？」

「うん、紅茶がいいな」

ポップコーンが入っていきそうな大きい入れ物にたっぷりアイスティーを注ぎ、風見さんは座っている私に持ってきてくれた。自分用にはサイダーを選んだみたいだ。喉が渴いてしまったせいか、ストローでぐいぐい飲める。他の生徒たちがちらちらと私たちを見ているのにすぐ気付いたけれども、風見さんが全く気にしていない様子なので私もそうした。

「風見さん、今日は他の友だちと一緒に見て歩かないの？」

「うん、みんな生徒会に行っちゃってるし、いつもつるむ必要もないしね」

「そうなんだ、生徒会なんだ」

「ハルもきっと忙しいんだろうなあって思ってたんだけどね、でも誘ってよかった」

またにっこりと笑う風見さんは、なんとなく小人のお姫様っぽく見えた。

私の目の高さくらいの背丈で、もしかしたら下級生に見えるかもしれない。切れ長のまなざしも、おちょぼ口もそれほどきつそうには見えない。毒舌批評家な部分を見せなければ、日本

人形っぽくて可愛いものになって思う。

「風見さんは委員会に入っていないの？」

「うん、最初っから考えてなかったし」

投げ出すように答えた。聞いちゃいけないこと、聞いちゃったんだらうか？

「もし入るとしたら評議委員会だったけどね、なんだかちょっとね」

言葉を濁した。もちろん青大附中内の委員会事情は重々わかりきったことなので私もそれ以上問わないでおいた。

「でも、ハルはえらいよね。途中から参加して、ちゃんと実績あげてるんだもんね」

「そんな、たいしたことないわ」

「だってすごいよね。あんな酷いことした人をちゃんと、宿泊研修に参加させてあげて、文句言わせないようにきっちり最後までまとめたんだもん。女子でそこまでできる子って、いないと思うなあ。私の友だちもみんな言ってたよ。佐賀さんってすごいねって」

「ありがとう」

露骨に否定するとかえって風見さんを傷つけてしまう。だから素直に受け取った。

実際、その通りではあったのだから。

「でも、ハルも今日はのんびりしてられるよね」

「うん、でも何もすることないのも、淋しいわ」

正直なところ、評議委員会でもっと仕事をもらえるのかと楽しみにしていたんだけど、健吾たちや先輩たちにすべて取られてしまった。あまり強く言うのもなんなのですぐに出てきたけれども、私だったらもっと上手にお手伝いできたのに、そう思うところもある。

「学校祭って委員会に入ってる人にとっては面白いけど、私にとっては正直、なんだかなって気がするなあ。だって、こうやってハルが今日付き合ってくれなかったら、私ひとりなんだもん。つまんない」

なんでだろう。やたらと風見さんは、「ハル」と私を呼び捨てにする。

今までいろいろと呼ばれてきたけど「ハル」なんて初めてだ。

「でも、風見さんにはクラスの女子がいるでしょ。それに生徒会の」

言いかけたところでまた、マッシュルームの頭がぶんぶん揺れた。

「違うって。もちろん友だちはいるよ。でもみんな、それぞれ行きたいところがあるし、私もしたいことがあったしね」

「したいこと？」

「まあいろいろとね」

ずずっと音がする。風見さんがもう、サイダーを飲み干したらしい。紙コップの中の氷をつついていた。

「でもほんっと、今回は先生たちよくぞやったって誉めてあげてもいいかも」

「何を？」

いきなりなんだろう？ 先生たちを誉める？ 風見さんはいつも、先生たちに対しても容赦なくこき下ろす人だ。珍しく認めるなんて、いったいなんだろう。

「だってね、私たちがお茶する場所をちゃーんと用意した上でね、三階の特別喫茶を設置するってのが、うまいよね。誰も文句言えないよね」

「ええ？」

戸惑った。三階には確かに特別喫茶が設置されている。最奥の音楽室を利用する形で、お茶と珈琲、それとお菓子クラブの生徒たちがこしらえたケーキを用意する場所がある。もちろんその辺に関する事情は健吾を通じてすべて知っているけれど、まさか風見さんも聞いているのだろうか。用心深く探りを入れた。

「三階の喫茶よね、うん、知ってるけど」

「生徒会の子から聞いたけど、あそこの運営を任された生徒さんたちって、E組の人たちと聞いてるんだけど、ハルもその辺は知ってるよね」

「～よね」と言われて、頷くしかない。やはり、かなり深いことを知っているを見た。

だってE組、の名を出すんだもの。

「さっき、クラスの子が偵察に行って紅茶飲んできたらしいんだけどね、味は本格派だって。美味しいんだけど、それ以上に何かもやっとするものがあるって、もう二度と近寄らないって誓ったって話してたよ」

「混んでるのかしら？」

今、私たちがいる「お茶場」もかなり席が密集している。たまたまふたりだから相席にならないですんでいるけど、ひとりで立ち寄った人たちは大抵「一緒に座ってくださーい」と半強引に勧められている。

「一応ね。来る人がもう決まりきってるみたいなんだ。ほら、三年の女子先輩でいたでしょ。クラスの男子に振られてしつこく追い掛け回して、結局口が利けなくなっちゃったっていう自業自得の人いるじゃない。あの人ひとりでウエートレス役してるみたいなんだ。あの人との友だち関係とか、あと学校の来賓関係とか、父母とか。とにかくE組がらみの人たちの溜まり場っぽい。まあね、珈琲も紅茶も本格派だったら、普通はそこに行くよね。チケットだってことそう変わらないんだし。でもね、やっぱり、私、お茶を飲むって『雰囲気』が大切だと思うんだ」

雰囲気、か。だんだん意味が伝わってきた。

たぶん、そういう感じだ。

「大人っぽい感じも悪いとは言わないけど、やっぱり私はハルとこうやっている方がいいよね。お茶を淹れている人の気持ちが伝わってくるところは選びたいもんね」

「きっと、美味しいとは思うんだけどな」

私はすべてを了解した。風見さんの眼を見つめて、ゆっくりと答えた。

「梨南ちゃんは、お茶の淹れ方に関しては、厳しいから」

梨南ちゃんが現在、一部の授業以外をE組で過ごしていることを、きっと風見さんは知っているはずだった。そして、本来だったら宿泊研修も別にする予定だったってことも風の噂で聞いていたに違いない。私は確認していないけれども、あれだけ去年の事件が派手だったことを考え

れば、納得できないこともない。

さっき風間さんは私に、「宿泊研修に参加させてあげて」と褒め称えてくれた。

これは全く嘘ではない。

本当だったら梨南ちゃんは、2Bの宿泊研修に参加しないはずだったのだ。担任の楢山先生も了解していたようだし、梨南ちゃん本人が私と顔を合わせたくなかったらしくて、とのことだった。

それを健吾が小耳にはさんできて、私に尋ねたのだった。

「あの女を露骨に無視した形で、宿泊研修を終わらせるべきだと思うか？」と。

正直なところ、梨南ちゃんを一切無視した形でもって準備をすすめてきたし、抵抗がないわけではなかった。一瞬だけ迷った。でも、私はすでに2Bの評議委員だ。全く関係のないクラスメイトだったらそれでもいいけれども、評議委員の立場できっちりと判断しなくちゃって、そう思った。だから、

「いいわ。私も梨南ちゃんの扱い方、わきまえてるもの」

笑顔で答えた。実際、その通り、うまく二泊三日の旅行が終わったのだし、梨南ちゃん以外の女子からも私を評価してもらえたし、実際大成功だと思っている。梨南ちゃんは旅行中最低限の口しか利かなかった。できるだけ浮かないようにと思って、2Bで少し、ずれ気味の女子グループに混ぜてあげたのが一番の成功原因だと思う。とりあえずは一人ぼっちにならないですんだだけでも、よかったのではないだろうか。

健吾にも後で、思いっきり頭を撫でてもらった。その後でぎゅっとされたのだけは余計だったけど。

でも、風間さんに知られているってことは、他の女子たちにもそうなんだろうな。

なんだか、私のことを買いかぶられていそうで、ちょっぴり怖い。

「私の情報はみんな、生徒会ルートで流れてきていることだからね。間違ってたら注意して」

風間さんは紙コップを机に置いたまま、指を折りながら話し始めた。まだ私の紅茶が残っているので、混んでても追い立てられないですむ。

「はっきり言って学年一番のガンって言われている子いるでしょ。あの子がまた、評議委員会に茶々入れようもんならたいへんなことになるってみんな思ってたらしくって、先生たちが先に動いたんだって聞いたよ。先生たちが、E組の問題児二人に、特別喫茶店の運営を任せて、究極の紅茶と珈琲を用意させて、自己満足させようとしたらしいってこと。だよな？」

私は首をかしげたまま動かずにいた。うっかり誤解を招くことは、まだ避けたい。

「E組担当の駒方先生が中心になって、どんどん準備を進めて、テーブルクロスからお茶の淹れ方から飾り付けから、みんなあの二人にやらせたらしいよね。ふたりでもできることだろうし、なんでも刺繍はあの子が全部やったんだって？ 幾何学の気持ち悪い刺繍で。黄色の糸でね」

ああ、大体わかるような気がした。梨南ちゃんの好きな柄は、ルノワールの絵画か、あとは同じ柄が繰り返されている幾何学模様だった。風間さんの好みとは全く異なるはずだ。

「結局それで時間を食ったから、ふたりが評議委員会関連に手を伸ばすことがなくて、しかもこ

この運営は例のふたりと駒方先生、あとたまに狩野先生がいるだけ。だから二人が他の場所に顔を出す可能性も少ないってことよ。ある意味、監禁よね」

すごいこと言ってるけど、でも外れてはいない。

生徒会を通してそこまで情報が流れているなんて、侮れない。

「ハル、ほんとよかったよね。これであの子としばらく顔合わせなくてもいいね」

私はしばらくうつむくことにした。話を逸らした。

うっかり本当のことを口にしてはいけない。言葉少なく過ごすのが、今の私にとって一番の盾。

厳密に言うと、梨南ちゃんと西月先輩を三階音楽室内喫茶店に閉じ込める計画を立てたのは、三年男子評議委員の先輩たちだった。私は健吾からそのあたりを聞かせてもらったけれども、ある程度は想像で補っているところがある。

「しゃあねえだろ、立村さんがあいつのことを面倒見てるのは趣味なんだ」

健吾はあきれ果てた風に、舌打ちしながら私に話していたっけ。

「つまり、あいつらをな。立村さんがまたなんか引きずりこむんでないかって三年評議が騒いでてな。立村さんには内緒で、先生たちに話を通したらしいんだ。E組メンバーをなんとかしてくれってさ」

意外に見えるけど、正しい判断だと私は思う。

公私混同なんてよくないって私も思うから。

「駒方先生も即、了解したんだ」

最初からその辺は考えていたんじゃないかな。きっと駒方先生も、梨南ちゃんがやりたがっていることを他人の迷惑にならないようやらせたかったんじゃないかな。その辺と、三年の先輩たちとの意志が重なったってわけなんだもの。うまくいったんじゃないかって私は思う。

「けど隠し事するってのは俺もどうも気に入らねえ。だからちゃんと天羽さんたちにも言ったんだ。立村さんに話通してからにしろって。一応俺も、来年は評議委員長なんだしな。ここがちょっと間違ってることは間違ってるって言わねえと」

「でも、立村先輩は怒らなかったの？」

健吾は鼻の下を手の甲でこすった。

「俺は見てねえけど、天羽さんたちが言うにはそりゃあもう、すごい剣幕だったらしい。けど、結局は納得したみたいだな。なんだかんだ言って、時間あればE組連中の喫茶の準備手伝おうとしてたしな。もっとも、評議委員会主催のクイズ大会や水鳥中学との交流会第二弾準備で忙しくてたいしたことはできなかつたらしいけどなあ」

ふうん、なるほど。私はあまり口にしなかった。健吾には言葉を選ばなくてはならない。ずっと幼馴染でいたゆえに、そのあたりはすでに読み込み済みだった。

青大附中の学校祭は、主に来年受験予定の小学生および親子、また他の学校から来る生徒会関係の交流会も兼ねていた。今年は特に、水鳥中学との交流会が一学期中に行われたこともあって

、だいぶそのあたりが盛り上がっているとは聞いていた。もっとも接待する役は大抵が生徒会で、評議委員会の出番は現・次期の委員長のみだという話だった。

だからか。

たぶん、立村先輩は、梨南ちゃんをそこらへんでからめたかったのではないだろうか。

私でもそのくらい見当がつくのだから、三年の先輩たちがぴんどこないはずがない。

完全に梨南ちゃんを評議から引き離すと口先では言っておきながら、何かあるとすぐに「杉本、ちょっと来てくれ」と声をかける立村先輩。どうしてなのかも、きっとある程度周囲の人たちは勘付いているに違いない。

ひそかに「影の評議委員長」と噂されている3Aの天羽先輩が仕切ったとすれば、頷けなくもない。やっぱり、立村先輩と梨南ちゃんとの関係は、誰の目にも明らかだろう。今一応、立村先輩は同じ評議の清坂先輩と付き合っているけれども、梨南ちゃんがもう少し積極的にがんばればすぐに陥落するに決まっている。これも、私だけではない、他の人たちみな同意することだと思うのだ。

「あのね、風見さん」

「ドリって呼んでよ」

追加注文したドーナツ五個入り袋を、風見さんが広げた。チョコのかかった固めのドーナツをほおぼりながら、細目の笑顔を満開にさせて。

「私と仲いい子ってみんな『ドリ』って呼ぶんだ。むかつく奴から言われたら無視するけど、ハルには絶対、『ドリ』って呼んでほしいな。いい？ これからは『ドリ』だからね！」

なんで「風見百合子」が「ドリ」なんだろう？

由来が意味不明だったけど、マッシュルームから覗く目がちょっと怖かったので、ここは縦に大きく頷いておいた。「ドリ」と舌に乗せようとして、ためらってしまった。

「でもどうして、『ドリ』なの？」

両肘ついて、拳骨の上にあごをちょこんと乗せた。佐川さんを思い出した。細い目がいきなりまん丸になると、さらに似ている。

「私、小学一年の時、クラスのお楽しみ会で漫才ごっこやったんだ。その時にね、芸名付けたんだけどね」

両腕をがばっと広げた。私は加えているストローを思いっきり噛んだ。

「『かざみどりゆりこでございます！』ってね、名乗りを挙げたら大受けだったわけ。それ以来、『風見鶏』から苗字をはずして「ドリ」になったってわけ。これ、親友にしか教えない秘密なんだよ。ね、ハル、これから私のことを『風見さん』なんて呼んだら、返事しないぞ！」

正直、困ったなって気が、しなくもなかった。

だって、親友って。

——怖い。

「ほら、ハル、呼んで見てよ。『ドリ』って」

仕方なく私は首を寝かせたまま、舌を震わせた。

「うん、『ドリ』、ドーナツふたっつわけしょっか」

風見さん……やっぱり私の中ではまだ、苗字で呼びたい気分だった。

風見さんとしばらくおしゃべりした後、

「そろそろ戻らなくっちゃ」

一瞬でも切り上げ時を読み間違えたら、また話が長引きそうだったので、まずは立ち上がった。かばんも持った。

「ええ？ もう行っちゃうの？」

「うん、評議委員の仕事がまだあるかもしれないから」

本当は健吾のご機嫌伺いだけで、二年評議女子が動く必要なんてないのだけど、だらだら語っているのも落ち着かない。目の前の風見さんはかくっと首を切られたように項垂れた。そんなに極端に落ち込まなくたっていいのに。だって風見さんには私よりもクラスの女子友だちがたくさんいるじゃない。

「うん、じゃあ、また明日ね」

コップとドーナツの入っていた袋を捨てて、もう一度挨拶をして廊下に出ようとする、風見さんがまた追いつがってきた。

「そうだ、ハル、聞いていい？」

胸ポケットから生徒手帳を取り出し、開いて私に見せた。オレンジ色のシャープペンシルが刺さっている。アドレスページだった。たくさん女子の名前が並んでいた。

「これに、電話番号、書いといて」

「ええ？」

「あとで電話できるじゃない」

もちろん、女子同士、なかよし同士、電話番号を交換しあうことは普通のことだった。めずらしくない。私の場合だと、一年の頃から梨南ちゃんと健吾がらみのトラブルもあって、同じクラスの女子とは直接電話番号交換をしたことが全くない。恐らく頼めばもらえるのかもしれないけれど、どうせクラス連絡網もあるし、年賀状も無理に出す必要がないし。小学校時代の友だち以外、アドレスを持ってはいなかった。

ただ風見さんとは、そこまで言われるのなら電話番号くらいいいかもな、とは思った。クラスが違うと電話番号を知る方法も、まずないから。

私は簡単に「佐賀はるみ」と電話番号だけを書き記した。住所は書かなかった。

「ありがとう！ じゃ、あとでね」

手を振って別れた。

——なんで風見さん、私と友だちになりたがってるのかしら。

もちろん、私にも友だちがいないわけではなかった。ほとんどが小学校時代の友だちで、梨南ちゃんと縁を切ってからその繋がりはさらに強くなったような気がしていた。みな、心ひそかに梨南ちゃんへの抵抗感を感じていたんだなって、初めて気がついた。

でも風見さんの個性は、今まで友だちでいた子たちとはなんとなく違っていた。

元気で、笑顔で、物事すばすば言って、それが嫌味にならない子。

私のことを応援してくれる女子。

刺繍クラブの席でたまたま一緒に刺していたグループの子。

まあ、B組の女子たちと社交辞令めいた言葉をやり取りするよりは、風見さんと一緒に行動するのもいいかもしれない。今のところ、まだ私の中では「ドリ」と呼ぶところまで来ていないけれども、流れに沿ってその辺は合わせていこう。

私は三階へと向かった。

風見さんがさっき用心するように話していた音楽室をうまく迂回し、反対側の階段から昇っていくと、そこには視聴覚教室が用意されている。もちろん今日は学校祭だから、学校のビデオ上映で占拠されているのだけど、隣の準備室を特別に今回、評議委員会用に使わせてもらっていた。ビデオやデッキやいろいろなものが積み重ねられているけれど、大きめの机を並べるだけのスペースは保たれていた。ただ、全学年の評議委員が座るだけの広さはないので、結局のところ健吾をはじめとする男子評議の二年、三年が入れ替わり立ち代り利用するだけだった。無言のうちに女子は追い出されている感じだった。

女子の先輩たちもかなり文句を言って立村委員長を責め立てていたけれど、結局押し切られたようだった。それならそれで、という感じでみな別の場所に自分の仕事場を用意しているのだから、それでもいいのではという気もした。

ノックして、一声かけると、「どうぞ」と女子の声が返って来た。

たぶん三年の轟先輩だ。少しかすれた感じ、ハスキーボイス。

「ああ、佐賀さん？」

てっきり轟先輩だけかと思ったら、奥の席に天羽先輩と更科先輩が仲良く肩を並べて座っていた。轟先輩はノートを持って、無理やりっぽい笑顔を作った。そんな無理しないでもいいのに。笑っていてもそうでなくても、轟先輩のかもしれない出す雰囲気は変わらない。

「ああ、新井林ならな、立村と打ち合わせしてるよ」

穏やかに天羽先輩が扉を指差した。さっさと出て行けってことだろう。更科先輩がにこやかにうんうんと頷いた。天羽先輩が大きな狒犬だとしたら、更級先輩はチワワ。二匹のお犬さまとの対談中を邪魔してしまったみたいだった。

「たぶんすぐ用事終わると思うから、行ってみたら？」

轟先輩がまた促す。相当私がいると困るのだろう。

「どこで打ち合わせしているのでしょうか」

「たぶん、喫茶室の方だと思うよ」

更科先輩がまたこくこく頷きながら、壁を今度は指差した。

「そうですか。探してきます」

私は一礼して、視聴覚準備室から出た。

三年の先輩たちと接する時は、できるだけ物事を波立たせないように気をつけているつもりだった。やはり、事情があるとはいえ、生え抜きではない評議委員は浮いてしまうのもしかたのないことだと覚悟はしていた。健吾にも言い含められていた。梨南ちゃんとのこともあり、三年女子の先輩にいじめられるのも覚悟していた。

でも、なんとなくだけで、三年男子の先輩たちはそれほど私を嫌っているように見えなかった。もちろん一人を除いてだけでもだ。また女子の先輩たちも、清坂先輩と霧島先輩の二人が冷たい視線を投げつける以外はそれほどのこともなかった。「案ずるより産むが易し」って本当だって思った。今は私も、気兼ねなく健吾の側に座って評議委員会を眺めていられる。

私は部屋を出た後、少し迷った。

音楽室の方向へ進むべきか、それとも階段を下りて他の展示を眺めるべきか。

さっき風見さんも話していたけれども、音楽室は現在、「喫茶室」として梨南ちゃんと西月先輩の占拠地となっている。梨南ちゃんがもともと、おしゃれなお茶やお菓子に詳しいことは有名だし、きっと美味しい紅茶でもてなされるのだろうとは想像している。でも、ほとんどの二年生たちは……少なくとも梨南ちゃんがどういう子であるかを知っている人……は、決して近寄らずに一階のお茶場で喉の渴きを癒す。

ただ、先生たちや保護者の人たちはやはり、美味しい飲み物の方に惹かれるらしく、しっとりした雰囲気のにぎわっているらしいとも聞いている。梨南ちゃんもきっと、全身全霊で珈琲を注いでいるに違いない。西月先輩も口を利けないのは相変わらずだけど、梨南ちゃんのやりたいことをサポートするために学校祭前日までずっと準備に没頭していたという。三年女子の先輩たちが流してくれた噂によるとだった。

それはそれでいいのだろう。

私も、梨南ちゃんたちが一番落ち着くのはそのやり方だと思う。

なんで立村先輩が無理やり梨南ちゃんを手元に置きたがるのか、私には理解できない。

立村先輩の側でまた、評議委員会を始めとするあらゆる場所で不協和音が起きたら、今度はどう責任取るつもりでいたのだろう。

天羽先輩たちがその辺しっかり押さえたのは、正解だと思う。

一部の噂で、立村先輩よりも天羽先輩の方が本来は評議委員長としてふさわしいとされていたとも聞いた時、やはり第三者の方がはっきり見えるものなんだなって感じた。

どうしよう、それにしても。

健吾と会って、これから手伝いすることがあるのかどうかとか、帰ってもいいのか確認した方がいいのだろうか。

たぶん黙って帰ったら、健吾は百パーセント怒る。私に電話をかけてきて、「馬鹿やろう！　なんでさっさと俺に断りもなく帰るんだ！」

とか言い出すに決まっている。どんなに仕事がなくとも、健吾ってそういう人だ。目の前でなら私が何をしても許してくれるけど、そうでなければかっとなる。

やっぱり、無理にでも探して声かけた方がよさそうだ。あとあと罰ゲームみたいなこと要求さ

れるのも、ちょっと疲れる。

気乗りしないままつま先を音楽室へ向けた時だった。

ものすごい勢いで、手をつないだ生徒がふたり、駆け抜けていった。男子と女子とだった。ふたりとも見覚えのある顔だった。うち先頭のひとは、いやというほど顔を見つづけてきた女子だった。私と目が合ったとたん、露骨に横を向いた。私がいるということにすぐ気付いて無視したのだろう。一瞬、なんで罵倒されないで通り過ぎたのかわからず私は目で二人を追おうとした。と同時にすぐ気が付いた。もう一人の男子は、制服を着ていなかった。

——梨南ちゃん？

——あの男子、もしかして？

梨南ちゃんは制服姿で階段を降りる寸前、もう一度私をじろりとにらんだ。

威嚇した、という風だった。片方の手を、私服の男子に握らせるようにしている。私に何か言いたげに口を動かしたけれど、声は聞こえなかった。聞きたくもなかった。

その後正面をじっと見据えると、ちらっと後ろにくっついている男子に振り返った。手を振り払おうとしたけれど、その男子は幼くかぶりを振った。手をぶらんぶらんと動かした。

梨南ちゃんのポニーテールも一緒に揺れた。周囲ですれ違う青大附中の生徒たちが、
「手、つないでるんだあ」

面白げに眺めている。その視線から離れたように、また梨南ちゃんは手を振り解こうとする。相手の男子はまたぶらんぶらんと動かす。もちろん、手を握り締めたままだった。

私はその様子を黙って見つめることに徹した。たぶん、梨南ちゃんは私に絶対見られたくないだろう。目をそらしてあげるのももちろん礼儀かもしれないけれども、そこでもし梨南ちゃんがその男子を傷つけたとしたら、フォローするのは私の役目ではないだろうか。

だって、その男子は。

いきなりけらけら笑い出した。

まん丸い目で、坊主頭で。梨南ちゃんの手首をがっしり握り締めたまま。

「梨南、約束したじゃないかあ。僕と一緒に、学校一周してくれるって！」

——秋葉くんが、なんているんだろう？

「佐賀」

聞きなれたしゃがれた声が後ろから聞こえた。振り返ると健吾、肩を並べて立村先輩、もうひとり大人の女性が後ろに控えるように立っていた。私に軽くあごで、梨南ちゃんたちの方を見ると合図をした。立村先輩が少し私から離れるように身体をはずに向け、女性と話をしていた。

「どうもありがとうございます」

「いえ、これでよかったんでしょか」

「本当に助かったわ。ありがとうございますね。今日もし、梨南ちゃんに瞬が会えなかったら、

ずっと一日中いじけていたに決まっていますから。瞬ね、ずっと梨南ちゃんに学校祭を案内してもらえんことを楽しみにしてきたんですよ。カレンダーに花丸つけてね」

ジーンズにトレーナーといった、なんとなくだけど青大附中の校舎ではあまり見かけない格好だった。それもかなり染みだらけ。だいたい顔を見ていて思い出した。きっとこのおばさん、あの人だ。私は立村先輩と健吾の間に入って頭を下げた。

「こんにちは。佐賀です。秋葉くんお元気ですか」

「あら、はるみちゃん、お久しぶりね。梨南ちゃんと同じクラスなんでしょう？」

私は頷くだけに留めておいた。秋葉くんのお母さんがはたして私と健吾、そして梨南ちゃんを巡る修羅場を知っているかどうかはわからなかったからだった。

「健吾くんも大人になったわねえ。うちの瞬とは大違いだわ」

最初から、違うに決まっているのに。

健吾も苦笑いして頭を搔いた。

「じゃあ、これで俺たちも、帰ります」

「本当に、ありがとうございます」

立村先輩が少し困ったような顔をして、それでも評議委員長らしく、

「それでは音楽室までご案内します」

しっかり背を伸ばし、秋葉くんのお母さんを先導して行った。私と健吾が残されて、自然とふたりきり。健吾も私の顔をちらと見ると、階段の方へと親指を立てて誘った。

「お前、さっきまでどこいたんだ」

まただ。健吾は私がひとりで行動するのをものすごく嫌うんだもの。

「刺繍クラブの女子と一緒に、一階のお茶場で座ってたの」

「そうか、ならいい」

ちっともよくなさそうな口ぶりで、健吾は階段の踊り場まで下りていった。私も後に続いた。

「さっきまで何してたの」

「明日の準備だ。片付けとか、荷物出しとか、男子でないとやれねえことばかりだ」

「立村先輩も一緒に？」

「三年を立てないでどうするんだ、ったくばあか」

健吾はちらっと私を小突くようなしぐさをした。

「まあ、今回は仕事だったって三年が全部やっちまってるからなあ。俺としては楽だ」

「じゃあ、私、帰っていい？」

とんでもないって顔をする。やっぱりまずそうだ。でも私がいても、たいして役には立ちそうにないのに、どうしてだろう。

「何言ってるんだ。やること山ほどあるんだぞ。掃除とか」

「だって、さっき視聴覚準備室に行ったら、三年の先輩たちが密談してるんだもの。私は入っていけないわ。どこか別の場所とかないの？」

このあたりは事情ありらしく、健吾は腕組みをした。すっかり焼けた二の腕がぱりぱり言いそ

うだった。

「とにかく俺から離れるんじゃないわよ。それでいいだろ」

「いいだろうたって、私がつまらないわ」

「俺の側ならつまらなくねえだろ」

無理やりな理屈に、ため息が洩れる。健吾は訳のわからないことを言い出すくせがある。あまり抵抗しない方がいいのだけれども、なんだか私をもの扱いしているような時があって、少しいらいらしてしまうこともある。もちろん、私はそんなこと見せたりしない。かわりに、話を逸らす。

「あのね、健吾」

「なんだ」

「さっき、何があったの？」

二階の方でまた、ばたついた足音が響き渡った。普通のお客さんとは違う、スリッパのぺたぺたした音と上履きの出す音とは全然違う。生ぬるい笑い声がかすかに聞こえ、ついでに笑い声もほわっと広がっていた。なんだか純粹に面白がって笑うのではなく、馬鹿にしたような雰囲気だった。二階の階段をけたたましい叫び声と一緒に降りていくのを聞いた。

「梨南、次は一階だよ、一緒にジュース飲むんだよね！」

返事は聞こえなかった。しばらく無言で聞き耳を立てたまま、私たちは窓辺を眺めていた。中庭が見える場所だった。たぶんあの調子で走っていたら、梨南ちゃんと秋葉くんは中庭に出ていくだろう。たぶんここから、見えるだろう。

健吾はしばらく何かを飲み込むように喉仏を膨らませていたけれど、肩を落とすようにして、
「たいしたことじゃねえけどな、まさか秋葉がな」

鼻の頭をこすった。人の気配がして三階の階段を見上げると、手すりに手をかけるようにして立村先輩が立っていた。見下ろしていた。

「ああ、すみません、今行きます」

「いい、話が済んでからで」

すぐに姿が消えた。立村先輩はやはり、私たちがふたりでいると無意識のうちに遠慮してくれる。最初からそのあたりは計算済みなのであえて私の方から動かなかった。ただ健吾の方が少しおどついているようなのが意外だった。去年の今ごろ、立村先輩と評議委員長の座を争っていた頃に比べて一番何が変わったかということ、健吾が敬語を使っているってことだろう。少し違和感を感じてしまう。私が考えていることを健吾が見抜くわけがない。

「秋葉のかあちゃんがさ、ちょうど俺たちふたりで話している時に声かけてきたんだ。俺の顔覚えてたんだろうな。まあ、秋葉本人は俺なんぞ見たくもねえって面してたし、かあちゃんの尻に隠れてたけどな。とにかくあの女に会わせてほしいって言うんだ」

「健吾、案内したの？」

立村先輩がいるんだから、押し付けてしまえばよかったのに。

「しゃあねえだろう。一応は先輩を敬うのが礼儀だ」

男子の序列関係を叩き込むなんて。評議委員長に向けての指導って私が想像するよりもものす

ごく厳しいんだろう。あの健吾が梨南ちゃんのいるところへ人を案内するなんて、ものすごい変化だと思う。

「それで、騒ぎになったの？」

想像できることを尋ねた。健吾も小さく頷いた。

「そりゃあな。そうなるだろうな。けど、やっぱり秋葉の方が上だったってわけだ。小学校のいつだったか約束してくれたことをだ、あの女が果たさないのはおかしいって言い張って、しょうがないって感じで学校案内させることに成功したってわけだ」

「小学校のいつなのかしら」

「知らねえよ。なんでも『青大附中の学校祭に招待してデートしてあげる』みたいなことを言い含めたかなんかしたらしいぞ。秋葉が言うにはだ。かあちゃんもセットで喜んでるもんだから、あの女も逃げ切れなかったというわけだし、秋葉が騒ぐとしゃれにならねえし、他の連中も拍手で応援するしで、な」

大体想像がついた。秋葉くんが突きつけた約束。梨南ちゃんは約束したことを反古にするなんて絶対にしない。そういう子だ。どんなに理不尽なことであっても、どんなに惨めになったとしても、梨南ちゃんは約束を破ったりしない。

「秋葉くんは小一の頃から、梨南ちゃんが大好きだったんだもの。人前でそれを言いたくなるのも、無理ないわ」

私は思い出していた。

秋葉くんという子は、小学校一年の段階で同じクラスだった。別に人に迷惑をかけるとかそういうことはなかったのだけど、耳の遠い人のようなしゃべり方……内緒話ができないような大きい声を出す……こともあって、二年から四年まで特殊学級「ゆきのご学級」に回された。このあたりの事情は私もよくわからないのだけど、お母さんが言うには、

「秋葉くんのお母さんが、なんとしても普通学級に回してほしいと言い張って、学校が折れたらしいのよ。公立の小学校は、保護が必要な子に手をまわす余裕ないから、本来ならば特殊学級の先生に任せた方がいいのにな」

とのことだった。

なんでも大きい声で話す以外、特に問題を起こすこともなかったらしい。私もクラスが違ってからは全く思い出すこともなかった。

ただ、秋葉くんにとって梨南ちゃんは初恋の人だったらしい。

とにかく、梨南ちゃんを見かけるたびに、場所問わず、

「りなーん、あそぼー、一緒にあそぼーよ」

叫ばれると、やはり迷惑だとは思う。梨南ちゃんはとりたてて罵倒することもなかったかわり、秋葉くんが近づいてくる気配を避けるように努力していた。もっともそれはほとんど、かなわなかった。なにかかしらあると秋葉くんのお母さんが梨南ちゃんに、

「ほんと梨南ちゃんのおかげで、瞬はいつも楽しく学校に通えているのよ、ありがとう。これからもよろしくね」

そう「約束」させてしまったから、邪険にするわけにいなかったのだろう。

梨南ちゃんに「約束」させれば、大概のことは片付く。もっと早い段階でこの事実を知って利用すればよかったなって、今になって思う。

ちらちらと立村先輩が私たちを見下ろしている。言いたいことがあれば言えばいいのになと思う。だから無視している。健吾の方が少し落ち着かなくなっているけれど、ここで私が動かないとこのままでも問題ないだろう。

「そろそろ来るかしら」

私は窓から中庭を見下ろした。健吾も一緒に真似をした。ばたりばたりと階段をゆっくり降りる音。立村先輩が私たちの背後に立っているらしかった。健吾がまた、

「すいません、今行きます」

「いいよ、まだ急ぎじゃないからさ」

私は何も気付かない振りして、外に目を留めた。中庭では一年生主催の縁日が開かれている。そこで清坂先輩や霧島先輩がいろいろと声をあげて指導しているようすが窺えた。小さな子供用プールにいっぱい、水風船を浮かべている。まだ小学校くらいの子たちがしゃがみこむようにして見入っていた。

「立村先輩、私も戻ります。場所、使いますか」

「え？」

戸惑ったらしい。私は自分が今までいた窓辺を指差した。

「たぶん、これから梨南ちゃんたちがあそこに来ると思うんです。もし、何かがあった時、秋葉くんのお母さんに連絡できるかなって思うんです」

「何かって、そんなことはないだろう」

「いいえ、梨南ちゃんと一緒だったら、何かあるかわかりません」

私は言い切った。立村先輩の動きが止まった。

「私も、一階に下りて待機していた方がいいと思うんです。どうせ仕事はないようですし、もし何かがあった時にすぐ対処できるように」

「佐賀さん、その言い方はないだろう」

「今まで、梨南ちゃんのことですごくありすぎましたから、用心はした方が絶対いいと思うんです」

立村先輩は小さく首を振ると、私の隣まで来て、しっかりと中庭を見下ろした。

「降りるならそれでもいいけど、杉本を危険物みたいな言い方するのは失礼だよ」

いくらでも言い返すことはできる。梨南ちゃんが起こすトラブルに一番不安を感じているのは立村先輩なのだから。立村先輩が私たちをちらちら見ていたのは、梨南ちゃんが心配でならないって、私が気付かないわけがない。

「佐賀、やめろ。ほっとけ」

「だって、私も評議委員だもの、お手伝いしたいわ」

私はもう一度、立村先輩の隣に立ち、予想通りふたりが駆け抜けているのを眺めた。大笑いす

る声が背後からまた響いた。どうやら、ものすごく盛り上がっている中庭の様子を観覧したいと思っている人が、まだいるらしかった。ひとり、ふたりと増え、誰かの声がまた聞こえた。

「杉本とお似合いだよなあ、あの男子。誰？ 小学生？」

「本能をコントロールできない同士よね」

まさか、思わず振り返ると、私の真後ろにはいつのまにかマッシュルームの頭が揺れていた。どうしてここにいたんだろう。他の人たちも中庭いっぱい響く秋葉くんの声に聞き入っていた

。

「梨南、ねえ、ヨーヨー釣りしようよー。約束したよね。一緒に遊ぶって」

黙って秋葉くんの手をひっぱったまま突っ立っている梨南ちゃん。

顔かたちは違うけど、私の目にはふたごの姉弟に見えた。

立村先輩が身動きせずに、ずっと見入っているのを放置して、私は窓にたかる群れから離れた。風見さんには気づかない振りをして、健吾と手をつないで階段を下りた。

学校祭の期間中、自宅に何度か、風見さんから電話がきたらしい。

たまたま時間がなくて折り返さなかった。帰りが遅くなってしまい、電話をかけてもいい時間帯を過ぎてしまったのもあったけど、やはりなんだか疲れてしまったのが一番の理由だった。申し訳ないとは思ったのだけど、私の家では夜九時以降電話をかけてはいけないという決まりがある。それを盾にすれば、言い訳できるだろうか。

——秋葉くんと梨南ちゃん、か。

学校祭最終日、なんだか身体がだるくて、お風呂に入った後すぐ横になった。

何も思い出したくなくて、仕事を無理やりこしらえて走り回っていた。だからすぐに寝られると思ったのに、なんだか目が冴えてしまう。ぎしぎしと胸の奥で音がするようだった。

——梨南ちゃんとはほんとうに、お似合いだわ。

青大附中の人たちよりはるか前から、そう気付いていた自分に繰り返す。

梨南ちゃんは決してそれを認めることはなかった。周りで一言でも、秋葉くんに似ているというものなら、きっと制裁が下されただろう。きっと梨南ちゃんは、自分に似ている秋葉くんを見るのが本当はいやなのだろう。鏡を見ているみたいに感じるのだろう。

小学校に入学した頃から、秋葉くんはずっと梨南ちゃんのことを追いかけていた。健吾が私にくっついてくるのと同じようにだった。私は聞いたことないけれども、特殊学級に秋葉くんがいた時は、「梨南をおよめさんにする」と口走ったらしいとも。それを耳にした男子たちが「やーい、ゆきのご学級の奴と結構するなんて、やっぱりお前おかしいんだあ」とからかわれた梨南ちゃんが当然立ち向かったのは言うまでもなかった。そうすれば、梨南ちゃんがまた秋葉くんをかばってあげた流れとなり、お婆さんがお礼を言う。そして梨南ちゃんは否応なしに秋葉くんに懐かれる。「あっちに行って！」と喉元まで出かかっているのに、言えない、そんなジレンマだったと思う。

女子たちも、「梨南ちゃん可哀想よねえ」と、本人の前では同情したけれども、陰では、「けど、秋葉と梨南ちゃんって、行動パターンが似てるよね」

そうささやいていた子もいた。決して悪口ではなかったと思う。秋葉くんと梨南ちゃんのしゃべり方がどこかまっすぐで抑揚がないのも、気に入らない人たちに立ち向かう時にまっすぐな視線で余所見せずぶつかっていくところとかも同じだった。

確か小学三年の時、「ゆきのご学級」の教室に掃除当番を割り当てられて通ったことがあった。その時梨南ちゃん以外の子は、秋葉くんに言葉多く丁寧に説明していた。そうしないとたぶん理解できないだろう、そう思っていたからだった。私もお母さんからそう習っていたし、それが普通だと思っていた。梨南ちゃんだけは、私たちに接する時と特段変わらない言葉遣い……あの、まっすぐした、感情の籠らない声……で話し掛けていたっけ。それが妙に秋葉くんはお気に召したらしく、梨南の手を握り締めたまま床に頭突きしたり、壁を叩いたりしていた。なんでも、そうしていると落ち着くのさという。梨南ちゃんは何も言わず手を握られたまま、床を叩く秋

葉くんに寄り添っていた。同じ方向を見据えて、正座していた。

なんだか、ごくごく自然の形に見えた。

それを言ってしまうと梨南ちゃんは激怒するだろう。

だから、私はずっとこくと飲み込んだままでいた。

——似てない双子みたいに、私には見えるのにな。

青大附中内で、そう感じている人が私だけではない以上、これから先、梨南ちゃんを見る目はだいぶ変わるのではないかなって気がする。

改めて梨南ちゃんの今後置かれる立場を考えてみた。

E組に「隔離」……先生たちがどんなに言い訳しようとも、私たち二年B組の生徒からしたらそうとしか思えない……された状態において、現在のところ何か問題が起こったためしはない。少なくとも二年B組の中では穏やかな時が流れている。私も女子たちに表だって悪口を言われることはなくなったし、男子たちもたまにどつきあいをする程度、梨南ちゃんがいた時のように罵りあうことはなくなった。健吾が完璧に男子たちを抑えているからだろう。

——どんなに殺してやりたい相手であっても、決していじめない、これが俺たちの意地だ。

健吾の力って、男子限定でいえば、本当にすごいんだなって思う。

そして今回、梨南ちゃんが、青大附中の生徒に決していないタイプの男子と「同類」「似ている」そう感じさせてしまった事実をよくよく考えてみた。

本当は学年トップ、もしかしたら青潟市の中学二年生合わせてもトップかもしれない成績。みなそれに一目置いていたはずだった。けど、それは「成績」だけであって、本質は自分たちと全く違う世界の間人。少なくとも私や健吾、青大附中に在籍する生徒たちとは違う雰囲気の間人。決して見下すわけではないけれども、一緒にいて心安らく相手ではない。

——ああいう変わった男子と、杉本さんは、同じなんだ。

証明された、と言ったら決め付けすぎかもしれない。

口には出せない。

だってこれは、一種の「差別」だもの。

けど、自分が好きになれない相手を遠ざけたいと感じて、どこがいけないんだろう。

私にはどうしてもわからなかった。梨南ちゃんを嫌いだというわけではない。ただ、一緒に話をしていると全身締め付けられるような痛みを感じていた。自分が頭の悪い、何にもできない女子のように思えて惨めだった。それを感じないようにしてきた。けど、梨南ちゃんから離れて、ふうっと楽に息が吸えて、目の前にいろいろな楽しい出来事が増えてきているのも私には本当のことだった。

梨南ちゃんから離れた心地よさを、私はもう、忘れることができない。

私は目を閉じた。結局、健吾の側にずっといるよう命令され、使い走りをさせられたせいか、学校祭後半は忙しかった。走れば走るほど、考えれば考えるほど、自分がふわっとかろやかに階段を昇っているような気持ちになる。ずっと梨南ちゃんの陰に隠れていた私だけど、本当はこん

な風にいっぱい、走り回ってたかったんだ。自分でものごとをどんどん決めて、前に進みたかった。

——梨南ちゃんから完全に離れたままでいて、それでも「差別」しない方法ってないのかな。佐川さんに会いたくなかった。どうしてるかな。学校祭、来てくれなかった。

次の朝、いつものように一人で教室へ向かっていた。学校祭が終わるとすぐ、健吾はバスケット部優先で朝練習に出かけていた。評議委員とバスケット部の両立は体力持たないんじゃないかなって思っていたけど、健吾は元気だった。授業中、居眠りしたところ見たことない。

「ハルー！」

鼓膜破れそうな甲高い声で、ちょっとの眠気も一気に覚めた。

慌てて笑顔をこしらえた。

「おはよう」

ドリ、とはまだ呼びたくない。風見さんだった。鈴っぽいマッシュルームカットを相変わらずきれいに揺らしていた。肩を並べて階段を昇った。

「昨日電話したんだけど、気付かなかった？」

ああそうだ。なんとなく電話の音がしたのは気付いていたけど、起きるのが面倒だったっけ。やっぱり風見さんだったんだ。謝った。

「ごめんね、学校祭が終わって、なんだかすぐに寝ちゃったの」

「うち、夜遅くても平気なんだけどお」

遅いとうちは電話できないのよ。

「ふうん、そうなんだあ、それでね」

私は風見さんの髪形をまず誉めることにした。だってこんなきれいに、髪の毛の先が丸まって崩れないって、すごいと思うもの。

「ほんと、可愛いな、その髪形」

「え、そうそう？ これね、朝一時間くらいかけてブローしてるんだ」

私も人のこと言えないので無言で笑うだけにしておいた。

「で、今日の昼休みなんだけど、大丈夫？」

「何が大丈夫なの？」

もちろん暇なのは承知している。他のクラスの女子とおしゃべりをする程度だし、クラスでは社交辞令ばかりだし。風見さんと話してもいいのだけど、なんだか性急な感じがして少しじらしたかった。ずんずん迫ってくるのを、少し押し留めたい。

「ちょっとだけ、付き合って欲しいんだ。私、給食終わったら、すぐにB組に行くからさ」

「いいけど、どうして？」

ふるふると、髪の毛先が風に揺れていた。どんなヘアブロー剤使っているんだろう。きっと一気に固まっちゃうタイプかな。ヘルメットみたいに見える瞬間がある。相変わらず細い目で風見さんは顔をほころばせた。

「会わせたい子がいるんだ。今日どうせ、放課後は忙しいんだろうなって思ってたし。その辺は

私も気遣いしたんだよ」

評議委員会が学校祭の後片付け関連ですぐ開かれることをちゃんと読んでくれたことには、感謝した。

「でも、昨日までほんとハル、大変だったよね。ほら、二日目にさ、例のあの子のこと」

二日目というと、説明しなくてもわかる、梨南ちゃんと秋葉くんのことだ。

「あの杉本ってパーなのかな？ 何考えてるんだろうね。やっぱりE組にまわされるのも当然だなんて改めて思っちゃった。だって、ずうっと真正面、一点しか見てないんだよ。何をすることも、横を向くにも、回れ右するんだよ、体育の時みたいに！ なんだかどこかおかしいよね。E組って先生たちいろいろ言ってるけど、絶対少しおかしい……」

「それ以上言っちゃだめよ」

「なんで？」

もし風見さんが、梨南ちゃんの悪口をとくとくと語りつづけたら大変なことになる。

E組に対しての本音を語ることは、「見下しの差別」として認識されちゃうから。

本音はともかく、学校内で「差別」は決して許されないことだから。

「だって、私、嫌いなんだもの、しょうがないよね」

「でも、傷ついてしまうわ」

「傷ついている振りして、傷つけてるのはあのおばかさんの方よ」

止めなくちゃ。また声を張り上げた。もうB組の教室前なのに。他の人たちに聞かれたらどうするの。

「だって、そうじゃないのよ。あの馬鹿。要するに自分のあこがれてる人に認めてもらえないから赤ちゃんみたく騒いでるだけじゃない。こうやって、私はすごいのもって誉めてもらいたがってるだけじゃない。ああいうのを見ると、思いっきりひっぱたいてやりたくなるのよね。それにほら、あの立村なんかと」

まずい。慌ててしまった。ここの廊下、二年生しかいないからまだいいけど、もし三年生の耳に入ったら風見さん、どんな目に遭うかわからない。本音はどうだかわからないけれど、立村先輩は一応、評議委員長なのだから、みな「敬語」を使う扱いをしているのだ。

風見さんは私が止めるのを全く聞いてくれない。それどころか首をぶんぶん振りつづけて、髪の毛をベル状態に揺らした。

「そうよ、あの立村なんて、本条先輩の跡継ぎだなんて絶対に認めないわ。本条先輩が評議委員長だった頃はよかったなあ。みんなびしっと、言うこと聞いて、文句言う人なんて誰もいなくて。話もすっきりしてわかりやすくて。なのに、あんな豆腐をぐっちゃぐちゃにしたような顔の男子んかに青大附中を仕切られるなんて、たまったもんじゃない！」

「せめて『先輩』ってつけなくちゃ」

「あんなぐず、どうして敬わなくちゃなんないのよ！」

とりあえず風見さんが、立村委員長を蛇蠍のごとく嫌っていることは理解した。でも私の立場も考えて欲しい。一評議委員としてもそうだ。それに輪をかけて私の場合、梨南ちゃんがらみで立村先輩にいらまされている。これ以上弱みを握られたら身動き取れなくなってしまう。

「でもどうしてそんなに立村先輩が嫌いなの？ 暴力はふるってないし」

「本条先輩が最高だからよ！」

——本条先輩？

風見さんの口調は、本条先輩に関する話のみ、とろとろに甘かった。

私の手を握り締め、頬ずりしそうだった。たぶん私のことを、本条先輩だと思って語りかけているんじゃないかなって気がした。けど、本条先輩のことをそれなりに見聞きしている私としては、素直に頷けずしばらく困り果てた。

だって、女子としては、受け入れたくないことばかりしている人なんだもの。

そんなに目をきらきらさせて、私の手をぶんぶん揺らし語るような男子なんだろうか。

本条先輩って。男子でもないのに、風見さんってば。

「本条先輩、ほんとかっこよかったよね。新入生歓迎会の時に本条先輩が挨拶された時の、『よくぞ、青潟大学附属中学へ！ 俺たちは君たち一年を、全力で応援させてもらうぞ！』こんなありふれた言葉をね、本条先輩はもう、しびれるような迫力で言ってくれたのよ。ううん、うまく言えないけど。ハルも見てたでしょ、きっと見てたはずよ。それにね、頭もぴかー、学年トップを最後まで譲らなかったしね。生徒会の友だちから聞いたけど、本条先輩のクラスってものすごく性格悪い奴ばかりで困ってたらしいんだけど、あの方が一気に要の奴をぶん殴って、言うこと聞かせたんだって。それ、評議委員会の中でも同じだったみたい。『粛清』っていうのかな？ スターリンって言いたくなっちゃうくらい。銀縁めがねだって、立村みたいな馬鹿男子がかけてるんだったら馬鹿に輪をかけてしまう程度だけど、本条先輩だと違うのよ。もう、知性の輝きって感じ。リレーでも何時も本条先輩がアンカーだったし、『青大附中ファッションブック』でもいつもモデルに選ばれてたし。私、規律委員の子から分けてもらっちゃったよ。今年はその馬鹿立村が相手？ 即、ごみ箱へ捨てたわ。ねえねえ、それに知ってる？ 『スター誕生』って、本条先輩が主演張った評議委員会のビデオ演劇。これがもう、かっこいいってらないの！ きんきらきんのラメだらけのスーツでアイドル歌手っぽくバラードを歌っているところを見せてもらったけどね。もう、すべてが素敵。『パールシティー』なんて目じゃないわ。他の女子たちは規律委員会の南雲先輩を絶賛してるけど、私からしたら月とすっぽん。次の年の『忠臣蔵』は、松の廊下で浅野の馬鹿殿様さえいなくなれば完璧。ほんと、私、赤穂の馬鹿殿様にしか見えないのよね、立村みたいな奴って。ああ、ほんとあんな素敵な人、いないわよ！ 本条先輩だから、生徒会だって評議委員会に敬意を表していたし、納得してたのよ、それがなによ」

「何？」

たぶん、次の言葉はそれだろう。想像できた。

「あの馬鹿男がね。なんで本条先輩の跡に置かれるわけ？ 何にもできないで、たーだ、天羽先輩たちに全部後始末任せて、ずうっとあの馬鹿杉本の尻をおっかけていて。頭の悪いE組連中がなんで、青大附中の重要な役職についてるわけ？」

「でも、それは、立村先輩が実際、E組ではなくてD組だからじゃないのかしら」

「同じよ！」

もっともだ。私もほんとは、そう思っている。

「だって、立村って指で数数えてるんでしょ。九九もできないって噂あったけど、ほんとかしら。何か物考える時に数直線を引かないと何もできないとか。そんな奴をなぜ、青大附中に入れたんだらう？ そう思わない？」

迷った。どうすべきか。私は風見さんの眼をじっと見据えた。唇を結んでみた。

決して間違ったことではない。少なくとも半分以上は。

でも、それを受け入れることは、今の私にできない。

「そんなこと言ったらいけないわ」

私はゆっくり告げた。また髪の毛をベル揺らしする風見さんに、今度は強気で言い切った。

「私、人の悪口を聞かされるのって、なんだかいやなの。教室に入るわ」

「ちょっと待って、ハル」

無視して二Bの扉を開けた。肩にしがみついてくる風見さんの手を振り払うべきか迷ってそのままにした。振り返りはしなかった。

「ごめん、私、またしゃべりすぎちゃった」

「先輩たちにはきちんと礼儀を守らないといけないわ。私、礼儀を守らない人って、好きになれないの」

それに、と付け加えた。

「もし、風見さんの言う通りだとしても。きっとみんな、言われた相手よりも、言った人の方を軽蔑するわ。一緒に頷いていたほうもね」

風見さんの手が肩から滑り落ちた。涙声かもしれない。ちょっと男子っぽい小さな声。

「ごめん、ハル、嫌いになっちゃった？」

一切振り向かず私は教室に入った。居心地悪そうに私を迎えた女子たちに、たっぷり笑顔で「おはよう」と声をかけた。

私の知る限り、風見さんが夢見ている本条先輩とその実像とはかなりずれがある。そんな王子様タイプの人ではない。健吾からもそのあたりの事情はすべて聞いていたし、なんといっても立村先輩がらみの言動を考えるとそれほどすごい人なのかな、っていう気がした。

——なんで、立村先輩を評議委員長に選んだのかしら。

決して健吾をひいきしたいからそう言っているわけではない。

もし私だったら、健吾よりも、天羽先輩を選んだだらう。

私の目……評議委員会と全くかかわりのない場所にいた頃から見ても、なぜ立村先輩を頭にしなくてはならなかったのか、その理由がわからない。

佐川さんは「いいかい、佐賀さん、敵は立村、奴だけだ」、なんて言っていた。あの佐川さんが恐れる相手なのだと考えれば、用心は必要だろう。すでに私と佐川さんがこっそり連絡を取り合っていることを知っているのだから、危険といえば危険な人物だと思う。

けど、それとは別に、青大附中の実質的権力者である評議委員長の座にふさわしい人とは、どう考えても思えない。外見が梨南ちゃん風に言うところ「売れない歌舞伎役者風の顔」というか、そ

れが悪いということではない。小学生向けの学園漫画に出てくるような、いかにも人のよさそうな美少年風に見えなくもないのだけど、全然記憶に残るようなところがない。私もあまり、男子っぽい人は苦手だ。健吾だって本当だったら、私のタイプではなかったのかもしれないと思う。けど、やさしく髪の毛を撫でてくれたり、「おしおきの続きだぞ」とか言って唇に触れたりとか、そのしぐさに自分でもドキドキしてしまう時がある。

たぶん、そのあたりが、健吾と立村先輩との差なのだろう。

どきん、が全くない人。

正直なところ、風見さんの罵倒した立村先輩批評は当たってはいなくもない。ただ、それを人前で口にしてはいけない。この学校でうまくやり過ごしていく上で、それは絶対の必要条件だ。なんであんなにわめくんだろう。この前だって、

「私の友だちで、生徒会の子が」

とか言っていたのに。もし少しでも生徒会の人から話を聴く機会があるならば、仮にも青大附中の評議委員長に逆らうと碌なことが起こらないと教えられてなかったのだろうか。

立村先輩なんて正直どうでもいい。

問題は天羽先輩をはじめとする三年男子軍団だ。プラス、轟先輩、と言ってもいい。

あの人たちはきっと立村先輩の気付かないところで、実質的評議委員長の仕事を片付けているんじゃないのか、むしろに気になる。健吾たちは気付いていないみたいだし、他の委員たちも口には出さないけれども、時々中庭や自転車置き場などで四人固まってひそひそ話をしているのが、どうも胡散臭い。何考えているかわからない。立村先輩専属の隠密、と考えた方が私には納得できる。

本当のところはわからない。もっと知りたいのに、わからない。

佐川さんみたいに、頭がよくなりたい。

梨南ちゃんはいいかかわらず、一部の授業にだけ参加した後、すぐにE組へ戻っていた。この状況にクラスのみみんなも慣れてしまっているようだった。最初の頃は、梨南ちゃんが教室に入るなりぴんと張り詰めた空気が満ちて、何時爆発するかわからない状態だったのだけど、もう空気ではかないみたいだった。梨南ちゃんも一番後ろの席で、真正面を見据えたままノートを取っているだけ。とりたてて騒ぎを起こすようなことはしなかった。たまに女子が、「杉本さん、元気？」とご機嫌伺いをしているようすだけど、梨南ちゃん本人が全く表情を動かさないまままっすぐE組に戻るの、それきりになる。

別に、私、脅しているわけでもないのに。

「ハルー！」

給食を片付けて、私が廊下に出ようとした時だった。

またあのすっとんきょうな声が響き渡った。

とどろいたって言った方が近いかもしれない。

今朝、ちょっときつく言い過ぎただろうか。

でもうっかり甘い顔を見ると、こういうタイプの人ってつけあがる。梨南ちゃんでも八年も修行をしてきたんだもの。注意しなくちゃ。

「なあに？」

静かに答えた。やはり、風見さんはおどおどと唇を振るわせるようにして、

「さっきは、ごめんね」

まあ、私も、次の必修クラブで顔を合わせる前にはなんとかしようと思っていた。向こうからあやまってくれたのならば、こちらが頭を悩ませる必要もない。五秒黙ったままで風見さんの眼を見つめた後、

「気にしてないわ」

笑わず返した。

「ほんと？」

おずおず見返すところが、なんだか幼い。うちの弟みたいだった。

「あーよかった！ なら、今から来てくれるよね！」

「どこに？」

忘れていた。朝、そういえば誰かに会わせたいとか言っていたような気がする。

背中の方をすすっと叩く手があり。振り返ると、健吾が厳しい目で私をにらんでいた。大丈夫よ。なんだか健吾、また私が梨南ちゃんタイプの女子にいじめられるのではないかって気にしているのだろう。大丈夫、もう同じ失敗なんてしない。ちゃんと、言うべきことは言うし、そうできるって私がわかってるもの。

「あいつ、ハルの彼氏？」

「うん」

背を一瞬小さく丸めると、風見さんは私をもう一度見上げて、

「休み時間なくなっちゃうから、すぐ、来て」

断りもなく片手を取って、廊下を走り出した。周りで「廊下を走るな！」って、どこかの規律委員が騒いでいる。違反カード切られたくないな。私は少し息が切れた振りをして、手を解き後を追った。

風見さんは生徒玄関まで全力疾走した後、げほげほと咳をして、

「じゃあ、銀杏の木の下まで、ダッシュしよう！」

言い終わらぬうちに、すのこに立ち、靴をつま先で蹴飛ばすように履き替えた。

「ハルも、早く、早く！」

そんなあせる必要あるのだろうか。それになんで、風見さんそんなに、私に近づきたがるのだろう。言われた通り外靴に履き替え、風見さんを追おうとすると、おなかの給食がたばたぼ言ってちょっと痛くなった。走るなってことなんだきっと。銀杏の木に向かってひとり駆け抜けている風見さんが、鈴というよりも、季節はずれの風鈴に見えた。

なんだか、可愛い。というか、子どもっぽいというか。

私ははや歩きで、横腹を押さえながら歩いた。

銀杏の木は青大附中のシンボルと言われていた。校舎裏の林に入る前にひとかかえもある銀杏が、まだ青い葉をつけたまま立っている。先に着いた風見さんは、木の幹にうわっと抱きついて、荒い息を整えていた。私が追いついたのを振り返って確認すると、すぐにそこから離れ、「ナミー！」

校舎内と同じ声のはずなのに、きんきら声がなぜかすうっと通る。

私は立ち止まったまま、まず前、次に後ろ、横、横、見渡した。

もう一度、風見さんが叫ぶ。

「ナミー、早く、出てきてよ！」

——なみ？

やはり私の「ハル」と同じ風に、愛称で呼びたくなる子なのかもしれない。

そんな子になぜ、私を会わせたがるのだろう。

誰かいるのかな。

「声、大きすぎるよ、もう、ドリってば」

私の背後から「ナミー」が返事した。振り返ると、黄色い叢に隠れるようにして、ヘアバンドをした女子が、穏やかに微笑んで立ち上がっていた。隠れていたのだろうか。どうして、私の隣に立つのだろうか。じっとこちらを見つめ、「ナミー」はえくぼで答えてくれた。

「ごめんね、無理やりで」

一度も話したことのない、だけど、顔は何度も見たことのある女子だった。

「渋谷さん？」

「ナミー」が目の前の風見さんに動ずることなく受け答えしているのを見て、私も落ち着いて返事をしなくなった。初対面の人と打ち解けるのになれているのかもしれない。だってそうだろう、彼女は、青大附中の生徒ならたぶん誰も知らない人いないだろう。

「ほら、ハルはナミーのこと知ってるよね」

頷いた。知ってはいる。確かに。

「けど風見さん」

「ドリって呼んでよ！」

口を尖らせた後、風見さんは黒い別珍のヘアバンドをした「ナミー」に、

「ほーら、ナミー、やっぱりハルはナミーのこと知ってるよ。私たちやっぱり、三人、親友になる運命だったんだよね。親友の誓いをしようよ。時間ないけど、早く早く！」

もう一度、「ナミー」は私に肩をすくめて見せた。風見さんに、

「じゃあ、何でもいいからドリのやりたいようにして。私、別にかまわないわよ。ごめんね、佐賀さん。ドリはテンションがあがると、もう手に負えなくなるから、好きなようにさせるのが一番いいのよ」

私に向けた言葉は、あえて風見さんに聞かせないように小声だった。了解のしるしに頷くと、さらに「ナミー」はひそひそ声の会話を続けた。

「ここではうまく風見さんに合わせておいて。あとでゆっくり話したいから」

もう一度、念を押すように、

「風見さんのいないところで」

私は黙って笑顔を向けた。とにかくここは穏便に済ませておきたい場面だと、「ナミー」も私も理解していたからだった。

風見さんが言うように、「親友になる運命」だから「ナミー」のことを知っていたわけではない。その点については、たぶん「ナミー」も理解していたはずだ。

だって、あたりまえ。青大附中の生徒ならみな、「ナミー」のことを知っている。

生徒会が評議委員会よりもほんの少し有利な点があるとしたら、全校生徒全員がメンバーのフルネームを知っているかどうかじゃないかと思う。いくら評議委員会が実質的権力組織だとしても、ほとんどの生徒は評議委員会イコール立村先輩とせいぜい天羽先輩、あとは健吾くらいしか知らないのではないだろうか。その点、生徒会は選挙でもって選ぶ関係もあり、いやおうなしに顔を知られる羽目となるのだから。私が知らないわけがない。

——青大附中生徒会書記・二年・渋谷名美子さんを。

ただ、もし彼女……渋谷名美子さん……から、

——ナミーと呼んでね。

そう頼まれたとしたら、どう答えていただろう。

まず絶対頼みそうにはない渋谷さんと目と目で合図し、時計を覗き込む真似をした。風見さんがずっと「友情の証」にしたいらしいきれいな黄葉を探しているところだった。

「ねえ、ドリ、悪いけどそろそろ鐘が鳴るから、佐賀さんと先に戻るわ」

「そんな、待ってよ、ねえ、まだ何にも」

「いいじゃない、急がなくて、ちゃんとするから」

私の肩を軽く叩くと、渋谷さんは勢い良く走り出した。私も彼女を追いかけた。おなかがちゃんとなれたせいか、走っても息苦しくなかった。同じ走力なのだろう。肩を並べて駆けるのが苦痛じゃなかった。鐘が空に響く直前三十秒前、私と渋谷さんは無事、生徒玄関に到着した。後ろで、

「もう、なんで！ もう私ばかり！」

騒いでいる風見さんが、りんりんと風鈴ならしそうなこっこうで追いかけてきている。

振り返らず私と渋谷さんは、教室へと戻った。

本当はその日のうちに話をするつもりでいたけれども、私も渋谷さんもそれぞれ学校祭の後片付けがいろいろあって忙しかったし、また別の日は風見さんがまとわりついてきてほとんど話にならなかった。それでも休み時間、B組の女子たちから離れてゆっくりできるのは気が楽だったし、渋谷さんの性格もなんとなくつかめてきたし、それなりに楽しかった。金曜日の放課後はたまたま委員会がなかったこともあって、それなりに話が弾んだ。生徒会は今、次期選挙の準備で大変な時期なのに、大丈夫なのかしら。余計な心配をしてしまった。

「ね、だから言ったでしょ！ ハルは絶対、ナミーと話が合うって。よかった、ほんと頭のいい同士の友だちが出来てうれしいな。ね、今度の日曜、一緒にうちに遊びに来ない？」

たった三日しか経っていないのに、完全な親友気取りの風見さんに私は戸惑っていた。決して嫌いなタイプではないにしても、もっと時間をかけてもいいだろうにと。ただ、それは私だけの感じ方であって、たぶん風見さんは急いで友だちになりたいと願うタイプなのだろう。私はそっと渋谷さんを見た。彼女が風見さんにどう対応するかを見極めたかった。

「ドリ、そうね、でも悪いけど土日とはにかく忙しいのよ。だから、今度にしましょう。学校祭で付き合えなかった友だちと会わなくちゃ」

「えー、私は？」

「ドリにだってたくさん友だちいるじゃない」

口を尖らせてぶんぶん首を振る風見さんはやっぱり、ベルに見えた。

可愛いんだけど、ちょっとうるさい。

「それよりも佐賀さん、評議委員会のことで少し聞きたいことがあるんだけど、ちょっとだけ中庭で話を聞かせてもらっていい？」

「私も一緒だよ、ね？」

「だめよ」

きっぱりと渋谷さんは切り捨てた。

「悪いけど、委員会関係の話はビジネスだから、関係ない人には入ってほしくないのよ。ドリ、そのこと、わかるわね」

ついさっきまでは大人っぽく微笑んでいたのに、渋谷さんの口調が先生っぽく厳しくなった。この変化ってなんなのだろう。風見さんもかなりむくれたものの、

「わかったわよ。どうせ私は委員会入ってないもんね。ナミーとは違うもんね」

「ごめんね、でも今度別の時にちゃんと話をするわ」

すぐに渋谷さんは風見さんをなだめるような口調に和らげると、ちらと私の顔を見た。

ヘアバンドを少し指先で直すようなしぐさをした後で、

「じゃ、行きましょ。中庭へ」

私に断る気持ちはなかった。頷くと私は、風見さんに軽く手を振った。

「今日は大丈夫なの？」

三日話すとだいぶ渋谷さんの性格もつかめてきた。朝せっけんできちんと顔を洗ったような清潔感がある。露骨にすばすば言うわけではないのだけど、自分のしたいことはきっぱり押し通す。友だちであってもそれは変わらず、風見さんに対しても同じ。一瞬にして厳しさとやさしさが入れ替わった表情に、私は思わず息を呑んだ。もちろん見えないようにはしていたけれども。気付いたのだろうか。

「大丈夫よ。会長たちにもちゃんと話してきたしね」

「サボりだって言われたい？」

「大丈夫。いろいろ生徒会にも事情があるのよ」

その辺はあまり詳しいことを話さないでおいた。事情は評議委員会にも、どこにでもあることだし、なにせ私の立場が「次期評議委員長の恋人」なのだ。口を滑らせてまた、立村先輩にいらまされたら大変なことになるだろう。

中庭に出て、真っ黒い石が三個ならんでいる場所へと向かった。なにげなく内緒話をするにはちょうどいい場所だった。椅子代わりにもなるし、うまく木々の葉陰になり姿も隠せるし。真上に窓が見えるのだけが少し心配になるところだけど、小声で話せば大丈夫だろう。私は平べったい石に腰をおろした。真向かいの石に腰掛けるのかと思ったら、渋谷さんは同じ石にお尻をくっつけるようにして隣に座った。同時にふたり、ふっと息をついた。

「風見さんがいないほうが、ゆっくり話せるでしょ」

すぐに身体を寄せるようにして、渋谷さんは風見さんのことを苗字で呼んだ。

三人でいる時は「ドリ」と呼んでいたのに、なぜだろう。

いきなりの展開に頭の中をもう少し整理したくなった。渋谷さんはこともなげに続けた。

「あの子がいると、いろいろ面倒だしね。あの子、佐賀さんが大好きよ。ほら、刺繍クラブで一緒になったでしょう。あの頃から佐賀さんと友だちになりたいって言ってたのよ。噂いつも聞かされてたわ」

「そうなの」

好意をもたれるのは嬉しいにしても、風見さんほどのオーバーアクションにはTPOを考えてほしいとちょこっとだけ思っていた。

でも、渋谷さんだって風見さんの友だちなのだし、決して嫌ってはいないのだろう。

言い方に気を付けよう。大切な友だちをけなすような形になってはいけない。

「でもちょうどよかったわ。私も前から佐賀さんと、ゆっくりおしゃべりしたかったの」

「どうして？」

ほつれ毛が気になってしまった。指先で直していると、不意に渋谷さんが意味ありげに笑った。

「なんだか、私と似てそうで」

私は黙って座りなおした。中庭には一年女子たちがまた集まっているのか、甲高いはしゃぎ声が聞こえた。学校祭で団結力が強まったクラスではよくあることなのだという。

「風見さんも言ったのよ。なんだか佐賀さんと私とは話が合いそうな気がするから、絶対に友だちになってほしいってね。私も今、話しててなんとなくそういう気するのよ。なんでかしらね」

「私も、わからないわ」

私はあらためて渋谷さんのうりざね顔を観察してみた。

決して美人だとか、可愛いとか、そう目立ったところはない。かといってもものすごくぶさいく、というわけでもない。美人とかブスとか、そういうくくりではなくて、なんとなく「上品」。卵型にきちっとボブヘアが似合っている。無理にヘアブローしたわけではないのに、つやつやと光っている。ある意味、風見さんに似ているようで全く似ていない。髪の毛をぶんぶん振っても、渋谷さんと風鈴にはならない。ちゃんと「髪の毛」のままだ。

生徒会の人として一応は目立つ位置にいる人だけど、こういう風に寄り添っておしゃべりする機会がなければただそれだけの人で終わったタイプだろう。評議委員会においても生徒会との繋がりは、三年生と健吾以外はほとんどないように聞いている。

もともと青大附中生徒会が存在感ないというのは委員会に関係している人たちの言い分であって、一般生徒たちからしたらそれなりに認識度は高いのではと私も思っていた。青大附中において一番の実力者が評議委員長であることは、誰もが認めることでもある。ただし、委員長だけが目立っていてその他の評議委員の名前が挙がることは、めったにない。次期評議委員長に上がるであろう健吾の名前だけはやたらと有名だけれども、本来ならもっと高く取り上げられてもいい現三年生ナンバー2の天羽先輩の話は全く一般生徒の中に広がっていない。だからこそ、こっそりいろいろ隠密行動できるのだろうと私は解釈していた。

天羽先輩よりもずっと有名なのが、たぶん渋谷さんを代表とする生徒会メンバーだろう。

私も、直接話をする前から、それなりに彼女の存在は認識していた。

「委員会のことって、何？」

「いいのよあれは。ただの言い訳」

あっさりとして渋谷さんは答えた。にっと笑った。

「佐賀さんとは風見さんはずした形で一度きちんと話をしたかっただけだから。私も佐賀さんにいっぱい聞きたいことあったしね」

何を聞かれるのだろう？

「でも、不思議でしょう。なんで私と風見さんとが付き合っているかってこと」

いきなり渋谷さんは話をかえた。

「他の子にも最初に言われるのよ。なんで、あんなうっとうしい子、側に近づけてるのって」

「そんなこと思わないけど」

「嘘言わなくてもいいわ。私もそう感じてるから」

背筋が冷えた。

なに、この人、言ってるんだろう？

渋谷さんはしばらく私の顔を注意深く観察していた。沈黙、約五秒程度。長く感じた。

「それで、つらくないの？」

「聞きたい？」

私は頷いた。

もしこれが梨南ちゃんだったら、目の前の渋谷さんのことを即座に「最低だわ」と断罪するだろう。人間として最低だと、友だちをだまして最低女だと。

なのに、全然そんなむかむかした気持ちにならなかったのはなぜだろう。

どきどきしながら私は渋谷さんと向き合った。足を斜めにして、ぎりぎりつま先が渋谷さんの靴に触れる寸前にしてみた。

「私もね、一年の頃から佐賀さんのことを気にしてはいたのよ。あんな酷いいじめをクラスの女子たちにされたのに、自分ひとりで克服して、いつのまにか二年のスターになってしまったんだもの。これって本当にすごいことだと思うわ」

スター？

なんだかすぐたいようで、それでいてまだ信じられなかった。私のことをたっぷり誉めてくれるのは佐川さんだったけど、彼の言葉はすんなりと自分に染み入り安心していられた。なのに、渋谷さんの言葉は質がちょっと違う。ひりひりするといった感覚が神経に染みってくる。

「どうして私のことを知っていたの？」

次期評議委員長・新井林健吾の恋人だから？ もちろん健吾の見せびらかし方からしたらそれも頷ける。でも、それだけの理由で私に目をつける理由ってなにがあるのだろう。

「ひとつ、聞いていい？」

「いいわよ」

「なぜ、風見さんと渋谷さんは友だちなのかしらって思ったの。ううん、言いたくないのならいいのだけれども」

「いいわ、知りたいわよね。当然よね」

渋谷さんは窓によりかかり、戸にしっかりと鍵をかけた。

「風見さんは動物的直感が鋭いから、気をつけないとね」

言葉にかすかな刺を感じた。

私の感じていたことはたぶん間違っていなかったってことを、確信した。

「風見さんとはね、小学校が一緒だったのよ。彼女、五年生の時、品山小学校から転校してきて、私のいたグループに加わったの。それ以来の付き合いよ。人懐っこいというか、ものおじしないっていうのかな。一步間違うとずうずうしいんだけど」

「品山小学校？」

「そう、品山小学校からだと、教師の質とか児童のレベルとかに問題があるからってことで、ご両親の考えで引っ越したらしいのよ。あの子、ああ見えてもお嬢さまなのよ」

お嬢さまか。腑に落ちた。青大附中にはまずいない個性。普通の環境では得られないものだろう。それに、中学受験のためにだけ小学校を転校させるなんて、まず通常は考えないだろう。

「その時結構いろいろあってね、青大附中に入る段階であの子と契約を結んだの」

「契約？」

どきんとした。意味不明。だって友だちになるのに、なぜ契約なんて必要なのかしら。

「親友になるってことよ」

理解できそうにない。

部屋に鍵をかけられた現実に気付き、こわくなる。

渋谷さんは私がいろいろと考えていることなんて、ちっとも気付いていない風に話しつつけた

。

「あの子、この世で一番大切なものはなに？って何かの折りに聞かれたことがあるんだけど、即座に『友だち』って答えたのよ」

「そうなの」

わからなくもない。私も、小学校時代の友だちはかけがえのないものだと思っている。

「でもね、それには条件があるの」

あごを乗せるようにして、渋谷さんは肩肘をつき、もう片方の手でこつこつ机を叩いた。

「頭がよくて、クラスでも人気者チームにいるような友だち。そういう子でなくちゃいけないの。あの子にとってはそういうタイプの友だちが好きなのよ。たぶん、佐賀さんもそういう風に見えたんだと思うわ」

「でも私は嫌われているかもしれないのに、クラスの女子にみんな」

私が言いかけたのを、渋谷さんはさえぎった。

「違うのよ。レベルの高い女子っていうのを、風見さんは嗅覚鋭く勘付くのよ。たとえ佐賀さんが全校の女子たちから無視されていたとしても、風見さんはためらうことなく『ハルー』って声かけたはずよ。そういう子だもの」

なんだか落ち着かない。むずむずしてきた。膝あたりのスカートをつまんだ。

「反対にあの子から見て、価値のない女子に対しては厳しいわよ。それこそ怖いくらいよ。べたべたしてきて、お高く留まっていて、執念深いタイプの女子は大嫌いみたいね」

——だから、梨南ちゃんのことを呼び捨てにしたのかしら。

心臓がとくとく鳴り響き、今にも破れそうだ。

渋谷さんが何を言いたいかわからず、なんとなくぴんときたせいかもしれなかった。

私は言葉少なく尋ねた。

「でも、渋谷さんはどう思っているの？」

「やはり、そう思うわよね。そういうことよ」

頬骨の少し高めなほっぺたにえくぼが出来た。

だいたい渋谷さんの言いたいことが読めた。なんだか、佐川さんになったみたいだった。

「わかるけど、どうして私にそういうことを聞くのかしら？」

渋谷さんは黙って、私の口元あたりに視線を向け、小首をかしげた。少し口元をつぼめている

。

「たいてい私と話をすると、皆聞くのよ。なんであの風見さんと友だちなのか？ うるさいだけで鬱陶しいじゃないってね。面倒だから私も、親友だからしょうがないでしょってことでごまかしてきたの。でも、佐賀さんには本当のことわかってもらえるかもしれないなって思っていたの。一年の頃からずっとね。だから、続きは別の場所で」

ここまで言われたら、途中で帰るなんてどうして言えるだろう。

誘われてすぐ、ついていくしかない。そうしなくちゃいけないような気がした。

しばらく関係のない話……可愛い文房具やキャラクターグッズなど……をしながら通りを歩いていた。本当の話の人ごみの中ですると、どこかで噂が流れてしまう可能性がある。ただでさえ私は評議委員だし次期評議委員長の恋人。渋谷さんは有名な生徒会副会長。梨南ちゃんを応援する上級生たちに知られたらまた何か嫌がらせされるかもしれない。健吾に押さえてもらうこともできるけれども、できれば波風を立てたくない。

「そうなんだ、佐賀さんもピンク系が好きなのね」

「うん、下品だって言われそうだけど」

「そんなことないわよ。似合ってるもの。佐賀さんにはふわっとしたお嬢さまっぽい雰囲気の色がぴったり合ってるわ。私はどちらか言うとレモンカラーが似合うって言われているんだけど、どうなのかしら」

こういうかわいらしい話もできる人なのに、なぜあの場所では恐ろしい言葉をいくつも吐いたりしたのだろう。茶の色彩が強くなった洋服店のショーウィンドーを覗き、あれが着たいこれが着たいとおしゃべりしている時の渋谷さんとは全く同じに思えなかった。

「きゃあ、これ可愛い！ 佐賀さん、いいよねこれ。うわー、でも高い！ クリスマスプレゼントに誰かくれないかなあ」

途中、真っ白いテディベアのぬいぐるみを発見し、大喜びで手にとって頬ずりしている渋谷さんを見つめつつ、私は判断に迷っていた。

佐川さんのいう、友だち、彼女はそういう対象なのだろうか。

気持ちの中ではもっと語りたい、一緒にぬいぐるみをだっこしておしゃべりしたい。

でも、その奥に隠れているしたたかな計算も、すでに私の前に差し出されている。

——私はこういう性格よ、さあ、どうする？

そう問われているような気分だった。果たして風見さんは、渋谷さんにそう思われていることを気付いているのだろうか。そして渋谷さんの性格に全く嫌悪感を感じない私を、どう受け止めればいいのか。友だちになんて、なれるのだろうか？

「さ、ここよ。入りましょう」

フランス語でわからない言葉が綴られている看板の店の前で渋谷さんは立ち止まった。駅前からどうやってたどり着いたのだろう。

「ここ、なんていうお店？」

「『アルベルチーナ』っていうのよ。美味しいケーキが有名なの。先輩に一度連れて来てもらったことがあってね、それ以来特別な時にここへお誘いしなくちゃって思っていたのよ」

今回は特別な時なのだろうか。

私を誘うということが。

素直にこれは受け入れてみよう。

「素敵なお店ね」

入ってみるとそこにはフリルをたくさん重ねたようなドレスをまとった女性たちでいっぱいだった。満席なのではないかと少し心配になった。でも渋谷さんは落ち着いていて、

「空くまで待ちます」

あっさり伝えて待ち時間用の椅子に腰掛けた。私も座ろうとした拍子にすぐ、

「こちらへどうぞ」

奥の方へ誘われた。丸いテーブルと少し低めの椅子が用意されていた。

「ここは紅茶が美味しいのよ。ウバのミルクティーにするけど、佐賀さんは？」

「私も同じでいいわ」

本当のことを言うと、紅茶の区別なんて私にはつかなかった。梨南ちゃんだったらなんて言っただろう。ちらと思い出した。

しばらく通りで見つけたティベアの話で盛り上がっていた。銀の食器で届けられた紅茶とケーキがどうも私にとっては高級すぎて、味も良くわからなかった。きっと、美味しいんだろうと思うのだけど、たまにお父さんが買ってきてくれるロールケーキと味がそれほど変わらないような気もした。そこが梨南ちゃんに軽蔑されたところなのかもしれなかった。なんだかこういう風な、お嬢さま風の場所に来るたび、辛くなるのは梨南ちゃんの呪いだろうか。

「そうそう、それでね、話をさっきのことに戻したいんだけど、いいかしら」

紅茶にたっぷり砂糖を入れかき混ぜていると、渋谷さんがケーキを食べる手を止めた。

「いいわよ」

「私が、どうして風見さんのこと、親友扱いしているかってことよ」

とうとう来た。味がまた、渋くなりそうだ。

私はちらっと周囲を見渡した。誰もいないはずだ。少なくとも青大附中に関係しそうな人はいないと思う。でも、家族が関係者という可能性もないわけではないだろう。

「大丈夫よ。ここに来る人、うちの学校の子いないから。それに、風見さんも絶対に来ないから」

そんな自信たっぷりに断言してもいいんだろうか。話を早く始めたくてならないのは、どうやら渋谷さんのようだった。そんなに私と話をしたい理由ってなんなのだろう。余裕を見せたくて、私は紅茶を一口すすり、ゆっくりとソーサーに戻した。

「佐賀さんはどうして、あの杉本さんって人とずっと腐れ縁でいたわけなのかな。佐賀さんみたいな人だったらもっといい友だちがたくさんいたはずなのにね。私、いつもそれが不思議でなかったの。別のクラスだし直接聞くのもぶしつけだと思ったし。でも、風見さんのおかげで少し近づくことができたんだし、このあたりは先に聞いておきたいなと思っていたの」

「いきなり、びっくりしたわ」

「ごめんね。でも、佐賀さんのような人がなんでって、私もそうだし風見さんも、生徒会の人みんな思っているんじゃないかな。ごめんね。根掘り葉掘り聞くようで」

私は戸惑いを隠すためにケーキをひとかけら、フォークで切り刻んだ。

「私と梨南ちゃんは、小学校の頃から同じクラスだったの。あの頃私は泣き虫だったし、梨南ちゃんがいろいろとかばってくれたの。だけど結局梨南ちゃんと私はうまくいかないってことが、私の方でわかってしまったの。だから、裏切ったってことになっちゃったの」

簡単にまずは説明しておいた。正直なところ、どう話をすればいいのかわからない。ただ、全く知らない第三者あての説明としてはこれが一番わかりやすいのではないだろうか。梨南ちゃんを罵っているわけでもないし、私を自己卑下しているわけでもない。健吾の話は混ぜていない。事実を述べただけだ。

渋谷さんはふんふん頷いた。ケーキ、それっきり口にしていない。

「そうなの。でも不思議ね」

「なにが？」

「佐賀さんの方が、うまくいかないって思ったのね」

「そう」

詳しいことを説明してと言われても、私も迷う。

「そう。ずっと私は梨南ちゃんに頼りっぱなしだったの。たとえばね。ここのお店」

ぐるっと見渡した。薄茶色のドレスを来た女性組ふたりが、出口で会計を済ませていた。

「ああいうドレスとか、こういう紅茶とか、この椅子とかあるでしょ。こういう雰囲気は梨南ちゃんは大好きなの」

「ああ、らしいわね。だから音楽室一室を、杉本さん専用の喫茶店にしたんですものね」

良く知っている。やはり生徒会でも梨南ちゃんの存在は強烈に焼きついているのだろう。

「そうらしいわ。でも、私は、うまくいえないけど紅茶はどれも同じだし、ケーキも」

こそっと声を潜めた。

「スーパーの美味しいのと変わらない味にしか思えないし。それにノートとかカンペンも、ピンクでいっぱいキャラクターグッズの方が好き。でも梨南ちゃんからしたらそれは、下品な人間の好みだって言うの。もちろん梨南ちゃんはそういう趣味だからしょうがないのだけど、私はやっぱり違うんだって、小学校卒業する時に気が付いたの」

これで大丈夫だ。梨南ちゃんの悪口では決してない。もし立村先輩が聞き耳立てていたとしても、言い訳できる。

「そうなの、うんうん、わかるわそれ」

「でも、梨南ちゃんはそう思ってくれなかったの。そうだと思うわ。今までずっと親友だと思ってきた相手が、いきなり私は違うって言い張り出したのだもの。だからそれ以来、梨南ちゃんは私を無視し始めたの。もちろん、私も悪かったと思うの。言うべきことをきちんと言わないで、流されるままだった私がね。でも、私だけではなくて他の人たちや男子たちにも迷惑をかけ始めてしまって」

「それで桧山先生が怒り出したというわけね」

「そういうことなの。もっと私が上手に言うことができたらよかったのだけど」

ほっと一息ついて、私はイチゴをそっと口に運んだ。

「でも噂によると、相当杉本さんは、佐賀さんのことを恨んでいるようね」

「しかたないわ」

梨南ちゃんの大好きだった健吾を、私が奪ったようなもの。だからそれで恨まれるのは覚悟していた。でも私からしたら、健吾と梨南ちゃんは、タイプが違いすぎるし、住む世界が全く異なる。「アルベルチーナ」の中でお上品に振舞いたい梨南ちゃんに付き合ってお茶してくれるのは、世界狭しといえども立村先輩ひとりだけだろう。梨南ちゃんは立村先輩に思いっきり甘えればいいのだ。そうすればいくらでも、やさしくしてもらえるのに。守ってもらえるのに。そして、関係ない人たちには迷惑かけないですむのに。

「でも、それって大損だって思わない？」

「なぜ？」

問いの意味がわからず、私はフォークを持つ手を止めた。

「そんな単純でおばかな人を、どうせだったら利用すればよかったのよ」

「利用？」

また、身体が震えてきた。なんでだろう。この人にはテディベアを抱き上げて「きゃあ、可愛い！」と微笑んでいる一瞬と、「さっさと帰って！」と言い放つ氷の冷たさが両方宿っている。どうしてなんだろう。そんな人が私になんの用なのだろう。

「いい、佐賀さん。私なぜ、風見さんと友だちでいるかわかる？」

首を振って答えた。わかりそうで、わからない。わかってしまったら、まずい。

「つまりね、あの子は利用されてもいいって、自分から志願してきた子なの」

「志願してくるって、契約？」

「そうね。小学校卒業して、青大附中に入学する時、約束したの」

渋谷さんも彼女なりに考えるところがあったのだろう。両膝に手をおき、背筋を伸ばした。

「私を親友扱いするのはかまわないけど、一線は越えないでねってね」

一線ってなんだろう？

「そんなびっくりすることじゃないわよ。ほら、よく女子同士でいるじゃない？ 親友だからわかってくれるわよね、とか親友だから味方になってほしいとか言い合うの。私も女子だから気持ちかわからないわけじゃないわよ。友だちだからこそわかってほしいってのはある。けど、それを風見さん相手に打ち明ける気にはならないの。そこのところだけ、わかってねってきつく伝えたのよ」

「それで、風見さん、いいって言ってくれたの？」

指先が冷えたのは、決して室温が下がったからじゃない。かえって暑いくらいなのに。

「たぶん、わかってなかったみたいね」

さっと切り捨てるように呟くと、渋谷さんは静かに笑った。

「だから、折々にきちんと伝わるよう態度で示す必要があるけど、それはそれでいいわ。私なり

にいい関係ではいると思っているから。風見さんの望んでいるものをそのまま、私はあげてるだけ。一緒にいる時に『ドリ』って呼ぶことと、たまに家へ遊びにいたりすること。時々あの子の話を聴いてあげることもあるわ。でもね、私の方から話をしたいとは思わないわ。だって、あの子と話しても何も、得るものがないもの。性格はいい子だし、決して嫌いなタイプじゃない。でも、今、佐賀さんと話している時のような気持ちは味わえないわ」

私はどう答えたらよかったのだろう。

「そうなの」

頭の働かない言葉しか返せなかった。

「だから、佐賀さんもそうすればよかったんじゃないかなって思うわ」

渋谷さんが話しつつける言葉を聞き流しながら、私はやはり、梨南ちゃんと縁を切ってよかったのだと改めて感じていた。だって、梨南ちゃんは渋谷さんのような女子をこよなく嫌うだろう。同時に私は、もう渋谷さんを嫌うことはできなくなっていた。私が本来、梨南ちゃんにすべきことを、いまさらながらさらさら並べてくれていた渋谷さんを。

「そうよ、たぶん私が思うに、佐賀さんは杉本さんから縁を切るのではなくて、うまく利用する方向で考えれば大事にはならなかったんじゃないかしら。誉めて誉めて、誉めまくって、同時に他の友だちと仲良くして、本心言う友だちと建前の友だちとを分けて付き合えばよかったんじゃないかしら。杉本さんって人、噂でしか聞いたことないけれども、自分が頭よくてすごいんだってことがわかれば、単純に動く人らしいわ。そうして、試験前にノートを貸してもらったりすればよかったんじゃない？」

どうして私は、渋谷さんともっと早く話をすることができなかったのだろう。

——梨南ちゃんを誉めるだけ誉めて、それから立村先輩をたたえるだけたたえて、そして二人をくっつければ、今までのことはすべて起こらなかったかもしれないのね。

渋みが強くなったミルクティーを二杯目、注いだ。

風見さんのおねだりにまけちゃったという感じだった。本当のところは。

「ねー、今度の日曜、うちに遊びに来てよ」

毎日、休み時間も、放課後も、そればかり繰り返すので、なんだか根負けしてしまった。渋谷さんがOKを出していたので、その辺も正直なところある。もしひとりだったらかなり気が重たくなるのだけど、渋谷さんとだったら話も盛り上がるだろう。もともとこのふたりとはこれからも付き合っていくことになりそうな予感もしていた。

たった一週間ちょっとしか経っていないのに、もう私の中で渋谷さんと風見さんは「友だち」の場所にしっかりと根付いていた。渋谷さんが持つ風見さんへの「差別」の念も、風見さんの出す無条件の好意も、私にはどちらも必要に思えた。

——差別、してはいけないけど。

たぶんつながりたいのは渋谷さんの方だろう。あの日放課後に「アルベルチーナ」でケーキを味わった時。かなりきわどい話をしていたにもかかわらず、あの後私はたっぷりとおしゃべりを楽しんだ。本来だったら、

「親友って言うてくせに、そんな利用するなんて、最低よ」

みたいなことを一言くらい言ってもよかったのに、そんな気がさらさら起こらない。

それどころか、

「そんなに、風見さんって困った人だったの？」

そう聞いてしまった自分もいた。もっとも渋谷さんは私にそこまで話をすることに警戒心を持ったのだろう。

「また、今度、いつかね」

やわらかく、それでもはっきりと突っぱねた。

その後、なかなかふたりっきりで話をするチャンスはなかった。お互い学校祭後の片付けとかもあったし、それ以上に私の場合健吾がうるさかった。風見さんと一緒に話をしている時は大抵、

「おい、こっちに來い、さぼってるんじゃないねえ」

とか言って、いきなりバスケ部の練習を見る羽目になる。ひとりの時はそれも自然だったけど、せっかく友だち同士で盛り上がっている時にそれはないんじゃないだろうか。私も最初は文句を言ったけれども、健吾がやたらと機嫌悪いのでしばらくはあわせることにしている。ただ、風見さんだけではなく渋谷さんもセットでくっついていて、意外とちょっかいを出してこないのが面白い。きっと、健吾は風見さんタイプの女子が嫌いなのだ。ただ「生徒会副会長」の渋谷さんには肩書に敬意を払わざるを得ない。そんな計算をしているかどうかわからないけど、私はできるだけ渋谷さんを含めたグループにいつくようにしていた。

そして、今日は健吾のお誘いもあっさり断って、風見さんの家へとおめかしして出かけた。

パステルグリーンのワンピースに茶色のボレロ、それにちょこっとだけ色つきリップクリーム

を塗り、髪の毛は下ろしていくことにした。前もって渋谷さんから風見さんに関する情報を耳にしていたのもあった。

「風見さんはね、お嬢さまだから、お上品な格好のお友だちが大好きなのよ」

いささか、嘲り調子。

私もそのあたり感じてないわけでもなく、しっかりコーディネートしておいた。

お天気は晴れ。お昼前の十一時に風見さんと待ち合わせ、まっすぐ風見さん家へと向かう。

外の風がだんだん冷たくなってきているとはいえ、やはりコートを着るのは暑苦しい。ボレロで十分だった。待ち合わせ場所は青潟駅の改札にした。本当は佐川書店に寄っていきたくったけど我慢した。だって、ピンクのリップクリームが、思ったよりも濃い目に感じられたから。

「お待たせ。あら、可愛いわ」

「ありがとう」

見ると、渋谷さんは紺色のジャンパースカートにレース付のブラウス、その上に同じく紺のブレザー。ちょっと見には高校生の制服っぽく見える。でもスカートがふんわりと広がっていて、後ろに大きなリボンがしらわれているところがやっぱりお嬢さまっぽい。私もお返しにちゃんと誉めた。

「やはり、TPOが大切だしね」

「風見さんの家って、そんなにドレスコードが厳しいの？」

もちろん冗談で言ってみただけだった。立てた指で「しーっ」と唇を一本にした後、渋谷さんはいたずらっぽく頷いた。

「家がっていうよりもね、風見さんご本人がかなり、うるさいのよ」

「おしゃれなの？」

「おしゃれというよりも。とにかく行けばわかるわ。その前に簡単に注意しておくことを伝えておくわね」

注意？

友だちの家へ遊びに行くのに、「注意」なんてことはないのに。

でも、小学時代からのお付き合いなのだしいろいろあるのだろう。素直に聞いておくに限る。私が頷いたので、一緒に青潟駅から出て、そのまま海辺沿いの道路を歩いていった。

「ちょっと歩くけど、いい？」

海風が硬く頬に触れる。せっかくだったら帽子をかぶってくればよかった。少しべとついた感じの髪の毛を押さえながら、私は渋谷さんの言葉に耳を済ませた。

「風見さんが元、品山に住んでいたことはこの前話したわよね。あの子のお家もお金持ちだから、どうしても青大附中に進学させたくて、それで家を駅前近くに建てて引っ越してきたんだって言ってたわ。本当言うと、その地域、水鳥地域だから本来だったら水鳥小学校に行くはずだったのよ、あの子も」

「水鳥地域？」

佐川さんの顔が潮の匂いに包まれて浮かび、すぐに目をぱちぱちさせた。

「同じ駅前でも、水鳥小学校に通う子のレベルはそれほど高くないの。でも、私のいた棚氷小学校はわりといいとこのお坊ちゃまお嬢ちゃまが揃っていて、なんとなく青大附中受験しておけばいいかなって雰囲気なのよね。私もそののりで受験した組なんだけどもね」

「そうなの」

私のように、健吾と梨南ちゃんに命令されて受験したのとは違うんだ。

「学校の先生たちも気合の入り方が全然違うし、受験する子としない子との扱いが百八十度違うの。公立しか考えてないやる気のない子はおいというて、成績のいい子にはとことん面倒見てくれるからいいって、お父さんお母さんの間でも大人気らしいわ。私も青大附中に来て初めて知っただけどもね」

「もしかして、青大附中ってコネ入学が多いって言うけど、その関係？」

渋谷さんはいきなり首をぶんぶん振った。とんでもない、って打ち消す風に。かなり強い否定だった。

「コネはまた別よ。私たちが受験した時はほとんどなかったんじゃないかなって聞いているわ。私の知っている限りだと、一年上の先輩たちの受験時が一番すごかったらしいのよ。ほら、三年評議にいますでしょう。霧島先輩っていう、お姫さまのようにきれいな人。あの人は確か、『霧乃華』という呉服屋さんのお嬢さまで、それこそお金の力で合格ってことを聞いているわよ。霧島先輩の話についてはいろいろ噂聞くけど、本当のことは今の話だけだと思うわ」

てっきり、霧島先輩といえば、子どもの頃に悪い男の人にいたずらされた恥ずかしい過去を持つ人だとしか思っていなかった。あえて口には出さないけれども、自分で逃げる判断ができず考える能力を持たない人だったらそれも当然だろうと私なりに見極めていた。

「そのことを考えると風見さんが裏口入学をしたという可能性は少ないわ。実際、あの子、私よりも成績よいもの」

それは意外だった。渋谷さんは笑った。

「私、成績よいと思ってた？」

「そんなこと、わからないし」

「生徒会役員だからといって、成績がいいとは限らないわよ。聞かぬが花ね。長い前置きで申し訳なかったわ。つまり、風見さんは越境入学してきたのよ。水鳥小学校学区であるにもかかわらず、どうしてもレベルの高いうちの小学校でばりばりやりたかったからってこと」

「でもその前に、品山小学校から転校してきたのでしょうか？」

「あの学校からうまく入ることができるわけじゃない。いい、知ってる？ 過去五年間において、品山小学校から青大附中に合格したのは立村先輩だけよ。それも正統派のやり方じゃないのよ。一種のモルモットとして、よ」

あっさりと言い放つ渋谷さんの発言は、たぶん問題だろう。

彼女と話をしているいつも感じるのは、自分の身の回りにいる人たちを完璧に上と下に分けて観察しているということだった。風見さんにもそれは感じなくもない。ただ、渋谷さんの場合だと、そう言い切ってもかまわないと周囲にも思わせるだけの自信があった。風見さんが同じこ

とを言っても、誰かが疑問符を持ってきて目の前にぽんと出してしまいそうだけでも、渋谷さんだったら頷いてしまう何かがある。

「そうなの、品山小学校はそんなにレベルが低いの」

「だかららしいわね。風見さんのご両親は、青大附中に彼女を合格させたくて、あえて家を引っ越すことができるんだもの、そりゃあ、お金持ちよ」

ごもつとも。私には想像つかないほど、きっと、そうなんだろう。

私は風見さんの風鈴っぽくがっちり固められたヘアスタイルを思い浮かべた。いつもつやつや輝いている髪、あれは相当お手入れしないと無理だろう。また、学校祭の時もいきなり「ロイヤルコペンハーゲン」とか有名な食器のブランド名を口に出したりしたっけ。行動が少し頭のレベル差し引きされるような感じだけど、それなりにいいものを使ったり見たりはしているのだろう。

。

「そんなお金持ちのお嬢さまの家に、行くのね」

「大丈夫よ。私も何度か行ったことあるしね、ほらあそこよ」

見ると、取り囲む二階建ての家々とはどうも不調和な色合いの建物が目に付いた。

大抵の家が白や淡いクリーム色なのに対して、その家は少し暗めのピンクに彩られていた。差し色はブルーで、どうみても周囲との調和が取れていない雰囲気だった。裏からかすかに潮風が流れてくる。窓から海が見えそうだけど、津波に遭ったらどうするんだろう。玄関の呼び鈴を押す直前まで、私はいろんなことを考えた。

「わあい、来てくれたのね、ほら、ママ、私の友だちよ」

風見さんはいかにも、さっきから出入りそわそわしていたようのが見え見えだった。靴が脱ぎっぱなしにされているのは、きっと私たちが来るのを今か今かと待ちわびていたからだろう。慌てて靴をそろえて脇に置くと、

「こちらが、私の親友の、佐賀はるみさんよ」

隣ですでに顔見知りの渋谷さんが頭を下げている。目の前で迎えてくれたのは、風見さんとほとんど同じ髪形をしている女性だった。年齢は結構いってそう。たぶん五十才くらいかな。薄く茶色に髪の毛を染めている。

「ようこそ、百合子といつも仲良くしてくださってありがとう」

「じゃあ部屋に行ってるから、ママ、早くお昼持ってきて！」

私たちは靴を揃えて玄関に上がり、もう一度丁寧に礼をした。

渋谷さんが手馴れた風にかばんから小さな箱を取り出した。よく見たら、有名なチョコレートのブランド名が箱の上に印刷されていた。お土産ってことだろうか。でも包み紙なしというのはどういうことだろう。渋谷さんはよどみなく続けた。

「あの、うちの母がぜひに召し上がってくださいとのことでした」

「あらあら、ありがとう。いつもありがとう」

何も持っていかなかったのはまずかったかもしれない。そういえば梨南ちゃんの家に行く時もこうやってうちの母が持たせてくれてたっけ。少し気まずい思いで立っていると、風見さんの声

が響き渡った。

「早く、そんなところにいないで！」

階段を昇って一番奥の部屋に通された。ドアでしっかり区切られていて、黄色いリボンでいっぱいの壁紙がびっしり張り巡らされていた。どこかで見たことのあるような雰囲気だった。渋谷さんと私はベッドの上に腰掛けた。

「それにしてもねえ、どうしたの今日はふたりとも、元気ないよ」

「別にそういうわけじゃないわ」

私が答えると、風見さんはまたぶんぶんと首を振った。風鈴揺れた。

「そんなことないよ。なんだか隠し事してるなあって気がするなあ。私を仲間はずれにしたでしょ？」

そんなことないわ、そう答えようとしたところに渋谷さんが救ってくれた。

「ドリ、あまり変な勘ぐりするのやめたら？ 佐賀さんが困ってるわよ」

「だってえ」

甘ったれた口調ながらも、不承不承に追求を止めてくれた渋谷さん。動物的直感は鋭い人かもしれない。このあたりは扱い方のうまい渋谷さんに任せておいた方がよさそうだ。

「紅茶、何がいい？ アールグレイ？ それともウバ？」

「いいわよ、ドリのお勧めで」

「じゃあ、最近覚えた最新メニューをご用意するわよ。知ってる？ トルコのチャイって飲み物。紅茶をミルクで煮出すのよ。さっきママに淹れ方習ったの」

この人、本当に私と同じ年齢だろうか？

なんで「ママ」なんだろう？

聞いているだけで気恥ずかしくなってくる。

「ドリ、お任せするわ。私が持ってきたお菓子といっしょにいただきますよ」

落ち着いて交わす渋谷さん、そうとう風見さんの扱い方に苦勞してきたんだなって思った。

背を向けて部屋を出て行った風見さんを見送りながら、渋谷さんはまた私に目配せしてきた。言いたいことは、わかる。

「しばらく戻ってこないけど、少しだけ注意した方がいいわ」

また、「注意」だ。今見たところ、渋谷さんが心配するような出来事は特に起こっていないよ。家の色がピンクというのはちょっと何か違うのではと思うけど、中はそれなりに女子の部屋っぽいし、お母さんもお年を召している以外とりたてて問題はないような気がする。

「彼女の家族、あとお兄さんとお姉さんが四人いるのよ」

「五人きょうだい？」

「そうなの。だからもしかしたら、その人たちが私たちが様子伺いにくるかもしれないから、その時にはめいっぱい笑顔で『お邪魔してます！』と答えるのがコツよ」

きょうだいたちが顔を出すなんてこと、あるのかしら？ たとえば私の場合だと、弟の基樹が

幼稚園ってこともあって、とにかくうるさく付きまとってくる。こうやって外に出るようにしているのも、基樹の面倒を押し付けられたくないというのもあった。

「それが、私とあの子との契約条件なのよ」

また意味不明なことを渋谷さんは言った。契約条件って、何だろう？

尋ねる間もなく、噂をすればなんとやら。ノックする音もなく、いきなりドアが開いた。

「あら、名美子ちゃん、こんにちは」

黄色いシャツに緑色のネクタイ、それに共色のひだスカート。この格好はたぶん、私立高校の制服だろう。青大附属でないことだけは確かだった。とにかく丁寧に頭を下げることにした。

「おじゃましています」

「あら、あなたは？ 百合子のお友だち？」

「はい、佐賀といいます。おじゃましています」

私も同じく「おじゃましています」を繰り返した。じろっと私を値踏みする視線がやたらと鋭いのはなんでだろう。肩につかない程度のストレートボブヘアなのだけど、やはり不自然にまっすぐで艶がある髪の毛。目が少し細いのはやはりきょうだいの遺伝なのだろう。

「あの子もずいぶんまともな友だちを作ったもんよね。苦労するだろうけど、よろしくね」

苦労？ なんだか初対面の相手に対してずいぶん失礼なことを言うものだ。でも、妹を心配して言う言葉ならば、言い返す必要もないだろう。私は笑顔でこっくりと頷いた。ドアが閉まった後、渋谷さんは耳元でささやいた。

「あの人、四番目のお姉さんよ」

「何か私、じろじろ見られていたような気がするんだけど、何か目立ったことしたかしら」

「あの人いつもそうよ」

あっさりとして渋谷さんは断言した。

「五人きょうだいの中で風見さんは末っ子でしょう。いつもばかばかかってばかにされているらしいのよ。いろいろと事情があるみたい。で、きょうだいのみなさまは末っ子の友だちがどのくらいのランクに属する人間なのかが気になって仕方ないの。自分たちよりも上か下か、レベルが高いか低いか、そればかり気にしてるのよ」

ランク、レベル。また心が閉まる。

「さっき品山小学校のこと話したでしょう。風見さんの部屋はわりとまともなインテリアだけど、居間につれていかれた時はもうびっくりしたわよ。いったいこの人たち、なんでこんなセンスのない飾り方してるわけ？って驚いちゃったもの。いい？ よく旅行先で見かけるペナントとか、その場所の名前が大きく書かれているような飾り物。酉の市の熊手、きんきらきんの虎の置物。とにかく、色彩のセンスなくただ飾ってあるってだけ」

イメージしてみる。修学旅行の時に男子たちがこぞって買いあさっていたペナント。あれは部屋に一枚貼りつけるだけならいいかもしれないけれども、あまり表に出したくないものだった。健吾も実は派手なものが大好きでよく部屋にバスケットボール選手のポスターをいっぱい張っているなあ。なんて思い出した。

「とにかく、違うのよ。私たちと、感覚が」

最後の「感覚」という単語を、渋谷さんは強く発音した。

チャイという飲み物は美味しかった。この前行った「アルベルチーナ」で飲んだ紅茶よりも私好みだった。甘くて、それでいて温かくて。また一緒に出てきた散らし寿司や渋谷さんの持ってきてくれたチョコレートも。

「私がんばったんだもの、ねえ、美味しいでしょう？」

「うん、とっても」

嘘なく私は大きく頷いた。

「ほんとうね。ドリが学校祭でお茶係になった方がよかったんじゃないかな」

明るく誉める渋谷さん。笑顔でいっぱいだった風見さんがいきなり、髪の毛をまた風鈴状態に振った。

「冗談じゃないわよ。私、あんな牢屋に閉じ込められるようなことしたくないわよ。あのばか女子と一緒に何するっていうのよ、許せないわよね私」

「ごめんごめん、冗談冗談」

「冗談でもそんなこと言わないでよね。私、純粹にお茶が好きただけなんだからね。だって私、こういうのを人前で恥ずかしくもなく堂々とやるなんて、みっともないっらないわよ。ほら、ハルのことをいじめていたあの女子よ。杉本？ あの女子最低よね」

「友だちのことを悪口言うのはやめて」

言おうとして、はっとした。膝に手が伸び、軽く叩く気配がする。横目で見るとそれは渋谷さんの手だった。がまんして、の合図だろうか。渋谷さんの判断ならしかたないだろう。

調子に乗ったのか、また風見さんは反省の色なく続け語った。

「あんな女子に生徒会長やらせてたまるものですかって言いたいよね。ああいう奴はね、E組のおかしいクラスで、おかしい馬鹿評議委員長と一緒にくっついていちゃいちゃしてればいいのよ。私たちに迷惑かけないでいてくれればいいのにね。ナミー、そう思わない？」

「ドリ、少し言い過ぎよ」

「だって、頭くるじゃない！ 生徒会をあの女の手で汚されるなんてやだって言いたいでしょ。ねえハル、ほんとはね」

私はしばらく、口の中で甘く広がるチョコレートの味も感じられずにいた。

今、風見さんが梨南ちゃんに対して言った一節。

——あんな女子に生徒会長やらせてたまるものですかって言いたいよね！

——梨南ちゃんが、生徒会長？ まさか。

頭の中が少し混乱してきている。まだ口の中のチョコが溶け切らない。そっと奥歯で噛み砕いた。隣の渋谷さんが困った顔で私をちらと見、静かに告げた。

「ドリ、悪いけどまだ決まっていないことをべらべらしゃべらないでくれる？ 生徒会内の問題よ。ドリは余計なこと言わないでね」

「だって、大変だよ、だって、だって」

言い募る風見さんに、渋谷さんは止めを刺した。

「もし余計なことを言いもらしたりしたら、親友やめるから、いい？」

「親友」という言葉。

いったい、なんなのだろう。

かつては私も梨南ちゃんのことを「親友」だと思っていたけれど。

渋谷さんと風見さんが親友だとしたら、いったい「親友」って心を許しあえる存在なのだろうか。疑問が湧いてくる。最初から渋谷さんは、風見さんのことを徹底的に見下している。仔細はわからないけれども、同じ小学校でいながら、品山小学校からの転校生というところにその理由を見つけている。もちろん、品山小学校から青大附中に合格した人が、過去五年間で立村先輩だけというのはちょっと、レベルに疑問を感じても不思議はない。だけど、そういう相手をあえて友だちでいる理由ってなんなのだろう。

「契約」「約束」「親友」

いくつかのキーワードが脳内を駆け巡っている。

だんだんひきつけられていく渋谷さんの思考に、私はまだ、踏み込めない。

踏み込んだら最後。正々堂々とは全く異なる社会に、すんと座り込んでしまいそうだった。

「いいわよ、もう、みんな意地悪」

納得したのだろうか。魔法の言葉「親友」でもって、風見さんはおとなしく散らしご飯に箸をつけ始めた。箸の持ち方が拳骨握りで、しかもぽろぽろ落としている。時々先をなめるしぐさをする。こんな食べ方したらお父さんやお母さんに怒られたりしなかったのだろうか。うちの基樹はいつも食事中、お父さんに怒鳴られて泣いているのに。

隣の渋谷さんは私と同じく、きちんと箸を使い、甘いそぼろ部分をふっくらしたまま口に運んでいた。

陰ではさんざん風見さんの悪口を言っていた渋谷さんだけど、表向きはきっちりとした「親友」の顔をして楽しんでいたみたいだった。二時間くらいおしゃべりした後、

「ごめん、夕方から出かける用事があるのよ」

立ち上がった。私にちらと目配せした。私も気付かない振りしてスカートのしわを伸ばしながら、

「私も、これから弟の面倒を見なくちゃいけないの」

もちろん、家にすぐ帰る気なんてさらさらなかった。

あんなうるさい基樹の相手をさせられるなんて、いくらやさしいお姉さんだとしても耐えられない。

「そうかあ、残念」

ぼそっと呟く風見さんは、例のきれいに整った髪の毛をつまんで両耳にかけると、

「じゃあ、また遊びに来てよね。約束よ！」

小指をずんと突き出された。どうしたものかと渋谷さんを窺うと、即座に自分の小指を絡ませて、

「ゆびきりげんまん嘘ついたら針千本の一ます！ 指切った！」

全く似合わない声で、楽しげに指きりしていた。しかたないので私も真似した。

ピンク色の家で、風見さんのお母さんから馬鹿丁寧な挨拶を受けた後、私たちはピンク色の家を出た。戸口でずっと、風見さんが手を振っているのも私たちも何度か振り返り、一礼をしなくてはならなかった。私がそうしたいと思ったのではなく、渋谷さんに勧められたからだった。

やっと路を曲がってふたりきりになった。最初に来た道ではなく海辺沿いの小道へ渋谷さんが足を向けた。たぶん私ともう少し話をしたいのだろう。でも夕方から用事がある、というのが本当だったらあまり時間を食わせるのも悪い。

「どこか出かける用事があるなら、無理しないで」

「建前に決まってるじゃない。あのままだったらもう大変よ。風見さん私たちを引き止めるために、紅茶だけではなくて珈琲やジュースやら、とにかくありとあらゆる飲み物を用意して、しゃべりつづけるもの。帰したくないのよ。本当は」

もちろん、「親友」と語り合うのならばそれが自然な気持ちだろう。

でも、渋谷さんは親友だと思っていないわけだから、逃げ出したいのも当然の気持ちだろう。

「とにかく、今私は、佐賀さんと話したいの、いい？」

「いいわよ」

私は何も知らない風に、子どもっぽく頷いた。海が少し揺らいでいるようだった。暗く、風も強そう。スカートが足に絡み付いて転びそうになった。

「佐賀さん、さっき風見さんが口走ったこと聞いて、驚いたでしょう」

知らない振りをするのも不自然だ。私は素直に頷いた。

「やはりね」

渋谷さんはヘアバンドをはずし、ポケットにしまいこんだ。前髪が降りると雰囲気が変わってどことなく、風見さんと似た風に見えた。そんなこと言ったら怒られそうだけど。

「このことは、実を言うと最近入ってきた情報なのよ。だから佐賀さんが知らないのも無理ないわ。今、生徒会でもこの問題でどう対処しようかって頭を抱えている最中なの」

「でも、なぜ風見さんがそのこと知ってたの？」

そんな機密問題なら、なんの委員会にも所属していない風見さんがかかわる隙なんてなさそうなのに。まさか渋谷さんが教えたのかしら？ 私の疑問は聞く前に打ち消された。

「たまたま、風見さんが職員室で聞きつけたからよ。私が教えるわけじゃない。それに、風見さんの知っていることはほんの一部なの。話がごちゃごちゃしてしまうのもなんだし、それに佐賀さん、あの人と因縁があったみたいだし。話しておいた方がいいと思ったの」

あの人、とは当然梨南ちゃんのことだ。関心のないわけがない。

「私に話していいことだったら、ぜひ知りたいわ。もちろん誰にも言わない」

「次期評議委員長にも？」

健吾の顔が波間によぎった。すぐに消えた。

「もちろんよ。新井林くんは私のことなんて、当てにしてないもの」

健吾が欲しいのは私そのものだけ。能力や言葉はそれほど欲していない。

佐川さんと健吾の求める差は、そこにある。

また潮風が口笛吹いた。渋谷さんも同じく唇を尖らせた。

「それならいいわ。ちょっと寒いけど、外で話す」

人に聞かれたくない話なのだろう。もう少し温かい格好でくればよかった。たまたま通りがかったバス停の椅子が空いていたので私たちはそこに座り、海辺を背にして語らった。

——梨南ちゃんが生徒会長に立候補する。

ありえないことではなかった。もともと梨南ちゃんは「長」という名の肩書に、過剰なほどこだわる場所があった。小学校時代も「学級委員」を始めいろいろな委員に立候補したけれども、梨南ちゃんの性格を知っている人たちが大抵「長」にしないよういろいろな方法を考えていたようだった。当時の私は全くわからなかったけれども、「男子だから」という理由で健吾をいつも上にするようにしていたみたいだった。梨南ちゃんは「男女差別よ」と怒っていたけれども別の女子が委員長になったりした時にはそれほどバッシングがなかったこと考えると、やはり、隔離作戦だったのではと思うしかない。

青大附中に入って最初の一年、立村先輩にひいきしてもらいあわや評議委員長か？と噂された。あの頃の梨南ちゃんのはりきり方は、もう遠のいた私から見てもかなりまぶしかった。勉強はもともと一生懸命だったけど、立村先輩にいつもくっついては、

「学校祭の準備はもっと手際よくできないんですか！ 私ならばもっとてきぱき準備しますがどうして私にそのことをご相談いただけないのですか」

などと、上級生相手とは思えない口調でくっつかかっていた。あれが梨南ちゃんなりの愛情表現だと気付いていなければ、追っ払われてもしかたのないところ。

評議委員長になりたかったのに、またも健吾に奪われてしまった梨南ちゃん。ならば、復活戦としての生徒会長立候補も、全くありえないことではなかった。

私がそんなことを頭の中に編みこんでいたら、渋谷さんは違うとばかりに片手を揺らした。「生徒会なんてしょせん、先生たちのご用機関だと決め付けていた人が、いきなり生徒会に立候補しようと思うかしら？」

「でも、今の梨南ちゃんはそこまで追い詰められているし」

「あのね、佐賀さん。あなたは杉本さんを買いかぶりすぎてる」

いきなりばさっと切られたようなひんやり感が首筋に漂った。

「成績はいいし、仕事もできなくはない。でも、しょせんあの人はね、先生たちの手でぐるぐる回されている独楽みたいなものよ」

「こま、独楽？」

「そう、だって今回の一件は、すべてあの人を教育するための一環として、生徒会選挙を利用するだけのものなのよ。まあ、こちらとしてもむっとくるけど。だって教師が考えてることっていうのは、生徒会が大人の手で弄りまわせる場所だと決め付けていることばかりだから」

ますます言われている意味がわからなかった。でも渋谷さんは私が理解できているものだという前提のもと、話を続けた。

「学校祭でもそうだったけど、駒方先生が杉本さんをなんとかして更生させようとしているのはもう見え見えよね。わざわざ一生徒のために喫茶店企画を持たせようとするなんて、信じられないくらいよ。駒方先生の場合、現在講師として来てもらっているのと同時に、杉本さんのようなタイプの困った人専用教育係として活動していただいているようなもの。だから、手をこまめにかけて、一生懸命に育てようとしている様子よ。私たちのように、三十人学級の中にぼんと放り込まれて、その中でおとなしくひよこっぽい顔して座っている生徒とは話が違うみたい」

比喩が独特すぎた。私はわからないなりに頷いていた。

「杉本さんを更生させるきっかけとして、まず三年の西月先輩のフォロー役をあてがって、手芸を始めお茶出し関係のおしゃれな仕事で自信をつけさせ、次にと考えたのが生徒会長への立候補ってわけ」

「でも、生徒会長に立候補って」

「あくまでも生徒会長立候補、よ。生徒会長を務めなさいってわけじゃないのよ」

あいかわらず渋谷さんはさっぱりした口調で言い切る。

「駒方先生の目的は、杉本さんに生徒会長立候補そのものを体験して、成長してほしいのよ。生徒会長になるのは最初からありえないという前提のもとなのよ」

「ごめんね、少し混乱してきちゃったわ。渋谷さん少し待って」

いろんな情報が入ってくると私の頭ではまだ、消化しきれないみたいだった。佐川さんみたい

に切れる人になれたらいいのにな。

梨南ちゃんがE組入りしてから、駒方先生が一生懸命接してくれているという話は聞いていたし、傍目からもよくその様子が窺えた。噂では一度も梨南ちゃんを怒鳴ったことがないともいうし、かなり失礼な言動が続いても駒方先生は梨南ちゃんの見方として懸命にかばっていたとか。もし駒方先生が正式な青大附中の教師だったらいろいろ問題もあるのだろうけれど、功劳のあった元教師だしということでかなり大目に見てもらっているとも聞いている。どこまで本当なのかはわからない。

だから、今、渋谷さんが話してくれたことが可能性としてはある、とも言える。

私たちを始めとしたグループから疎外され、好いてくれるのは立村先輩くらい。この前の学校祭で梨南ちゃんにまわりついた秋葉くん程度の男子がお似合い、そういう認識がいつのまにかある。いわば、普通の感覚を持つ青大附中の男子は、梨南ちゃんのことなんて絶対関心を持たないのだ、立村先輩以外は。そういう割り切りが確かにあった。

そこまでプライドを傷つけられた梨南ちゃんが復活するとしたら。

「評議委員長よりも、生徒会長の方が、トップだと思うかもしれないのね」

「そう、これからはそういう形になるはずよね」

はず、という言葉に現在の「評議委員会至上主義」が窺い知れる。

「立村評議委員長のおかげで少しずつ、生徒会にもチャンスが出てきたというわけ。来年以降もしかしたら、次の生徒会長が堂々と交流会を仕切り、参加する形になるかもしれないわ。今までは評議委員会中心だったことが、少しずつ」

「そうなの」

健吾には聞かせたくなかった。健吾はきっと想像なんてしてないだろう。評議委員会がただの委員会に落ち込んで、生徒会の方をみなが評価するようになるなんて。健吾は信じている。自分が将来、生徒会長に見下される立場に立たされるなんてこれっぽっちも考えていないはずだ。

ましてや、その相手が梨南ちゃんだなんてこと。

「どちらにしても、生徒会に杉本さんが入るということはありませんわ。だって生徒会は基本的に信任投票制度だし、今残っている二年生がみな持ち上がる形になるし、一年生が書記と会計にそれぞれ入ってくれば問題はないの」

「なら、なんで梨南ちゃんが？」

「簡単よ。杉本さんに生徒会選挙というものを自分で体験してもらって、それで『成長』してもらうためのよ。駒方先生にとって生徒会改選は、あくまでも教育の場なの。私たちのようにのんびり楽しむ部活動の一種とは、違うのよ」

なんとなく、納得できたような気がする。

私はこっくり頷いた。また口笛っぽい風がすり抜けた。手がだんだん冷えて赤くなってくるのがわかる。何度も指をもみしだいた。

——教育の場。

どうしてこんなに詳しく渋谷さんが知っているのか私には想像もつかなかった。

もしまかり間違っただ梨南ちゃんが生徒会長になったらどうするんだろう。そんな心配なんて爪の先程度の恐れも抱いていない様子だった。信任投票といえば、立候補者が定員通りの数で納まり、「誰を選ぶか」ではなく「この人でいいですか」という問いにイエス・ノーで答える、それだけだ。よっぽどのことがない限り、信任投票で否決されることはないはずだ。

ということは、もう生徒会長立候補者は決まっているのだろうか。

でも、生徒会長立候補者が二人いたら、その段階で信任投票ではなくなるはずだ。

もちろん渋谷さんの言う通り、梨南ちゃんが誰を相手にしたところで勝つとは思えない。だって梨南ちゃんの悪評はすでに学校中に轟いている。なんといってもE組にいるということだけで十分なマイナスポイントだろう。梨南ちゃんがどう思っていようとも、E組が「普通学級でトラブルの多い人たちの逃げ場」として認識されているのはひっくり返せないほどの事実なのだから。

最初から負け戦決定。

梨南ちゃんはそんな戦に出る覚悟なんてあるだろうか。

「それがね、おかしいのよ」

渋谷さんは前髪をつんつんと指先で引っ張った。

「先生たち、杉本さんをおだてるようにして、『生徒会長として、一度自分の言いたいことをぶつけてみないか？ 本当に訴えたいことを全校生徒の前で叫ぶ、最大のチャンスだよ』って言い聞かせてるんだって。あの人、単純みたいね。すぐに乗せられたみたい」

「そうね、梨南ちゃんは確かに単純よ」

誉めて、おだてあげれば何でもしてくれる。そんな子だった。

甘えて、助けてと叫べば、どんなにいじめられてもへこたれず守ってくれる子だった。

「でも、落ちたあとはどうするのかしら」

すでに私も、梨南ちゃんが当選する可能性を一パーセントも信じてはいなかった。

「その辺は駒方先生が責任取ってくれるはずよ。それにね、先生は立候補および落選体験をしてもらって、杉本さんを成長させたいってそれだけのことよ」

「そうなの」

私はしばらく無言で海を眺めていた。夕暮れの色がだんだん海面に映ってきていて、暗く沈んでいた。どう感じればいいのかだろう。本来だったら他人事として受け止めるだけでもいいはずなのに。すでに梨南ちゃんと私とは縁が切れている。向こうはとことん私を恨んでいるだろうが、こちらとしてはただのクラスメイトでしかない。それも、ほとんど接点のない。だからどうでもいいといえばどうでもいい。ただ心がざぶざぶと海のように揺れる。

渋谷さんの発言が正しいとするならば、梨南ちゃんがこれから先受ける辱めは相当なものになるだろう。まだ生徒会と風見さんにしか情報が流れていないとはいうものの、評議委員会もそのことを知らないことはまずないだろう。少なくとも立村先輩は絶対に気がついていないんじゃないだろうか。また梨南ちゃんも態度で表面にすべて出してしまう子だから周囲に知られるのは時間の問題だ。立候補して、笑われて、落選する「成長」のグラフをゆっくりと鑑賞してもらっただけ

のことだし、それはそれでいいだろう。

でも、なぜ渋谷さんは私にそんなことを話そうとしたんだろう？

私がすでに、梨南ちゃんに嫌われていることを、すでに私がどうでもいい子としてみていることを知らないわけでもないのに。

そのあたりが少し謎だった。私は思い切って質問を投げかけてみることにした。

「渋谷さん、一つわからないのだけど、いいかしら」

息を止めて、耳のところにほつれ毛をひっかけて整えた。

「質問？」

「うん、生徒会の人たちは梨南ちゃんが来てほしくないんでしょう。それはよくわかるわ。でも、生徒会に立候補するのは誰でもできるのでしょうか？ 青大附中の生徒なら誰でも」

「そうよ」

渋谷さんは短く答え、潤みかけた瞳で私を見つめた。

「だったら、駒方先生に乘せられて立候補したがる梨南ちゃんを止めることはまずできないのでしょうか？」

もう一度、用心深く尋ねてみた。

「そうかもね」

またあっさり。何か聞かれることがまずいのだろうか。

「でも、今の話だと、対抗する候補が拳がればあっさり終わるはずじゃないかしら？ 私、わからないのだけど、誰もがみな納得する生徒会長候補を立てれば、それで梨南ちゃんが負けるのは目に見えているし、そうすればいいんじゃないかしら？」

手が凍えた。かなり身体が冷えた。思わず渋谷さんに近づき温みを求めた。

少しうつむいた風に渋谷さんは膝のところを見つめていた。答えなかった。

「もしかして、その生徒会長になるための候補者がいないの？」

まだ返事はなかった。私は畳み掛けた。

「つまり、次の候補者がいないから、まかりまちがったら梨南ちゃんが会長になってしまう可能性があるというわけなの？」

そのままうつむいた状態で、渋谷さんは膝の上のスカートをつまみ、ひねった。

「鋭いわね、さすが佐賀さんだわ」

私を見ず、ぼそりと呟いた。

「私たち現二年の生徒会役員が立候補すれば話は簡単に決着つくのはわかってる。けど、会長がどれだけ大変だかってことと、やはり責任者だということ、それと評議委員会との力関係なども考えると、私、どうしても思い切りがつかないの。それに」

言葉を切って、唇をかみ締めている。

「藤沖会長がね」

忘れられていた会長の名前を出した。立村委員長以上の知名度があるのに、実力は下と言われ

ている人。

「やはり男子に会長をやらせたらしいのよ。男子でないと生徒会を引っ張っていけるわけがないからって」

「男子、いないの？」

「いないわけじゃないけど、生徒会これ以上やってられないからってさっさとやめるつもりでいるみたい。もちろん、手伝いくらいはするけれども、私たち二年の女子に絡まれたままやるのはいやだって降りちゃったの」

「そうなの」

また、単純な相槌を私は打った。少しずつ生徒会事情が見えてきた。

生徒会が三年の藤沖会長によって仕切られているのは、青大附中の生徒誰もが知っていることだけど、実際この会長がどういう人かはよくわからない。別に謎めいた雰囲気をもっているわけではないのだけど、人のよさそうな大柄男子、生徒会長よりも応援団長の方がふさわしいタイプの人だった。実際、何度か応援団を結成しようと呼びかけては却下されていたらしい。評議委員会や規律委員会が応援団のような「封建主義」っぽく見える集団を苦手としていたせいだという噂が流れていたけれども、本当のところは私もよくわからない。

とにかく、藤沖会長は性格もおちゃめで冗談も通じる人なのだけど、本質のところでは男性最優先主義を貫きたいタイプの人らしかった。当然、渋谷さんをはじめとする女子生徒会役員たちは、男子たちの補佐に回される。かすかな軋みがないとはいえない。

もっともそれは評議委員会も同じようなものだけでも、現在はあの立村委員長がトップだし、女子先輩の意見は大切に扱っているように見える。少なくとも表向きは。恋愛感情が異常なほど絡まっている関係の中で、なんとか平均台の上をよたよたと歩いているようなものらしかった。ただ、立村先輩もやっぱり男子だと思えなくもない。健吾をはじめとする二年男子および三年男子の先輩たちを最優先に相談相手に選んでいるところは、やはり「男子最優先主義」の側に立っているのだろう。

渋谷さんのように冷静で頭の切れる女子にとって、「男尊女卑」は許されない概念だろう。私からしたら、うまくそれを利用して、やってもらえることをどんどん片付けてもらい、自分たちが楽をすればいいと思うのだけど。

もちろん黙っていた。

「とにかくそうすると、女子が立候補しづらいの。もちろん藤沖会長も生徒会長以外のところに女子が立候補するのは大賛成だし、むしろ私たちには副会長や書記にいてどんどん補佐してほしいと思っているようなのよ。男子たちがみな一斉に降りる以上はそれもしかたないし、ただでさえ評議委員会との力関係が代わってくる時期に、全くの白紙から勝負し直すよりも、ある程度の経験がないと厳しいって感じなのよ」

「でも、そこに梨南ちゃんが来るということは」

「先生たちにそのあたりを見透かされたということね。会長もきっと頭が痛いだろうけど、所詮

は三年生、さっさと消えてしまうつもりだろうし」

「梨南ちゃんよりも他の女子が立候補する方が早道じゃないの？」

そこまで言いかけた時、渋谷さんは首を振った。

「仕方ないから今、別方向からの立候補者を探してきているところ。これ、まだ会長にも誰にも話していないけど」

バスが一度留まり、またすぐに駅方向へと去っていった。

「一年の霧島くん、知ってる？」

一呼吸置いて、頷いた。

「名前だけは」

「あの、評議の霧島先輩の弟さんよ。顔はそっくりだけど頭は全く違う構造みたいね」

同じく感じたことを、渋谷さんはさりげなく続けた後で、

「彼ね、狙っているのよ。生徒会長の座を。三年評議の先輩たちも裏でこっそりバックアップしているらしいってことも聞いている。一年生にして生徒会長をいきなりというのは、かなり勇気いるけども、あれだけ切れる男子だったら受け入れられるかもしれないし」

霧島先輩にもものすごく頭のいい弟さんがいて、正々堂々と試験を通過して青大附中に入学したという話は、かなり前に聞いたことがあった。誰も霧島先輩の顔色を窺う関係で口にしなかったけれども、弟さんは学年で十位以内にいつも入っているという。学年トップ、と言えはかっこいいのだろうけども、一応は青大附中もエリートと呼ばれる場所。十番以内だけでも十分自慢できるレベルだと思う。

また、将来霧島先輩の弟さんが、「霧乃屋」の跡継ぎになるらしいという噂もちらほらと耳にはしていた。能力の差であっさりと決まったらしく、霧島先輩は地団駄踏んで悔しがったとか家出して抗議したとか。

私からしたら、なんとも赤ちゃんっぽく見える行動をする先輩だし、そういう点では周囲の判断も正しかったのではと思うのだけでも。梨南ちゃんのことを西月先輩と一緒に可愛がっている人だし、きっと何か、同じ感じで引き合うものがあったのだろう。

ただ、霧島先輩の弟さんについてはそれほど興味もなかったし、詳しい事情を知ることはなかった。今の話だと、三年評議の先輩たちが生徒会長に持ち上げようとしてらしいし、これからの生徒会改選に向けてかなり強力な駒になるだろう。

成績だけだったら、実質的に学年首席の梨南ちゃんの方が上かもしれない。

でも、それ以上に感情面でのマイナス部分が大きすぎる。

もし、霧島先輩の弟さんがさほどあくのない性格の持ち主なら、楽勝するのではないだろうか。

。

「霧島くんって、どういうタイプなのかしら」

おずおずと探りを入れてみた。

「顔は霧島先輩にそっくりよ」

ということは、かなり整っているのだろう。

「たぶん、三年の南雲先輩以来ひさびさにファンクラブが出来そうな気配がするわよ」

ということは、相当女子受けもいいというわけだ。

「運動神経はいいのかしら？」

「その辺はわからないけど、新井林くんよりは劣ると思うけどね」

ということは、梨南ちゃんタイプではないらしい。

「わからないわ。実際会って見ないとイメージがわからないわ」

「そうよね」

とうとう私が小さくくしゃみを連発した。それがきっかけかどうかわからないけど渋谷さんは立ち上がった。

「それなら、今度、放課後生徒会室に来ない？」

「え？」

「いつも風見さんが来てるし、会長も『青大附中生徒会をファミリー化したくない』なんて寝ぼけたこと言っているから出入り誰でもOKだし。私の知る限り、二年B組の人はあまり生徒会室に用がないみたいだから顔を出すこともほとんどないしね」

渋谷さんはポケットからヘアバンドを取り出し、もう一度きれいに前髪をあげて額を出した。

「まず、生徒会の雰囲気、果たして杉本さんがなじめるかどうか、確認してもらった方が話も早いと思うのよ」

「今聴いたことはもちろん、内緒にして？」

念のため、確認すると当然とばかりに渋谷さんは頷き、小指を出した。

「だめ、絶対に内緒よ。今の話はね、佐賀さんだから話せたのよ」

私がもし、口の軽い人間だったとしたらどうするつもりだったのだろう。

だって、私は健吾と付き合っている相手なんだから。

もし次期評議委員長の健吾にすべてを話したとして、それが立村先輩あたりに伝わって、騒ぎになったらどうしようなんて疑ったりもしないのだろうか。

まだ一週間も経たない「親友」だというのに、渋谷さんの行動はあせり過ぎているような気がした。もちろん、今は誰にも言うつもりはない。生徒会の事情などを確認した上で、私なりにゆっくり話を整理した方がよさそうだった。

だってまだ、佐川さんに話せるだけ、理解していない私なんだから。

「生徒会ファミリー」とは、青大附中生徒会の現状を表している言葉だという。

「つまり、生徒会の役員同士が家族のように仲良くて、一般生徒が入ってこれない状況を意味するのよ。これ、以前からずっとあった問題みたいなんだけどね。結局、ファミリー化が進んでいる評議委員会を始めとしたグループの力が強すぎて、なかなか変えることができなかつたらしいのよ」

渋谷さんが語る生徒会事情は摩訶不思議なものばかりだった。

評議委員会を通じて流れてくる情報とはまた違う。健吾たちの言葉を通じて聞こえてくる話よりずっと生々しく、湿っぽい。

放課後、風見さんにうまく言い含めて先に帰した後、私と渋谷さんは約束通り生徒会室で落ち合った。渋谷さんと風見さんとの関係については「偽の親友」だということしかわからなくて正直戸惑うけれども、うまく綱渡りしているバランスのよさが伝わってきていて、それほど怖くはなかった。

「とにかく、その状況がこのまま続くはずだったんだけどね」

まだ他のファミリー……って言っちゃっていいのかな……が揃っていないこともあって、渋谷さんはかなり遠慮なく話を続けていた。もしかしたら会長さんとか会計とか書記とか別の副会長とか、みんなやってくるかもしれないっていうのに、どうして私と渋谷さんがふたりっきりでいるんだろう。渋谷さんは「どうせファミリー化をなんとかしたいんだから、大歓迎よ」とわけのわからないことを話していたけれども。

「今回、立村評議委員長の方針で大政奉還っていうのかな？ それをすることになったでしょ」

ちょっとそれ、違うような気がするけど、黙っていた。

「藤沖会長もせっかくならこの機会に、一般生徒にも門戸を開きましょうってことで、力を入れることになったわけなの」

「それと、なにか関係あるのかしら」

私は用心深く尋ねた。落ち着いて渋谷さんは頷いた。何かを言いかけたところで、引き戸がずれる音が派手にした。たてつけが悪いのだろう。振り返ると、渋谷さんが立ち上がり戸口の男子を引き入れた。

「霧島くん、来てくれてありがとう。今なら誰もいないから大丈夫よ」

誰もいないから、ってどういうこと？

——私、いるんだけどな。

とにかく黙っている方がいいような気がして、私はおとなしく座ったままでいた。ほつれ毛が気になったけど、直すのもなにか不自然なような気がして膝に手を置いたままでいた。

「はい、失礼します」

きびきびと一礼し、霧島くん……たぶん霧島先輩の弟……は私の隣にすぐ座った。その前にまた、

「霧島です。よろしくお願いします」

生徒会役員と、まさか間違えたわけじゃないと思うのだけど、私も礼儀だと思って頷いていた。たぶん、渋谷さんがそのあたりきちんと処理してくれると思ったからだった。

隣の霧島くんは、袖口をなぜかアームバンドで留めていた。両方ともそうしているので、どことなくボディビルの選手みたいに見えたけれどもよくよく見て理解した。きっと、ブレザーが大きすぎるんだらう。袖が長すぎるのね。

——学年でいつも十番以内の秀才で、霧島先輩と顔立ちがほぼ一緒の美少年。

ある程度得た情報通りの男子だった。

一つかふたつ、額ににきびが赤く光っている以外はほぼ肌が真っ白。血管がうっすらと浮いている。目もきれいに二重だし、唇もほんのりと赤い。霧島先輩との類似点を探してみると、どことなく女子っぽいかわいらしさが覗いているところがどことなく気になった。

うまく言えないけれど、外見では、男子っぽく臭い匂いがほとんど感じられない。

こういう男子っているのだろうか、と思うくらいに、汗臭さのないタイプだった。

指先もすべて清潔そのもの。女子よりも服に気遣いしているかもしれないと思うくらい。

——童話の王子さまって感じかな。

渋谷さんは霧島くんの隣に席を取った。自然、私とふたりで霧島くんをはさむ形となった。

「今日来てもらったのは、霧島くんにも、今まで観てきた生徒会に関して、もし将来会長となった場合どうするか、それを語ってもらいたいと思ったからよ」

私の方をちらっと見る霧島くんに、渋谷さんはさらに畳み掛けた。

「この人は、知ってるわよね。二年評議の佐賀さん」

「ああ、もちろんです」

やはり次期評議委員長の相手、としてだろうか。特にそれ以上の説明はなかった。

「たぶん他の生徒会メンバーは、あと二十分くらいしないと来ないと思うし、とことんまずは、霧島くんの本音を知りたいのよね」

戸惑うんじゃないかな、と心配したけど、さすが霧島くんは落ち着いていた。慌てることもなく、袖口をひとつ折り込み、心の準備をしていた様子だった。私と渋谷さんとに一筋視線を走らせると、

「僕なりの考えでいいですか。渋谷先輩」

「もちろんよ」

なんだかこれも、すべてルールが敷かれていたような気がする。

私のために、すべてこしらえられたひとつの形。

なんだかもやもやしてきたけれども、きっと渋谷さんなりに考えることがあるのだから。

梨南ちゃんが生徒会長に立候補するらしいという嵐を迎えるに当たり、かつての親友だった私に対して何かをして欲しい、そんな感情が走っているのかもしれない。

この数日間、渋谷さんが私に対してアピールしてきたことをひとくさり考えてみると、どうしてもそういう答えに行き着いてしまった。行き着く場所は友情ではなかった。

気付いていないのだろう。渋谷さんにもう一度合図するように、霧島くんは咳払いをした。

「青大附中生徒会をこれからどうやってレベルアップしていけばいいかってことですが。僕としてはまず、生徒会と委員会の区分けをはっきりさせることが必要だと思ってます。不思議だったのですが、なんでこの学校、委員会があんなにふんぞり返っているわけですが？ 単なる『学級委員』が、なんであんなに大威張りできるんですか？ 僕がこの学校に入学して、最初に思ったのはその異常さでしたよ。それに、評議委員の選び方、少し何か違うんじゃないかとも思いますよ。レベル的につりあわない生徒をうっかり委員に選んでしまったら最後、いつのまにか委員会は部活動と一緒に三年持ち上がりになってしまう。もちろん最近はそのような問題も少しずつ、変わって来ているようですが、僕からしたらあまりにも遅すぎます。誰もそのことを不思議に思わなかったことが、まず僕にとっては謎です」

誰もがそう思っているのに、口に出さなかった理由、どのあたりなのだろう。

健吾に言わせれば、

「歴代評議委員長がみな、力づくで納得させてきていた」

からだともいう。本当かわからないけれども、納得できなくもない。

「渋谷先輩のおっしゃる通り、生徒会に権限が移行していくのは歓迎すべきことです。ただ、あまりにも手ぬるいですよ。遅すぎますよ。現在の評議委員会をこのまま流す形にして、ゆっくりと片付けていくというのは、なんだか僕にとっては、ゆるすぎます。一応、委員会活動は三月で終了ですからそれに合わせるというのが建前なんだろうが、僕からしたら、とんでもないことですよ。本来だったら、生徒会の入れ替わりたる改選時期にすべてを合わせるべきではないですか？」

確かに。私もそう思っていた。

健吾の恋人でいる以上、領けないけれども。

渋谷さんはどう思っているのだろう。私の方を一切見ず、やはり領かず、しんと聞きつづけている。霧島くんは、またひとつ咳をしてちらっと私の方に目を走らせた。やはり、「次期評議委員長」の彼女と呼ばれる私の隣で話すのに戸惑いを感じているのかもしれない。

本当だったらここで用事を見つけて、私は外に出るべきだっただろう。

でもそうしなかった、したくなかった。

「ちょうど、改選が終わった後で後期委員会の入れ替えも行われるはずですよ」

霧島くんは銀色のアームバンドを何度かはじき、一呼吸おいた。

「委員会に一度選ばれると入れ替えがほとんどない、というのがまずおかしいですよ。僕としてはまず、今回きちんと訴えたいと思っています。本来三年間、同じ委員会にいてもいい、というのが勘違いでしょう。本来だったら、その時その時にやりたいと思っている人が、自主的に立候補すべきです。きっとやりたいと思っている人だっているはずだし、周りからも絶対この人は間違っている、と後々わかってきたのにいつのまにか、なあなあで現状に流されている奴もいるでしょう。だから、ここでしっかりと、本当にふさわしいと思える人間を選出するように指示

したいのです。まだまとまってませんが、僕の考えているのはそういうところです」

「そうね、私もそう思う」

やっと渋谷さんは相槌を打った。

「でも、急ぎすぎるのはよくないと思う。今ここで、霧島くんの意見を聞いたのは、私なりにもう少しその形をアレンジしたいなと思ったからなのよ」

アレンジ？ 尋ねてはいけないだろうから我慢していた。

「今の話聞いていて思ったのだけでも、霧島くんが青大附中生徒会および委員会に対して、正しい意見を持っているということには、私も高い評価をあげたいと思う。現在、三年の先輩たちのレベルを正確につかんでいるということにもね。でも、よく考えてみて」

かなりむっとした表情を一瞬浮かべた霧島くん。私の視線にいきなりまた咳払いして、落ち着いた口元に戻そうとしている。顔が整っているからなおさら、ひとつのしぐさがギャグっぽくなる。私は思わず笑った。

「あの先輩たちがいなくなる限り、生徒会がこのまま邪魔されるのは私も覚悟しているのよ。ほら、知っているでしょう。評議委員会は実質、一部の三年男子によって仕切られているということ」

「そうですね、天羽先輩によってですね」

ここで現評議委員長の名前を出さなかったところに、答えが隠れているんだなって思った。

刺がちくり。健吾のことも悪口言うのかな。何も気付かない振りをして私は聞いていた。

「今の委員長だけならまだやりようもあるけれど、天羽先輩をはじめとした他の三年生を相手にするのは時期が早すぎると思う。これは私の考え、だから」

「僕にそれだけの力がないといたいのですか」

いきなり声のトーンがソプラノっぽくなった。まだ声変わりが終わっていないみたいだった。たぶん、一緒に話をしていたら、他の男子先輩たちからなめられてしまいそうだった。

慌てて渋谷さんが言い直す。

「そうは言ってないわよ。つまり」

「でも渋谷先輩の言い方は、僕には三年の先輩たちに対するだけの能力がなくて、役立たずという風に聞こえましたよ」

ずいぶん、一年上の先輩に対して……いくら女子だと言っても……はっきり言う一年生だなとなんとなく思った。最初観た感じは、気品のあるどこかの王子さまと言っても過言じゃないなって気がしたんだけど、変なところをつかかかってしまいたくなるタイプらしい。渋谷さんもこういう時、うまくあしらえばいいのに。ちゃんと誉めて、「すごい、そうなんだ、さすがね」とおだててあげればいくらでも頷いてくれるのに。健吾を相手にしてきていつもそれが必要だと感じてきたもの。男子と接する時はそれが大事なのだといつも感じている。教えてあげたい。

「つまりね、霧島くん」

前髪がぱらんと落ちるのを押さえる振りをして、渋谷さんはヘアバンドを軽く手直しした。きっと気持ちの立て直す時間をこしらえているんだろう。

「一对多数で勝負したら、どんなに切れるタイプでもつぶされてしまうと私は言いたいよ。霧

島くん、君の能力は私も買っているわよ、ただ様子見をもう少ししないとね」

「その言い方は失礼ですよ。言い直してください」

また、つかかる。渋谷さんが戸惑う風に「何を？」と尋ね返した。

「『君』という呼び方は失礼じゃないですか」

「悪かったわ。霧島くん、そうね」

慌てて言い直す渋谷さんの様子は明らかに押され気味だった。どうしてかわからないけれども、私や風見さんたちにばしばしと説明する時の態度と少し迫力が欠けているようだった。一年下とはいえ、下級生は下級生。もし健吾だったらためらうことなく「ぎっけんじゃねえ、何年生だと思ってるんだ。一年上でも先輩は先輩だ。きちんと礼儀ってものを意識しろ！」とか言って怒鳴りそうなものなのに。渋谷さんも普通だったら言い返しそうなのに、どうしてしないんだろう。

「様子見している間に卒業されたらどうするんですか」

そこまで言い放ち、霧島くんは唇を尖らせた。せっかくの王子さま顔が無残に崩れるところが、やはり三年の霧島先輩と同じ血のつながりなのだと感じた。

しばらく霧島くんと渋谷さんは、二人にだけわかるようなやり取りを続けていた。

生徒会役員改選にまつわる打ち合わせとまではいっていなかった。とにかくこれから先、生徒会と委員会の関係がどう進んでいけばいいのか、そして本来あるべき姿はどういうものなのかを熱く語り合っている二人に、正直なところ私はついていけなかった。

でもどうしてだろう。ほんとに誰も、生徒会室にやってくる気配がない。

藤沖会長も、その他の役員も、誰一人。

——私ひとり、部外者なのに。

居心地が悪かった。渋谷さんがいつのまにか、霧島くんの意見に相槌をうとうとして、またそこで苦情を言われ、の繰り返しになんだか疲れてきた。

「渋谷さん、私、先に帰るわ」

気を遣って立ち上がったつもりだった。なのにふたり同時に引き止めるのはなんでだろう。

結局、私は霧島くんが立ち上がるまで、ずっと生徒会室にいた。

帰り際、霧島くんが私の耳元で、

「すみません」

一言ささやいた。渋谷さんが目ざとく、

「何話してるの、いったい」

「いえ別に」

ほんと、別に何もなかった。私は渋谷さんに近づき、今度こそ帰ろうと言うつもりだった。

「佐賀さんごめんね、いきなり変なことにつき合わせちゃって」

「でも、私がいてよかったのかしら」

「いてもらわないと困るのよ。ほら、そろそろ、帰ってきたわよ」

腕時計を覗き込み、少し上気した頬を指先でぱたぱた叩きながら渋谷さんは引き戸を引いた。

「会長、とりあえずはひとり、終わりました」

私が隅で突っ立っている間、どやどやと入ってきた生徒会長さんおよび他の生徒会役員たちはさっさとパイプ椅子に腰掛け、かばんの置き場所を探していた。私のことは全く意に介さない態度だった。いてもいなくても、何も変わらない、そんな感じだった。いつも風見さんが遊びにきているというけれど、その時もこんな感じなんだろうか。知りたくなった。

「ご苦労」

面倒臭そうに藤沖会長は渋谷さんへ視線を走らせ、すぐに別の役員へ話を向けた。男子の会計さんだった。顔は知っているけど話したことはもちろんない。

「一年が会長ってのも、なあ」

「順番としては会計とか書記から始めるのが普通じゃないかなあ」

男子同士のさっぱりしたやり取りに比べ、渋谷さんと話す時のちいさな刺はなんなのだろう。初めて様子見する私がそう感じるのだから、他の人たちも同じなのではないだろうか。

「霧島くんのことについては、またあとで話します」

「別に、どうだっていいだろうになあ」

のんきなんだけど、なんとなく心許していない。壁が見える。生徒会長はゆったりと座りなおした。同時に椅子の空気が小さく抜け、おならに近い音が聞こえた。

「椅子がかわいそう」

別の女子生徒会役員が呟いた。

「あとは私の方でどんどん、面接進めていきますから」

「あと一週間でどっちにしる、告示なんだからそれでいいだろう」

「よくありません。これからいろいろと準備が必要です。会長はあと二週間で生徒会から離れることができるんですからかまわないでしょうが、残される人はどうするんですか」

「だから、それは」

私が戸口にゆっくり近づいていき、姿を消そうとするやいなや、慌てて渋谷さんが腕をつかんだ。私の顔を見据えると、また同じように引き止めた。

「お願い、もう少しだけここにいて」

「でもここにいて、私、邪魔になるだけだわ」

「佐賀さんの力が必要なのよ」

さっき霧島くに言い返されていた時とは違い、ずいぶん落ち着いた態度だった。

無理して断る由もないので、私は黙って頷いた。渋谷さんが隣に立ったまま、窓際の会長に呼びかけた。

「とにかく、改選については、二年生の役員にすべて任せてください。誰も候補者がいないからといって、評議委員会や規律委員会に協力を依頼するのだけはやめてください」

何も、評議委員の私がいる前でそんなことを言う必要もないのに。

私が心でどう思っているか全く気付かないのか、渋谷さんは私の片腕をぎゅっと握った。

「十五分で戻ってきます。その後説明します」

引っ張り出された。やはり、何か用があるらしい。流れに任せた方がこの場合はよさそうだった。

二階の階段踊り場まで私は渋谷さんに引きずられていった。何か話があるのは予想がついていたし、霧島くんとやり取りについて私も少しは聞きたいこともあった。でも、ずいぶん彼女らしくない姿を見つづけてきただけに、どう切り出せばいいかわからなかった。

「渋谷さん、いったいなんだったの？」

「ごめんなさい。私も佐賀さんに何も説明していなかったわね。戸惑うわよね」

戸惑うも何も、状況を理解していなかった。

「私はただね、佐賀さんをお願いしただけだったのよ」

外の雨が降りしきる中、一滴流れ落ちるガラス窓の雫を指差しながら、渋谷さんは私をまっすぐ見つめた。

「今度の改選で佐賀さん、生徒会の役員に立候補してほしいの。佐賀さんなら絶対にその力があると、私も思う。だから、まずはお願いしたいの」

ひんやりと、窓の隙間から雨の細かな霧が入り込んでいる。窓辺に近より過ぎているせいか、私はぼんやりとほっぺたでその霧を感じていた。頭の中にも、そのひんやりした空気が一杯になって、あふれそうだった。

何かを言いたいのに、うまく言葉が出なかった。今感じている冷たいものってなんだろう。目の前の渋谷さんはまじめでまっすぐなのに。

もし私が梨南ちゃんだったとしたら、すぐに言い募り罵るかもしれない。

もし私が風見さんだったら、大喜びするかもしれない。

でも、どちらもできそうになかった。私はやはり、佐賀はるみだった。感情でばばっと叫ぶよりも、まずは様子見してゆっくりと考えたい、すぐに判断できない、少しのろまで泣き虫の私だから。

——だから、私に近づいたというわけ？ 風見さんを利用して？

——生徒会の役員候補者を集めたくて、私と「友だち」になろうとしたの？

感じた言葉を、すべてこくと飲み込み、私は小首をかしげたまま、休符を入れた。

「ごめんなさい、私、今、びっくりしすぎちゃって、どう答えたらいいかわからないわ」

「私の方こそ、驚かせてしまっておめんなさい。とにかく、私も次期改選で出るつもりでいるから、できたら長い時間一緒にいたい人と、生徒会をやりたかったのよ。それだけよ」

——ほんとうに、それだけ？

また耳もとでささやく直感を封じ込め、私は両手を合わせて「おねがい」のしぐさをした。

「とにかく、少しだけお時間ちょうだい。私、今本当に驚いてるの。そんな風に渋谷さんが、私のこと、買ってくれてるなんて、思ってもみなかったもの」

少し勘違いしたのか、渋谷さんは安堵した風に胸をさすった。

「こんなところでいきなり話すべきことじゃないわよね。ごめんね。でも、私をもっと佐賀さんと話をしたいってこと、一緒に生徒会で仕事をしてみたい、そう思った最初の人だってことは、どうか信じてほしいのよ。また、ゆっくり後で話すけど、今の話、本気で一度、考えてみてね」
「うん、わかったわ。このことを」

私は特に何も意味のない、という風につなげた。

「今は誰にも言わないで、ひとりでまじめに、考えてみるわ」

心臓がとくとく鳴っていた。私は渋谷さんに片手を振って階段を下りた。

驚いたから、びっくりしたから、それだけじゃない。

私の耳元で、見知らぬ誰かがささやいているような、不思議な直感。

じわじわと心臓の奥底から聞こえてくる、佐川さんに似た声。

いろんなものが渦巻いてしまって、どうすればいいかわからない。

梨南ちゃんや風見さんのように単純な子だったら、すぐに「私を評価してくれるのは当然のこと」だと受け止められるだろう。決して渋谷さんは悪いことを言ったわけではない。私を誉めてくれただけ、そう考えるだけでいいのに。

そういう単純な梨南ちゃんタイプの性格だったら、こんなにもやもやしないですんだのに。私は階段を駆け下り、傘を持ったまま生徒玄関前の砂利道を走り抜けた。

健吾のいる体育館へ走ろうとは思わなかった。

校門前の停留所に、青淵駅前行きバスが留まっていた。満員だった。しめっぽい匂いで酔いそうだった。でも、乗るしかなかった。

——佐川さんに会わなくちゃ。

思い切って水鳥中学の通学路で佐川さんを待ち伏せしたのは、「佐川書店」で三十分待ってもレジ裏に現れる気配がなかったからだった。

今から行きますと連絡したわけでもないし、佐川さんだっけいきなり、あの梨南ちゃんみたいな感じで私が追いかけたら不愉快な思いをするだろう。そのことくらい、自覚はしていた。二月に起きた事件の大きさを考えて、生徒会の人たちが私を見てすぐに何か勘付く可能性だっけもちろん考えていた。

——健吾にばれたら。

そう、健吾に噂が流れてしまう可能性だっけ、考えなかったわけじゃなかった。

でも、今は佐川さんに会わないと、私がこなごなに壊れてしまう。

佐川さんしか、私を救ってくれる人はいないんだもの。

健吾じゃ、だめなのだから。

佐川さんは私に気がつくと、すばやく目で合図を送ってくれた。

隣の、お下げ編みの女子に二言三言何かをつぶやき、手も振らずに私の方へ走ってきてくれた。

「佐賀さん、どうして」

「ごめんなさい」

そっと後ろの彼女を窺うけれど、もうすでになくなっていて、どこに行っちゃったんだろう？ そんなことを考える余裕もなく、私は息を切らして呟いた。

「私、今、佐川さんにどうしても、教えてほしいことがあるんです」

「けどここにいたらまずいよ。生徒会連中に見られたりしたら、ほら、おとひっちゃんに」

さっきの彼女を気にしているわけでないのが、少し嬉しかった。

「私、もし健吾にばれてもいいって思ってるんです。佐川さん、だから」

佐川さんは私の顔を一瞬、大きな瞳でぎゅっと見つめてきた。今まで見たことのない、びっくりぎょうてんって感じの顔だった。私、何か驚かせることをしたのだろうか。

「いつものところに行こう。ばれたらまずい」

だんだんブレザーだけだと身体が冷たくなってくる。手がほんの少し、ささくれている。佐川さんを私は、ほんの少し追う格好で影を踏み、歩いていた。

大人ばかりが通る街並まで出て、佐川さんが足早になる。私も合わせてついていった。追うのは辛くなかった。学生服が少したぼった感じの、健吾よりもずっと背の低い人なのに、どうして私はこの人でないと、本当のことを話せないのだろう。今はただ、胸一杯に詰め込んだ驚きの言葉を、すべて佐川さんに受け止めてもらうしか、どうしようもなかった。

たどり着いた先は、いつものところ、「青潟市郷土資料館」だった。

「そうなんだ、そういう話になったんだね、佐賀さん、だからなんだ」

私が勢いづいて話しつづけた支離滅裂な言葉を、やはり佐川さんは黙って受け止めてくれた。外にいる時は健吾と思わず比較してしまうこともあるのに、こうやってふたり隣り合っていると呼吸がだんだん楽になっていくのがわかる。

「さっき、びっくりしたもん。俺だってまさか、佐賀さんが校門まで来てくれたなんて思わなかったしさあ」

「ご迷惑なのはわかってました。でもそうしないと、私、どうしていいかわからなくて」

「いいよ、そんなの」

佐川さんはいつも通りあっけらかんと言い放った。

「ばれたらばれたで、いくらでも言い訳考えつくから大丈夫だよ」

決して、「俺が責任取るからさ」と健吾のような男気たっぷりの言葉を口にする人ではない。淋しいようで、ほっとする部分だった。私のこと、どう思っているんだろう。私のことを褒め称えてくれるのに、突然ぱっと手を離されるような時があって、ふと泣きたくなる。目が潤んでしまいこすっていると、

「もっと詳しい話聞きたいんだけど、いい？」

佐川さんって、やはりどこか、幼い。

健吾みたいにもっと、べたっとしてくれたっていいのに。

誰も、見てないんだから。

私はさらに、風見さんと渋谷さんとの関係と、霧島くんの存在について簡単に説明した。どこまで推測を混ぜていいのかわからなかったけれども、たぶん佐川さんなら見抜いてくれるに決まっている。ところどころ佐川さんが質問を投げかけてくれた。

結局、すべて私の考えも話す形になった。

「つまり、渋谷さんという人、佐賀さんを生徒会に引き入れるために近づいたってことなのかなあ」

のんびりした口調で、でも目はくるくるっと動いている。佐川さんが本気になったしるしだ。私は息を詰めて次の言葉を待っていた。

「だってさ、すごい偶然が重なりすぎるよね。佐賀さん、俺思うんだけど、最初に声をかけた風見さんって人、最初から渋谷さんに頼まれていたってことは考えられないかな。そうでなくちゃ、今の佐賀さんにいきなり近づくなんて勇気が必要なことできないよ」

「私に近づくのに、勇気が、いるんですか？」

「そうだよ、佐賀さんは今、結果をばりばり出した評議委員なんだし、しかも次期評議委員長とその、健吾くんと、だろ？ 他の女子たちは佐賀さんのことあこがれてるくせに、怖いから近寄れないでいる。そういう人に近づくとしたら、相当腹が据わってると思うんだ。けど、風見さんはそういうタイプの女子じゃないなあって気、俺はするんだ」

怖い、やっぱり佐川さん、風見さんのこと、見抜いている。

「風見さんはこういったらなんだけど、杉本さんにそっくりなタイプだと思うんだ」

やはり。

私は頷いた。佐川さんも首をちらっと私に動かして、続けた。

「下手したら大迷惑をかけるタイプだけど、杉本さんよりも常識持っているから、なんとかうまく泳いでいるのかなあ。それともその渋谷さんって人と契約を結んでることだから、うまくやりくりしていけるように渋谷さんに守ってもらっているのかなあ」

「それはあると思います」

だんだん頭と心が整理されていく。佐川さんと私とがだんだん、言葉同じくなっていく。

「だから、孤立しないですんでいる。これって俺からしたら、すっごい楽なことだと思うんだ。そんな楽な立場を守るために、今回風見さんは、渋谷さんの命令で佐賀さんに近づいたってことだと俺は思う。もっとも、だんだん風見さんは佐賀さんが大好きになっちゃってるよ。そりゃあそうだよ。近づいたら絶対、そうなるよ」

「わかりません、でも」

私が言葉をはさもうとすると、さえぎられた。まだ頭の中で回転している言葉がまぎれているらしかった。両手を絡み合わせながら、親指同士を叩いて、

「で、次に気になるのが渋谷さんの行動なんだけど、これもすっごく計算されてるよなあ。ここまできっちり計算されてると、かえって怪しまれるはずなのに、誰も何にも言わないのかなあ。俺、そっちの方がすごく不思議なんだけど、どうなんだろう？」

どうなんだろうと言われても、私だって困る。

生徒会室での様子を思い出して見ると、佐川さんの言う通り、渋谷さんの行動はいかにも私に見て見てってアピールが強かった。私なんて部外者なのに、霧島くに言いたい放題言わせた後、生徒会長たちにもいかにもってくらい私を見せつけようとしていた。

「私もわからないのですけど」

「わからないわけないよ。佐賀さんはちゃんと知ってる」

決め付けた風な言い方で叱られた。

「だから、変だなって思ったんだよ、俺だってそう思うよ。俺も、なんか変だなって思ったらまず、何が起こったかをゆっくり思い出して、変なところを見つけ出すんだ。きっと佐賀さんはわかってるんだけど、知らない振りしてるんだよ」

「私のこと、買いかぶらないでください」

泣きそうになるけど我慢して、それだけ伝えるのがやっとだった。佐川さんなんで私をそんなに責めたいんだろう。ほんとは、佐川さんにみんな答えを出してほしかったのに。私がいから、ここに来たのだって、どうしてわかってくれないんだろう。

「たぶん、私を、最初から生徒会に入れたいからってことでしょうか」

「そうだよ。それは絶対合ってる。けどそうなるともう一つ疑問があるんだよなあ」

いつもだったらほとんど人が出入りしない資料館なのに、今日は私たちの前をうろうろと、館員さんらしきおじさんが歩き回っている。まだ、閉館まで間があるはずなのに。時計の針がどのくらい動いているかを見た。まだ大丈夫。五時まであと三十分もある。

「渋谷さんは佐賀さんの前で、杉本さんが先生たちの手で立候補させられようとしているんだっ

てことを話したんだよね」

「はい」

佐川さんは大きく息を吸い込むと、唇を尖らせて細い糸のように吐いた。

「と、すると、当然佐賀さんと杉本さんとの間に何が起こっていたかも知ってるわけだ」

「たぶん、そう思います。風見さんも話しただろうし」

「その、風見さんなんだけど」

いきなり佐川さんは話の矛先を風見さんに向けた。

どうして私が一度しか出さなかった登場人物たちの名前を、佐川さんはすらすらと言えるのだろうか。こんなに頭の回転が早く記憶力もいい人が、あの関崎さんよりも成績悪いなんて私は信じたくない。

「確か水鳥中学の学区内に住んでるって話してたっけ」

「そうです。結構海の近くです」

「品山小学校から転校してきたんだよね」

「五年の時って言ってました」

「ということは、立村のことも知っている可能性があるのかなあ」

私はしばし考えた。思い当たる節がある。

「そういえば、風見さんは立村先輩のことをものすごく嫌っていました。先輩扱いしたくないって話してました」

「そうか、じゃあかなり、知ってる可能性もあるわけなんだよね。となると」

佐川さんは膝を打った。

「今から俺が話すこと、全部想像だから佐賀さんが必要だなんて思ったとこだけ利用すればいいよ。俺、やっぱり同じ学校でないから勘違いしたこと言うかもしれないけどさ」

「かまいません。教えてください」

「うん、じゃあ、言うよ」

待っていた言葉を、私は全身で受け止める準備をした。といっても身体をはずに向けて佐川さんに向かいあったただけだけど。膝と膝が触れて、佐川さんがいきなりきゅっと身を逸らしたのにほんの少し傷ついた。

「俺、佐賀さんが生徒会に入ることはいいことだと思うんだ」

いきなり切り出した言葉。少し膝を開く格好で、両手を組んだまま。

「ただそれは、杉本さんが入ってこないという前提だけどね。でもそのところは俺、全然心配してないよ。だって、先生たちが杉本さんを立候補させるのは、落とすためなんだからさ。立候補した段階でどうにでもなると思うんだ。けど、問題は渋谷さんなんだ。その人、どんな人かわからないから悪口言えないけど、風見さんを使って佐賀さんを引き入れようとしていることは誰でもわかっちゃうと思うんだ。佐賀さんだってそれ、勘付いただろ？」

頷くだけだった。佐川さんの言うなりだった。

「一年生を生徒会長に立候補させるという方法はうちの学校でもやっているけど、それはちっと

も悪いことじゃないよ。水鳥でもしおとひっちゃんが生徒会長 やってたらどんなことになってたか想像つかないもん。けどさ、今の話聞いた感じだとそいつかなりプライド高そうだし、女子に冷たそうだよ。渋谷さんって人、やたらとおべっか使ってたんだよね」

きつい言い方だけど、私の言葉そのものと重なるから頷いて答えた。

「渋谷さんの立場からすると、杉本さんを立候補させたくないよね。それ、青大附中の生徒会メンバーみんなが願っていることだよ。だけど、うっかり信任投票になっちゃったら大変なことになっちゃうし、それならば、対抗馬を立てて無理やりにも競わせる方法を取ったってわけだよ」

私が渋谷さんの立場でもきっとそうするよな気がする。梨南ちゃんに負ける人を探す方が本当は大変かもしれないのだと、知っている。

「でも、それならどうして渋谷さんや他の生徒会メンバーが立候補しなかったのでしょうか」

「わかんないなあ。あえて可能性があるとするれば、その一年生男子、ものすごくプライドが高いつて言ってたよね。女子にも頭を下げない性格だって聞いてたよね。そういう奴だから、たとえ上級生であっても、生徒会内で頭を下げない地位でない限り立候補したくないってごねちゃったかってことかな」

ぴしっと、目の前をまた、館員さんがスリッパで歩く。

「佐川さん、それ、正しいと思います」

「あてずっぽだけどね」

佐川さんってば、いきなり自分のほっぺたをつねるよなしぐさをした。かわいらしいなんて言ったらまたびしっと叱られそうだし、今は言わないでおく。

「とにかく、そういうご機嫌を取るのが難しそうな一年男子の場合、どういうメンバーが補佐すればいいかなってことになるけど、そうすると白羽の矢が立ったのが佐賀さんってこと。霧島くんは佐賀さんに対しては、そんなに高飛車なことわめかなかったんだよね」

「はい、たぶん」

少なくとも渋谷さんに対するよりも、私には「先輩」らしい扱いをしてくれた。別れ際に、きちんと挨拶もしてくれた。健吾の地位に気兼ねしたのかなとか思っていた。

「佐賀さんならば、わがまま生徒会長のご機嫌を取ることができるメンバーだと見込まれたってことになる。渋谷さんが下手に出ていたのは、そうしないと霧島くんが席を蹴って出て行く可能性大だからさ。けど俺からすると、そんな面倒な奴を入れていったい渋谷さんにどんなメリットがあるのかなあ。そこのところがどうも俺、ひっかかるんだ」

「梨南ちゃんを追い出す以外にですか」

「あ、それ全然心配してない。さっきも言ったよ。俺、最初から杉本さんは落とされるために立候補させられるんだってね」

そうだった。ごめんなさい。ちゃんと聞いていない生徒で。

「青大附中の生徒会がどういう雰囲気なのかわからないけど、今の会長は男子生徒会長にこだわっている。でも本来だったら二年の生徒会メンバーが誰か持ち上げればいいわけだよ。渋谷さん以外に男子の生徒会メンバーがいるならそれで一件落着だよ。でも、それをさせないであえ

て渋谷さんが仕切るということは、つまり」

ここで私から視線を逸らすようにして、真正面の青潟古地図を眺めた。半ば口がひらきかけて、言葉が続いた。

「本当は、渋谷さんが生徒会一番の実力者なのに、現会長がどうしても男子以外生徒会長を認めようとしな。だからしかたなく一年の霧島くんを持ってきた」

「でも本当は？」

「渋谷さんは、生徒会長をやりたかったのにやれなくて、悔しがってる人なんじゃないかな」

佐川さんはそれを言い切ると、私の顔をもう一度見つめ直して頷いた。

——本当は生徒会長をやりたいのにやれない渋谷さん。

言葉がずしんと響いた。

渋谷さんの、前髪を軽く上げたひたいには、頭のよさげな光りがやどっていたことを思い出した。あの人ならきっと、生徒会長、勤め上げることができるだろう。女子だとしても。ううん、どうして女子だと、トップに立てないなんてみんな、思いたがるんだろう？。

別にそんな決まりがあるわけではない。

ただ青大附中ではいろいろな場面において「男尊女卑」の匂いが漂っていた。

口には出さないし、表向きは男女平等を謳っているけれども、評議委員会内部もそうだった。立村先輩を委員長として認めたくない女子たちの声はほとんど無視され、三年男子たちと二年男子の一部だけで勧められていく行事の数々を、私は健吾の隣で見してきた。

立村先輩が失敗したあとを、天羽先輩たちが大急ぎで手直ししていく様もそうだ。

本来だったら轟先輩という女子で頭の一番切れる先輩がいるのに、ずっと影に回されているのも。他の女子先輩たちはみな、男子先輩たちに言い含められて下っ端扱いされている。

「レディファースト」と言う人もいるけれども、私の目から見たら

——女子には男子の砦に手を出すな。

そんなこわもてのメッセージにしか見えなかった。

それでもよい。私は立村先輩たちと張り合う気はない。健吾にすべて任せておけばいい。

他の女子先輩たちのように、自分の立場を認めてほしいとばかりに問題を起こして騒ぎ続けるなんて見苦しい。私なら決してあんなこと、しないだろう。梨南ちゃんとは違う。

評議委員会の女子先輩たちはどうして、生徒会に立候補しようと思わないのだろうか？

あれだけ「平等に扱ってもらえない」と文句をたらたら言っているのだったら、「信任投票」で当選確実な生徒会役員で活躍すればいい。それとも、落とされるのが怖いのだろうか。三年間きっちりとお役目を果たせる場所ではなく、必ず入れ替わりが必要となる場所は恐ろしいのだろうか。あれだけ可愛い霧島先輩も自分の能力のなさをばれないように振舞えばいいのに、あれだけ目だとうとするから一気に、みんなから見下されていること気付かないのだろうか。

清坂先輩もしっかりした人だとは認めるけれども、立村先輩が迷惑がっているのにどうして張り付いて手伝おうとするのだろう。お手伝いは轟先輩に任せて、ご自分は「立村先輩の彼女」の

看板でもって楽すればいいのに。

唯一、三年の中で共感できるのは近江先輩だった。近江先輩はもともと評議委員会に関心が薄いようで、興味のあるところだけしか手を出さない。ただやる時はきっちりと事務処理とかいろいろ片付けてくれる。天羽先輩がにこにこしてくっついてこようとすると、きっぱり追っ払うので女子たちからのジェラシーも感じない。

。

どうして私はそこに気付かなかっただろう。

みな、評議委員会の人たちは、置き去りにされていることに。

あの人たち……たぶん健吾も……気づかないうちに、少しずつ生徒会は立ち上がり、委員会を一気飲みしようとしていることに、どうしてみな目を向けないのだろう。

渋谷さんはそれを見抜いている。だから、三年男子同士でゆっくり進めている「生徒会第一優先化」を、今年中にやってしまいたいときっと思っている。私ならきっとそうするだろうから。今の三年評議委員がいかにくらぐらしていて、ちょっとつづけばすぐに崩壊することを私は知っているから。

佐川さんに向かい、私ははっきりとそのことを伝えた。

「私がもし、渋谷さんと同じ立場だったらどうしていたんだろうって思います」

「渋谷さんって人は、どうなんだろう？ それだけの能力がある人なんだよね」

「はい。生徒会長になってもおかしくない人だとは思いますが」

「うん、俺もそう思うよ。それだけ頭がよくてしたたかな人がさ。もちろんその人なりに考えていることもあるんだと思うけどね。きつと渋谷さんは、周りの考えをひっくり返すよりも、実質的な生徒会ナンバーワンでいるために、霧島くんをひっぱり出したんじゃないかな。で、自分の周りには完璧なレベルの高い人たちを置いておきたいから、佐賀さんをスカウトした」

私は首をかしげた。

「じゃあ、私も立候補した方がいいですか」

「うん、だけどちょっと待って」

少しだけ迷った風に見えた。ほっとした自分もいる。なんだろう、私もぐらぐらしてる。

「最終的には立候補してもいいけどさ、このままだと渋谷さんの言うままだろ？ そうしたらこれから先、何かあるとその人の下に佐賀さんが立つことになるよ。それはあまりよくないよ」

「下？」。

「だってさ、もう佐賀さんは、格下扱いされたくないよね？ 俺もいやだよ。佐賀さんは、できるだけ高いところに立ったほうがいい。そうだよ、今までずっと押さえつけられてたんだからさ」

びくんと言葉が響いた。

「だから佐賀さん、ぎりぎりまで立候補は待つことにしよう。公示日から締め切りまでぎりぎりまで迷っていることにすればいいよ。渋谷さんが頼みに頼んで、やっと出てきてもらった、そう

思われるようにするんだ。そうすれば生徒会にも一般生徒にも、アピール度が高まるよ。いいかい、佐賀さん、これから何か変わったことがあったら、すぐ連絡するんだよ」

——格下扱いされたくない。

胸苦しさに押され、私はもう一度頷いた。

——佐川さんに電話する口実ができたかも。

気がついたのは、帰り間際だった。

次の日、「水野五月」さんから、クラフト紙封筒の手紙が届いた。

なんだか学校から特別のお知らせを送られてくる時と同じような感じで、ちょっとどきどきした。表書きの書き方ががちりと力強くて、丸っこい文字だったから、誰から来たのかをそれほど考えずにすんだ。家の中で封を切ると、家族……特に弟……に読まれてしまう可能性がある。そのまま外に持ち出して、図書館で読むことにした。



佐賀さんへ

昨日のことで、僕なりの考えをまとめたので読んでください。

それから、この手紙はすぐに細かくちぎって捨ててください。

これから連絡する時は、電話か、ここの住所に「水野さん」あてに送ってください。



殴り書きだけど、ふしぎとまん丸い文字が連なっていて、ほっとする。

佐川さんってこういう文字を書くのね。

図書館の本棚陰にもたれて、私は続きを一気に読み入った。



その一 まず、できるだけ現評議委員長の小学校時代の過去について探りを入れること。風見さんという人を使って、わかる範囲内でどういうことが起こったかを調べてください。

その二 生徒会の内示と立候補締め切りがいつ頃かをすぐに調べること。

その三 杉本さんが立候補することを現評議委員長が知っているかどうかを、わかる範囲でいいで調べること。

その四 今考えていることを、絶対に渋谷さんには話さないこと。

その五 霧島くんという男子には気をつけること。

その六 もし立候補するとしたら、副会長にすること。絶対に書記や会計には回らないようにすること。

今度来るのはいつですか。連絡ください。



いきなりここからサインペンでの書き込みになっているのは、きっとあとで思い立って付け足したからかなって思った。そこのところだけ健吾の文字にちょっと似ていた。



もしやれるなら、佐賀さんの方で現評議委員長と話をし、杉本さんの立候補について知っているかどうかを聞いてみたほうがいいかもしれないです。

なぜかという、もし知っていたとしたら応援するか止めるかのどちらかの立場に立つと思うからです。佐賀さんは必ず、杉本さんの友だちだったから心配だったというふりをして聞いてみてください。

その段階で現評議委員長が知らないふりをしていたら、思い切ってばらした方がいいです。

もし知っていたら、心配している振りをして新井林くんにしゃべった方がいいです。

渋谷さんに怒られたら、泣いてごまかしてください。

佐賀さんはとことん、杉本さんのことを心配しているのだというスタンスを崩さないでください。



署名はなかった。佐川さんって、なんだか子どもっぽい手紙の書き方をする。

でも、それがあの人の狙いなのもかもしれない。

私は数学のノート、空いたところに人名名詞をすべてイニシャル化してメモした後、細かく破いてごみ箱に捨てた。本当にちっちゃく、紙ふぶきになりそうなほどだった。ついでに「水野五月」さんの住所もメモしておいた。いざとなったらこちらに連絡を入れればいいということなのだろう。佐川さんと一緒に歩いていた、あのお下げ髪の人なのだろう。

——連絡なんて、入れないわ。

私は両耳の上に丸めた髪の毛がほつれていないかどうか、指先で確かめた。

佐川さんの考えていることは短くてあっさりしているけれど、私のすべきことだけは明瞭に綴られていた。昨日、少しパニック状態で佐川さんに泣きついた私だけど、本当はこの六つのことだけを考えて行動すればいいだけなのだと気が付けば、怖いものはなかった。

それなりに私も昨夜、ベッドの中で考えていたことだもの。

まず、生徒会役員選挙告示についてはすでに、渋谷さんから教えてもらっていた。

来週の月曜から金曜にかけてだけでも、毎年なかなか候補者が集まらないのが恒例なので、先生たちに声かけをお願いして集めてもらったりするのがいつものパターンだという。今年も梨南ちゃんのことを除けば、ほとんどもう決まったも同じようなもの。霧島くんを会長に置けば、

あとは自動的に現在の生徒会役員が入り込み、それでまとまるのではないかという。ただ、どうしてもひとつのポストが空いてしまう可能性があるのも、そこを私で埋めてほしいらしい。佐川さんが心配するまでもなく、たぶん副会長のポストになるだろう。

とにかく、梨南ちゃんを生徒会に踏み入らせてはいけない。

これが最重点課題だろう。

それさえ終われば後はともかく私が心配することなんてない。渋谷さんだって、私に対して求めるものはそれだけではないかなって気がする。佐川さんはあまり心配してないようなこと言ってるけど、梨南ちゃんのことだ、常識が通用しない彼女のことだ、空気を読めずに一気に物事を崩壊させてしまう、そういう可能性はおおいにある。

渋谷さんもきっとそのことを心配しているに違いない。

なら、まずはここから手をつけた方がいいような気がする。

次に、佐川さんの言う、「現評議委員長」の過去についての掘り起こし。

これも私なりに気になっていたことだった。

梨南ちゃんにとって現在唯一の味方と言えるのが、立村評議委員長だろう。実際、梨南ちゃんがどう思っているかどうかはわからない。ただ私からしても健吾から見ても、他の人たちから判断しても、立村先輩が梨南ちゃんを宝物のように守りたいという様子は感じられた。もしかしたら気付いていないのは梨南ちゃん と当の立村評議委員長だけかもしれない。

はたして立村先輩は梨南ちゃんが生徒会長に立候補しようとしているということを、気付いているのだろうか？ いや、梨南ちゃんがというよりも駒方先生たちがといった方が正しい。駒方先生は梨南ちゃんを「しつける」ために、まずは落選経験をさせようとしているだけだけでも、もし立村先輩がそのことに気が付いたら、まずどうするだろう？

——絶対に、梨南ちゃんを守ろうとするはずだわ。

一学期、確か修学旅行が終わった直後、コピー室で私を追い詰めて、問い詰めようとした立村先輩の表情があらわに浮かび上がる。あの時の立村先輩は恐ろしかった。何も考えていないような整いすぎた真っ白い顔と、一言言い方間違えたら私を殺そうとでもしかねないようなまなざしが、怖かった。立村先輩が私と佐川さんとの繋がりを持ち出して脅そうとした時には、身の危険を感じてしまった。手を触れられて健吾みたいにエッチなことをしたさそうなしぐさをするなら悲鳴をあげられる。でも、あの瞳にはそんな余裕なんて感じられなかった。とにかく、梨南ちゃんを傷つける人は、どういう手であっても容赦しない、そういうまなざしだった。

いざとなったら私にも切り返す方法がある。立村先輩が佐川さんを殴りつけた場を私は見ている。私と佐川さんは単なる「お友だち」。もしばれたとしてもいくらでも言い訳ができるけれども、立村先輩が佐川さんにした行為は「他校生への暴力」だ。まだ八ヶ月くらいしか経っていないし、時効にはならない。私が一言、先生たちに告げ口した段階で、立村先輩は停学か退学か、どちらかになるだろう。暴力行為に関して青大附中の校則は厳しいのだから。

決して怖いことはないけど、できればお互いなあなあのままで終わらせたい気持ちもある。

無理に罵りあいなんてしないですむように。

そのためには、まず立村先輩の弱点を大至急探し出す必要があるだろう。私の知る限り、立村先輩の過去といえば、

- ・一年時、杉浦先輩に恋焦がれて追い掛け回し、先生に厳しく注意されたことがあったらしい。周りでは全くのデマとされているが、ほとんどの二、三年女子は事実であったと認めている。

- ・二年時、宿泊研修中に何を思ったのかバスから抜け出して脱走を図ったことがあるらしい。その点については担任の菱本先生がもみ消したので、停学にならずにすんだらしい。

- ・水鳥中学で、佐川さんを殴りつけたことについては、言うまでもない。れっきとした暴力だろう。

- ・品山小学六年の時、自分をかばおうとしてくれたクラスメートを逆恨みし、卒業式の時に不公平な決闘でもって相手に大怪我させて逃げ出したらしいということ。もっともその時は相手の人が嘘をついてごまかしてくれたので、全く問題にならなかったらしい。

今のところ、わかっているのはこの程度だけでも、こうやって書き出してみるとすごい量かもしれない。もし立村先輩が私と同級生だとしたら、たぶん一切存在を無視するタイプの人だと思うし、お付き合いの対象には決してならないだろう。

その一方で、梨南ちゃんと同じ経験をしているから理解しあえるのも納得、と感じるところもある。うまく言えないけど、学校祭で梨南ちゃんにひつつきまわっていた秋葉くんとそっくりな気がしてならない。梨南ちゃんがいやがれば嫌がるほど、「杉本、さ、一緒にこっちへおいで、ほら評議委員がだめなら交流委員においで、ほらE組においで」と引きずりまわし張り付いている立村先輩と、見事に重なる。

——これって、すごいかもしれないわ。

私は思わず身を震わせた。

だって、こんなところで、梨南ちゃんを大切にしながら男子のタイプがはっきりするなんて思ってたんだもの。

となると、私がまずすべきことは、梨南ちゃんを立候補させないように、立村先輩に協力を要請する。これじゃないかという気がしてきた。

親友とは思えないにしても、同じ小学校で過ごしてきた梨南ちゃんをこれ以上傷つけるのはあまりしたいことではない。たぶん霧島くんと生徒会長一騎打ちになった場合、すぐに落とされるのは目に見えている。それに生徒会にうまく入れたとしても、かつての評議委員会と同じようなことになりかねないだろう。そう立村先輩に頼んで、梨南ちゃんを説得してもらおうというのはどうだろう？

立村先輩だって今は評議委員長。たぶん、問題が起こらなければこのまま後期も評議委員に選ばれ自動的に長になるだろう。それに、評議委員長としての素質がないとして、あえて下ろした経験だってあるのだから、決して梨南ちゃんを生徒会長にしたいとは思っていないだろう。本来はE組で梨南ちゃんを守り、抱きしめてあげる立場の人なのだから。

——だから、どうやって切り出せばいいかしら。

閉館までずっと私は、考えつづけていた。どうすればいいんだろう。

——立村先輩に梨南ちゃんのことを話した方がいいってどういうことかしら。

最後に付け足された佐川さんの文章に、ついついひっかかってしまった。

直接話をした時には、「杉本さんは落選するために立候補するんだから無視してていいんだよ」と無視の形を取っておられた佐川さんだけど、何か考えが変わったのだろうか。いきなり立村先輩に探りを入れるようにとか、渋谷さんたちが隠していることをばらしなさいとか、かなり方向を変えるような言葉を綴っている。

そういえば佐川さんって、私よりもずっと、立村先輩を警戒しているような気配を感じる。

もちろん怒らせたくない人だとは思うけど、私からしたら単純に評議委員会で遊んでいるだけの年上の男子にしか見えないし、正直、こういうタイプの男子は好みではない。

男子はどうして、過剰なほど立村先輩を警戒するのかな。

私だったら、どうするだろう。

図書館を出た瞬間、結論が出た。

——立村先輩に尋ねてみようかな。

だいぶ外は暗くなっていた。健吾やお父さんお母さんには、「こんな暗くなるまで歩くんじゃない」とか怒られそうだけど、今はひとりで考えたかった。佐川さんの言葉は私だけのもの、他の誰にも取られたくない。

さっきメモした、水野さんへの住所がちらっと頭をよぎったけど、すぐに忘れようと決めた。まずは私ひとりで、やってみよう。

次の日、私は早めに学校へ向かった。

健吾のバスケ部朝連に付き合っていた頃は朝六時登校も珍しくなかった。でも今はそれどころではないこともわかっているので、お互いの了解もあって別々に通っている。健吾は学校祭が終わってからずっと、秋の新人戦と練習試合の連続で、ほとんど話す暇がない。以前の私だったら淋しくも思ったのだろうけど、どうせクラスが一緒なのだしかまわないと割り切ってしまう。

もっとも健吾はその態度が物足りないらしく、

「たまには練習見に来い」

なんて言う。女子に見られて恥ずかしくないのかしら。走ったりボールを奪い合ったりしている姿は、醜いとは思わないけど、毎日見て楽しいものでは決してない。もっと語りたい、おしゃべ

りしたい。そういう時間があつたなら。

「私、友だちと話があるから、またあとで行くわ」

しかたないので帰りの時間だけ合わせておくことに決めていた。渋谷さんにも風見さんにも、そのあたりの事情はきちんと話しておいたから大丈夫。こういう時、公認の彼氏彼女関係というのは楽だった。暗黙の了解で理解してもらえるから。

八時前に到着した後、健吾の靴がちゃんと外履のスニーカーに置き換えられているのを靴箱で確認し、私はまず、E組の教室へと向かった。

E組の教室、といっても、以前は「教師研修室」と呼ばれていた一室で、手書きの表札が掲げられているようなところだった。他の教室と見た目変わらないけれども、本棚に大量の文学書が並んでいるところとか、ビデオテープやカセットテープがうずたかく積もっているところとか、駒方先生の専門である絵の具の使い捨てた跡が大量に残っているとか、そういうところが少し違っていた。うまく言えないけれども、私たちの学年が高学年だとしたら、E組の教室は低学年扱いされそうな、そんな雰囲気だった。

そこにいつも、梨南ちゃんは隔離されている。

本人はどう思っているかわからないけど、「隔離」で間違いないと思う。

他の生徒たちが出入りすることもかなりあると聞いている。大学の授業を受けることが許されている生徒や、特別に指導が必要な人とか。またそこに属する人の友だちなどもうろうろしている。私の知っている限りだと、西月先輩が最近では梨南ちゃんの面倒を見ているらしい。天羽先輩に振られて、きらわれものの先輩に押し付けられて、精神的に衝撃を受けたということで、いまだに口が利けなくなった人だ。建前は「被害者」扱いされてE組と現在のクラスを行き来している。梨南ちゃんを中心に、三年の先輩たちがたむろっているのは以前から知っていることだった。

そんな中、もともと敵外視されている私が入り出すのはお門違いかもしれない。

私だって、こんなこと、ほんとはしたくない。

でも、今しかチャンスがないのもほんとのことだった。

私はE組の廊下前に立ったまま、来る人を待った。

——確か立村先輩は、品山から毎日、自転車で通っているはず。

立村先輩はいつも、早めに学校に来るらしいと健吾から聞いていた。

「立村先輩」

読み通りだった。八時五分前。ほっそりした姿の立村先輩が、ふらふらした感じで廊下の向こうからやってきた。ひとめでわかった。男子には珍しく真っ白い顔立ちと、それでいて私に対しては厳しいまなざしを知っていた。

「佐賀さん？」

まだE組には誰も来ていない。まだ七時台だもの、それはあたりまえ。梨南ちゃんは八時過ぎにならないと入ってはいけないと、強迫観念みたいなものを持っている子だ。立村先輩くらいだ

ろう。だから待っていたのだ。

「何か、用？」

言葉だけはやわらかいけれども、どこかつっぱねるような響きを感じられた。用心しているというのだろうか。私と話す時、立村先輩は丁寧なんだけど、四角張った言い方をする。

「はい、今少しよろしいですか」

私もそのあたり、わかっているのできちんと礼儀正しく話す。

「梨南ちゃんのことなんですけれども、先輩はご存知ですか？」

「杉本のこと、ってなんだろうな」

とぼけているのか、本当に知らないのか、そのあたりはきちんとつかまないとまずい。立村先輩の眼が本気になっているのは、やはり梨南ちゃんが存在がしっかり根付いているからだろう。

「はい、私、友だちから噂で聞いたことなのですが、これお話しておいた方がいいと思ひまして待ってました」

「人前では話せない内容か？」

かりっと、刺のある答えが返ってきた。立村先輩、私に対して攻撃に入りそうだ。こういう時、どうすればいいんだろう。一緒に佐川さんがいてくれたら、こんなに足が震えたりしないのに。身体が震えているのがわかる。こんな、秋葉くん程度の男子に対してなぜ、気圧されたりするんだろう。私は息を整えた。一気に告げた。

「梨南ちゃんが、生徒会長に立候補したいという話を聞いて、私、心配になったんです」

「生徒会長？」

立村先輩はまっすぐ私の顔を射た。無感情な、それでいて突き放すような視線だった。

「はい、私も梨南ちゃんに確認しなくちゃと思って、心配になったんです」

「なんで佐賀さんそんなこと、杉本に確認しないといけない？」

「だって、私は」

かみ合わない気持ちを無視して、答えた。

「私、梨南ちゃんの友だちだったから。友だちならちゃんと、本当のこと言ってあげないといけないと思ったんです」

「友だち？」

ぞくりとするくらい、冷たい言葉が立村先輩から返ってきた。私は歯を食いしばり、それでもおびえた風に見えないように、無理やり真剣な顔をこしらえた。ほつれ毛が気になったけど、なんとか指を動かさないようにがまんした。

「新井林くんに話そうかと思ったのですが、二Bの生徒にまで広まってしまうと大変なことになってしまいそうな気がしますし、それにできたら、梨南ちゃんにこれ以上恥をかかせたくないんです」

「恥をかくってどういうこと」

「はい、生徒会改選で圧倒的不支持で落とされる可能性があるということです」

「そういえば佐賀さん、最近生徒会室でよく話をしているようだけど、噂はそのあたりからか？」

」

話を逸らされそう。私はあえて口をつぐんだ。

「友だちに迷惑がかかるので、内緒にさせてください」

「それはどうでもいいけどさ。とにかく杉本が立候補するなんて話は、俺も聞いてないな」

本当だろうか。あとで佐川さんに指示を仰がなくちゃ。立村先輩の口調は少し疑問を感じる風にやわらかかった。

「佐賀さん、わかる範囲でいいんで、教えてくれないかな」

「立村先輩は、梨南ちゃんを止めてくれますか？」

「止めるもなにも、それがデマかどうかわからない段階で何も言えないよ」

「私も、噂しか聞いていないんです。だからわかりません。でも、梨南ちゃんがこれ以上傷つくのはいやなんです。だから約束してくれませんか。梨南ちゃんを守ってください。私、新井林くんや二年B組の人たちや、その他梨南ちゃんに迷惑をかけられた人たちのことを考えるとこれ以上、彼女を守ってあげることができないのですが、やはり、ずっと友だちでいてくれた梨南ちゃんがまたずたずたになるのを見るのはいやなんです。お願いします、梨南ちゃんを助けてあげてください」

立村先輩の表情は変わらなかった。私をずっと見据えたままだった。どう気持ちが揺らいでいるのかは読みきれなかった。

「事実だけでいい。杉本が来る前に早く話してくれないかな」

「はい、梨南ちゃんはE組で、駒方先生に推される形で、生徒会長に立候補することになっているそうです。普通の生徒会改選だったら問題なく信任投票で決まると思うのですが、今年はすでに何人か会長候補がいるそうです。だから、その人がいる以上、梨南ちゃんに勝ち目はありません」

「どうしてそんなこと聞いているの」

渋谷さんから聞いたと言えぬわけもなく、私はもう一度繰り返した。

「友だちに迷惑がかかります。言えません」

「それに、杉本に勝ち目がないと、どうしてそう言い切ることができるんだ？」

「梨南ちゃんはもう、嫌われているし、みんなから馬鹿にされているからです」

私は一呼吸置いた。立村先輩の視線を跳ね返した。

「先輩、学校祭の時に、他の学校の生徒が梨南ちゃんをひっぱりだして走り回っていたことを覚えておられますか」

「ああ、あったなそんなこと」

一瞬、不機嫌そうに廊下の天井を見上げた立村先輩。あまり思い出したくなかったのだろうか。

「あの時、周りの子や梨南ちゃんを知っている人たちはみな言っていたんです。やっぱり、ああいう程度の男子が梨南ちゃんには合っているんだって」

「それは失礼じゃないかな」

「はい、人間は平等ですから当然です」

言い返した。

「あのことがなければ、まだ梨南ちゃんは生徒会長として評価される可能性があったと思うんです。梨南ちゃんのことを知らない人たちがたくさんいるうちは、うまくすれば当選するかもしれません。だけど、あの時、梨南ちゃんという人をたくさんの人たちが評価してしまって、見下してしまった以上、それ以上の扱いをしてもらうことって難しいと思うんです。もし立候補しても、対抗候補の人は梨南ちゃん以上に知られていないですし、嫌われてもいないはずですからずっと有利です。どうでもいい人たちは、嫌われ者よりも、知らない人の方に投票するはずです。そうなると、梨南ちゃんはどう見ても不利ですし、さらに選挙中、顔を全校生徒にさらけ出してしまいますのでさらに嫌われてしまいます。私、思うのですが」

思いに任せて語り続けた後、私は付け加えた。

「たぶん駒方先生は、梨南ちゃんをたっぷり傷つけて反省させるために、立候補させようとしているんだと思うんです。大人ってひどいです。落選確実なのに、さらに傷つけようとするなんて酷いです。梨南ちゃんが覚悟しているならそれはしょうがないと思いますけど、ただ煽り立てて、可能性があるとか言っておだてて、実は陰で舌を出しているなんて、最低だと思います」

立村先輩がちらと振り返り、誰か来ないかを確認した。

「それ、誰から聞いた？」

「友だちからです。言えません」

同じことを繰り返した。

「私はもう、梨南ちゃんから嫌われていますし、何を言われてもしかたないと思ってます。私のことを嫌うならそれでいいです。でも、これ以上梨南ちゃんが傷つくのを見るのは私、辛いです。たぶん新井林くんに話しても止めてくれるとは思いますが、やはり、梨南ちゃんを大切にしてくれる人に止めてもらった方が納得すると思うんです。だから、お願いします。立村先輩、梨南ちゃんを止めてください」

あふれた言葉は私も止められなかった。話している真っ最中はそれが真実だと思えるし、涙があふれそうになったりもした。言葉はすべて、白々しく聞こえるだろうとわかっているのに勢いのっているのとそれが本当に感じられてくるのが不思議だった。

立村先輩の表情は全く動かず、私を凝視していた。

この人は私と佐川さんのことを知っていて、私のことを軽蔑している。もしかしたら憎んでいるかもしれない。大切な梨南ちゃんを傷つけた張本人だと思い込んでいるかもしれない。

——佐川さん、助けてください。

静かににらみ合った。何秒間か経ったろうか。

「わかった、佐賀さん。どうもありがとう」

まったく頬をほころばせず、立村先輩は小さく頷いた。

「佐賀さんから聞いたとは言わないで、杉本に確認してみる。佐賀さんの言う通り、杉本は生徒会長に不適格だと思う。ただ、あくまでも噂である以上、あまり広がらないようにしたほうがいいな。とにかく、今のことは、他の人たちに決して話さないようにして欲しくないかな。理由はだいたいわかっていると思うけどさ」

立村先輩は腕時計を覗き込んだ。私も自分のを確認した。八時五分にまだ針が動ききって
なかった。

「杉本がそろそろ来る。佐賀さんは教室に行ったほうがいい。それとさ」
私が一礼して、背を向けようとした時、立村先輩の声が矢となり刺さった。

「佐川に伝えておいてくれないかな。他校のことで口出しするなってさ」

来週の月曜から生徒会役員改選告示が行われる。

渋谷さんからのアプローチはまだ、あまりない。

「少し考えさせて」と答えたのがやはり正しかったのだろう。渋谷さんも頭のいい人だなんて思う。私を無理やりせつについて「もういいわ、やっぱりやめた」と言われるのを恐れているのかもしれない。立候補者募集は一応金曜日が締め切りになっていると聞いているけれども、それまで様子見で通すことに決めた。佐川さんにもそう言われているし。

それまで秘密が守られるだろうか。

立村先輩は決してしゃべらないだろうか。

私と佐川さんとの繋がりについては、健吾に話さない、そう以前は話していたけど、今回もしかしたらすでに健吾のもとへ情報が流れているかもしれない。立村先輩はふだんただの昼行灯に見えるけど、梨南ちゃんのことを絡めば何をするかわからない。私はちゃんと「梨南ちゃんのため」と強調したけど、また曲がった形で受け取られていたらどうしよう。

立村先輩とE組の前で話した日の夜、私はすぐに佐川さんへ手紙を書いた。

正確に言うと、「水野五月様」の宛名でだけ。



佐川さんへ

私はとんでもないことをしてしまったかもしれません。

立村さんとふたりの時を狙って話をしたのですが、私の後ろに佐川さんがいるものだと決め付けられてしまいました。佐川さんのことを新井林くんには話さないと前に約束してくれましたけど、梨南ちゃんのことを関係すれば何を言うかわかりません。

どうすればいいですか。お返事をお願いします。



返事はまだ来ない。

クラスの中で、側にいる時も、健吾の表情をそっと伺い様子を見る。

いつも通りの健吾で、クラスの男子たちに発破をかけたり、私を無理やり廊下へ連れ出したり、ロングホームルームでは二学期に向けてクラス一丸となる行事の話題とか、いろいろ盛り上げている様子だった。

健吾に怒りの火が点いたら、たぶん誰も止められない。

今はその気配がない。

でも、立村先輩が一言、私と佐川さんのことを話したとしたらどうなるだろう。

以前も三月に危うく健吾に知られそうになった時、私は思いっきり泣いて否定したのだ。あの時改めて、健吾って涙に弱いんだなって思ったことを覚えている。でも、二度目の涙はたぶん効かないだろう。どうすればいいのだろう。

生徒会改選のことよりも、私は佐川さんのことで思い悩む日々だった。

「おい、佐賀、どうしたんだ」

上の空で健吾の話聞いていたのを見破られたのかもしれない。私は慌てて作り笑顔をこしらえた。

今日は日曜、健吾の率いるバスケットボール部の秋季大会が青潟市民体育館で行われた。朝一番の試合で青大附中バスケ部は、ものすごく大差をつけられて敗退した。私もずっと応援席に座って見つめていたけれど、健吾ひとりが一生懸命体育館を走り回ってもどうしようもなかったことがよくわかった。だって、せっかく健吾がチャンスを作っても、他の部員さんたちがつなげられないのだから、しかたない。

きっと健吾は落ち込んでいるだろう、そう思っていた。だからそっと、お弁当だけ置いて帰ってきた。そしたらすぐに電話がかかってきた。かなり強引に、

「すぐ来い」

一言だけだった。反省会とかないのかな、とか思っていたけれども、試合後のいらいらしている健吾に逆らうといいことがないし、私も予定がなかったし、二人で待ち合わせることにした。久しぶりに二人っきりでいられた。

いつもだったらほっとするのもかもしれない。

安心するのもかもしれない。

「なんかあったのかよ、またあの馬鹿女か？」

梨南ちゃんなんかもうどうでもいい人なのに。私は首を振った。

「違うわ。ちょっと風邪気味なだけ」

健吾は納得した風にあごで頷き返し、またぺらぺらとしゃべり始めた。もともと健吾という人は、自分の試合結果に関して愚痴をこぼすタイプではなかった。だからあえて私も触れなかった。当り障りのない話題というと、やはり評議委員会の裏事情くらいだろうか。私も知ってて、健吾の方がもっとよく詳しくて、そんな話だけさせることにした。

「来週生徒会改選だろ、結構大変なんだぞ、女子と違って男子評議はな」

「そうなの、健吾、大変なのね」

何も考えずに相槌を打った。

「まあ、生徒会とは少しずつでもいい関係に持って行きたいってところもあって、今、立村さんが藤沖生徒会長といろいろ打ち合わせてるんだな。藤沖会長とはもともと今の三年連中、仲いいみたいでな。うまくいくだろって感じだ」

藤沖会長、あの応援団長そのものの体格のよさ。

また、心にひっかかるものが見つかる。

あの日、立村先輩と話した朝以来、私がうなされている悪夢を。

「けど、どうせ今度の会長は、たぶん一年男子から引っ張るんじゃないかねって話になってるぞ。なんかな、霧島先輩いるだろ、あの弟。あいつがすげえ使える奴らしいって、難波先輩あたりが一生懸命口説いてるんだ。まあ、一年会長つつうのも正直、俺はむっとくるけどな。水鳥中学生徒会も確か内川会長一年で立候補って話だしな。いいんじゃないの」

ずいぶん健吾、落ち着いて話している。一年前の健吾だったらかっとなって、「なんで一年なんかを会長にするんだ？ 二年は誰もいねえのか？」

とか騒いでいそうなのだけど。

私は健吾が羽織っているオレンジ色のウインドブレーカーをそっとつまんだ。

「そうなの」

「おい、お前、変だぞ」

健吾がちらっと周囲を見まわした後、私の頬に軽く手を当てた。手のひらにかいた汗がぺとっとくっついた。

「風邪だったら風邪って最初から言え。外なんか連れださないだろうが」

「ごめんなさい」

あやまっておけば大丈夫。健吾には素直に接しておけば、それですむ。

全く生徒会の裏事情に健吾が気付いていないことに、私がほっとしたなんて、言わなくたっていい。

そう、健吾は全く気付いていないのだ。

私が生徒会副会長の渋谷さんと仲良くなったことも、生徒会室で次期生徒会長候補の霧島さんと顔を合わせたことも、そのほかいろいろなこと何にも。恐らく佐川さんのことも何も感じていないに違いない。

もしこの場で健吾の耳元へ、

「私、生徒会役員に立候補しようと思うのだけど」

そう吹き込んだらどういう反応を示すだろう。一瞬考えて、すぐ怖くなって打ち消した。

「なんか食うぞ。あすこにハンバーガー屋があるから、入るぞ」

ぶっきらぼうに、私の背中をぐいぐい押した。健吾は気付いていないかもしれないけれど、背骨のちょうど、ブラのホックのところを触っているようで、思わず頬が熱くなった。

無理やり一番奥の暗い席へ押し込まれた。ソファがあるからだという。一番あったかいところだからだと健吾は言う。私からすると、かなり暑いんだけど、そんなことも言えないので素直に私は腰掛けた。向かい合って座るかと思ったら、健吾は私の隣へきて、お尻をぺたっとくっつけるように座った。暑苦しいなんて、やっぱり言えない。

「チキンバーガーをダブルで、あとジンジャエールをふたり分」

健吾の言うなりにメニューを選び、私は黙って受け取った。

「忘れてた、あとフライドポテトをLサイズ」

よく食べるものだと思ってしまう。健吾はいつも、ふつうの人の三倍くらい食べる。私の食べきれなかった分を処理するのは健吾の役目だった。今日もそうなるんだろう。食欲が湧かず、あ

ぶらっぽいチキンバーガーを半分手でちぎり、私は健吾に渡した。

「佐賀、食わねえと風邪直らねえぞ！」

「ごめんなさい。でも食欲がないの」

あまりここで言い訳すると「じゃあ誘った俺が悪いっていうのかよ！」と怒鳴られるのが目に見えている。あまり好きでないジンジャーエールだけど、そっと口をつけた。

勢い良く一個半のチキンバーガーを平らげていく健吾。口を白いタルタルソースでべとべとにしながら、手の甲でぬぐった。いつも見慣れた食べ方だけども、なぜかこの時は下品に見えた。少し壁に張り付こうとしたら、また寄ってこられた。

「ちょっとふらっとしたの」

言い訳すると、健吾は手の甲を額に当ててきた。だから、ソースのついた手で触れないでって言いたいの、どうしても言えず私はされるがままになっていた。

「お前何でも我慢しすぎるからだぞ」

「そんなのじゃないわ」

「じゃあなんで何にも言わないんだ」

私は黙って、小さくちぎってチキンバーガーを食べた。ジンジャーエールよりも紅茶を飲みたかった。

「委員会の時だってお前ひとり、ずっとうつむいてるし、教室でもまあいつものことだけどな、なんも言わねえし。またあの馬鹿女にやられたのかと思ったじゃねえかよ」

「そんなの、違うわ」

佐川さんとのことが筒抜けになるのではないかと心のどこかでおびえていたのかもしれない。気持ちが晴れず、もちろん健吾になんて話すこともできずにいる。健吾は私の様子に対しては敏感だけど、その奥に何が隠れているかを見ようとはしない。だから、私は楽に健吾と付き合っていけるわけだった。泣かないですんだ。

「本当にただ、風邪気味なだけなの」

「それとも、評議の連中に何か言われたのか？」

喉を詰らせそうになった。完全に誤解されてしまったらしく、健吾はじっと私の顔を自分の方に向けさせ、

「やはり、そうなんだろ。誰だ。三年か」

「違うわ。関係ないわ」

言い方がさらに紛らわしかったのか、健吾は目をそらさずに勘違いしつづけた。

「あと半年で三年も居なくなるから我慢しろ、って言いてえとこだけど」

それでいいじゃない、健吾が口出ししない方がいい。私は目を伏せた。またぐいと見つめかえされた。

「お前がそんなじゃ、俺も手出しするしかねえじゃねえかよ」

だから、余計なことだと言っているのに。私は首を振るだけだった。生え抜き評議委員のみんなどとは違って、私は演劇の素養を持っていない。どうしても顔に出してしまう。全く気付かないのか健吾は、ジンジャーエールを半分一気に飲み干した。口をまた乱暴に拭いた。なんで紙ナフ

キン使おうとしないんだろ。

「今度の改選で、生徒会が二年中心の体制でシフトされたら、もう少し俺も出番が増えてくるはずだ。どうしても三月までは立村さんたちが中心にならざるを得ないって言われてるけどな。けど、俺も学校祭の時に何度か話してあるから、たぶん十一月以降は俺が中心になるはずだ。聞いてるだろ。評議委員会ビデオ演劇。あれが冬休み中準備にかかる形となるわけだ。で、ここだけの話だけどな」

健吾は横目でちらちら私を見ながら、腕組みをした。

「十月の改選後に、委員会も建前上は選び直しになるわけだが、三年は何人かまた引っ込むらしいんだ」

「引っ込むって？」

「早い話、生え抜きの先輩がひとりやめて、別の人が入るって奴だ」

「それ、誰かしら」

噂には聞いていたのでだいたい想像はついてた。たぶん、あの人だ。

「女子には言うなよ。動揺するからな」

みんな知っているのに。

「霧島先輩だ」

——ああ、やっぱりね。

健吾が知らないと思っ込んでいただけであって、もう生徒会役員の間では当然のこととして捕らえられているのを、やっぱり気づいていない。目の前でいろいろな出来事が繰り広げられているのに、評議委員会の中ではまだ何も、勘付いていない。

私は話を黙って聞くことにした。

「霧島先輩は来年、青大附高じゃなくて、別の学校に進学することになったらしいんだ。んで、ほとんど進学者である評議委員会に顔を出すのは居辛いんじゃないかってことで、裏で止めさせることになったらしい。まあ、それはそれで話もついているらしいしな」

どこまで知っているんだろ。健吾は霧島先輩の進学する予定の高校が「別の高校」じゃなくて、青澗の私立高校中一番レベルの低いといわれる女子校に進学させられるということ。霧島先輩の学力が、青大附属でやっていけるレベルではなくて、しかたなくそうさせられることを。もちろん、ご本人も納得していないだろうということも聞いている。

すべて渋谷さんから聞いていたけど、私も前々からそうなるのではと予測していた。

「どっちにしてもそんなの関係ねえがな、ただこれで少しは女子連中の風通しもよくなるんじゃないかって気は、するな」

健吾は言葉を選んでた。これがもし、梨南ちゃんのことだったら、とことん叩きのめしているだろうけど、一応先輩だし、実質的に私に対して害を及ぼしていない人だからある程度は気を遣っているのだろう。いや、もしかしたらあのかわいらしいアリス雰囲気のかわいらしさにぼおっとしているのかもしれない。健吾は清純なタイプが好きだもの。

「風通し？」

「今の三年女子はやたらとあの馬鹿女にくっついてるだろ。立村さんの意向もあるんだろうが、やっぱりなあ、これだと居心地悪い奴もいるぞ。こういっちゃああなたが霧島先輩は、あの女のことをむちゃくちゃ心配しているだろう？ 西月先輩と同じにな。だとやっぱり、それに引きずられて間違っただけ方向へ進んでしまうって奴もいるはずだしな」

「それはあるかもしれないわ」

特段ひっかかるところもなく、健吾はフライドポテトを五本分まとめて噛み砕いた。

「今年、西月先輩と霧島先輩のふたりが消えたとしたら、あとは清坂先輩と近江先輩だけだ。近江先輩はあまり評議の仕事に関心ねえようだし、清坂先輩はあれだけ切れる人だ、立村さんのサポートには不可欠だ。となると、もうあの女をかまう奴はほとんどいなくなるというわけだ。それがどういうことか、わかるか、佐賀」

なんとなく。でもごまかした。

「ううん、わからないわ。健吾、教えて」

「やっぱりお前はなんもわからねえんだな」

満足そうに健吾は喉を鳴らしてジンジャエールを飲み終えた。

「お前にうるさく嫌がらせする奴らが、減るわけだ。そんなこともわからねえのかよ、ばーか」
こつんと頭を叩かれた。いや、馬鹿にしないで。そう言いかえそうとしたらいきなり肩に手を回された。一瞬のうちに健吾の胸にもたれる格好になった。慌てて引き剥がそうとした。

「なんだよ、冗談やっただけだろ」

「こんなところで、だめよ。中学生なのよ、私たち」

「けっ、誰が中学生かよ」

健吾はそれ以上要求してこなかった。やはりお客さんがたくさんいるお店だからだろう。もし、薄暗い喫茶店で、本当に誰もいない場所だとしたら、きっといつものようにするだろう。最近顔を近づけられるたび、肌に触れるのは、健吾が髭をそった後のちくちく感だろうか。初めてキスされた時には感じたことのない針の感触だった。あまり気持ちよいものではなかった。

健吾の場合、私に害を及ぼすとされる相手に対しては手を緩めず叩きのめすけど、それ以外の人に対してはかなりおおらかに受け入れることが多い。梨南ちゃんのように最初から憎みきっている人は別だけど、たとえ思いっきり殴り合いのけんかをしたとしても、自分が納得すれば素直に受け入れるし、友だちになろうとすることもある。

たとえば、立村先輩を相手に去年の冬、対立した時のような場合。

あの時の事情は健吾側から聞いただけだけでも、立村先輩が評議委員長を健吾指名で行きたいと打ち明けた段階でわだかまりが溶けたらしい。もちろん梨南ちゃんからみの問題は山積していたけども、立村先輩が身体を張ってとことん「評議委員会を守る」形で片付けてくれたので、健吾的には納得したのだという。

「まあ、俺もああいうタイプ、あんまり好きじゃねえけどな、俺のことをああまで買ってくれるんだったらありがたいことじゃねえかってことだな」

健吾ってやっぱり、単純だと私は思う。

何にもわかっていないんじゃないのかな。

立村先輩が本当は、梨南ちゃんを守るためだったらどんな演技でもできる人だってことを、気付いていないんだもの。佐川さんもそのことをすっごく心配していたのに。

「健吾くんはまっすぐでいい奴だけど、なんだか立村の手の中にだんだん落ちているような気がするんだ。あ、これ健吾くんには絶対内緒だよ。立村はどんなに物笑いにされたって、昼行灯の蠟人形と言われたって、全然気にしないんだ。杉本さんのためだったらどんな汚い手でも使うんだ。あいつに正々堂々は通じない。今健吾くんに話したらおとひっちゃんと同じくぶっ千切れるからさ、絶対に内緒だよ。佐賀さんだけ、ちゃんと立村の行動をチェックしておいた方が絶対いいよ！」

こうやって話をしていると、健吾も評議委員会も誰もかれも現実をちっとも見てない人なんだなってことがよくわかった。健吾が本当に気にしなくちゃいけないのは、本当だったら生徒会改選の行方のはずだ。仮に私が立候補する可能性があるを知ったら、まずは問い詰めるのが普通だろう。私が健吾の立場だったら必ずそうする。なのに、どうだっていい霧島先輩の進路問題とか、評議委員会の後期状況とか、そんなことばかり考えている。

「健吾、どうしたの」

店を出て、健吾の歩くままに私はついていった。川べりを歩き、突然健吾は立ち止まった。一歩前に進んでいた私は慌てて振り返った。

「おい、佐賀、お前」

「なあに？」

「いや、なんでもねえ」

自然と向かい合った。つい私は両耳の上に丸めた髪に手をあててた。その手を健吾はいきなり上から抑え、いつものように唇を重ねてきた。誰もいないしすぐ終わる、そう思ってされるままになっていたら、いきなり今までしたことのないことをしてきた。乱暴にぎゅうっと舌を入れられた。口の中に残っていたあぶらっぽい息が入ってきて、むせた。

「いや、やめて」

身体を離そうとするけど、健吾の腕は離れない。せめて口をゆすいでからにしてほしいのに。私がなんども肩を揺らしてはねつけようとする、ふいにばらっと手が離れた。

「そんなに嫌がるんじゃないよ」

「だって、誰かが来て見られたら怖いもの、それに、やっぱり、まだだめ」

「何がだめだっていうんだ？」

健吾の眼は釣り上がっていた。またちくちく刺さった剃り跡が痒かった。さっき食べたタルタルソースが私の唇にくっついたのかもしれない。生臭い匂いがつんとした。

「私たち、中学生だから、それ以上はだめだと思うの」

自分自身も信じていない言い訳で、私は健吾を制止した。

「けどそんなきたねえって顔しなくてもいいだろうが！」

「汚くないわ。だけど、怖くなってしまふの。それだけ」

まずい、健吾が臍を曲げてしまう。すぐに判断して私はうつむき、目頭を押さえる振りをした。たぶんこれで大丈夫。

「中学生中学生って、なんだってんだそれ！」

またわけのわからないことを呟きながら、健吾はひとりすたすた前へ進んでいった。私はゆっくり、自分のペースで歩くことにした。無理にご機嫌取りをするよりも、切りのいいところで「ごめんね、もういちどおしおきしてもらっていい？」と甘えればいい。思った通り、私が追いつく頃にはすっかり機嫌を直していて、またぎゅうっと肩に手をまわしてきた。なんだか健吾の方がいつもより甘えん坊さんな気がしてきた。こんなこと、今までなかった。

次期評議委員長だとか言われているけど、よくよく考えるとその保証はどこにもない。

どうして健吾は生徒会長を狙おうと考えなかったのだろうか？

立村先輩に評価されたからといって舞い上がっている健吾だけど、もし評議委員会をあっさり見限って、生徒会に殴りこみを掛けたとしたらたぶん問題なく当選するだろう。信任投票でなかったとしても、健吾以上に勝ち目のありそうな生徒は思い当たらない。一年の霧島くんを担ぎ出してこなくても、何の問題もなく片がつくはずだ。

だけど、健吾はぬくぬくと「次期評議委員長」という肩書で満足している。

渋谷さんと霧島くんはふたりで、早急に、評議委員会から権力を奪い取ってしまおうと計画しているというのに、ちっとも気付こうとしない。もしかしたら来年健吾は、生徒会の言うなりになるだけかもしれないのだ。

いや、もうひとつ、どうして気付かないのだろうか。

前期、評議委員を勤めた生徒が後期も続けられる保証なんて、全くないということ。

霧島先輩や西月先輩のように、半ば無理やり降ろされる場合だってあるだろうし、なによりもクラスメートから評価されずに蹴落とされる場合だってある。もし何かの罪を犯して、信任を得られずに追い出される場合だってある。ほら、梨南ちゃんのようにだ。

——健吾も、評議委員会の人たちも、何にも気付いていない。

——もしかしたら今日思い切って、健吾にすべて打ち明けてしまいたくなるかもしれない。

家を出る前に少しだけそんな風に揺らいだ気持ちが、あっさりと固まった。

健吾に話しても、今は何の意味もない。

——私は、佐川さんの言葉に従います。

健吾には決して、言わない。

佐川さんからの手紙が、待ち遠しい。

佐川さんからの手紙はいつまでたってもこなかった。

生徒会改選告示が月曜の昼休み、生徒会室前に張り出され、金曜日の午後四時で締切となる旨発表された。最初からそのあたりのスケジュールはわかっていることだったし、佐川さんにも手紙で書いておいた。だから、それを見た上で、私がこれからどうするべきか、どういう風に行動すればいいかを、佐川さんが考えて指示してくれるはずだった。

いいかげん、教えてくれてもいいはずなのに。

私が立候補して、どういうメリットがあるのだろう。

私が立候補して、何をなくしてしまうんだろう。

渋谷さんが何を計画して、私を引きずり込もうとしているんだろう。

梨南ちゃんを無理にでも押さえつけなくてもいいのだろうか。

いろんな選択肢がありすぎて、私にはどうしていいのかわからない。

告示のあとも、渋谷さんと風見さんのふたりとは、それなりにおしゃべりをしていた。自然と生徒会室以外で顔を合わせることが多くなり、図書館とか廊下とか中庭とか、いかにも女子たちがたむろしやすそうなところで話をしていた。だから、うるさく友だちチェックをする健吾もそれほど気にしなかったのだろう。気が楽だった。

おもしろいことに、渋谷さんは風見さんの前で決して、生徒会改選の話題を持ち出さなかった。ちゃんと「ドリ」と風見さんの呼んでほしいあだ名で話し掛けているし、笑顔を絶やすことはなかったけれども、私とふたりきりになった瞬間一気に悪口が溢れ出す。それを私は黙ってふんふんと聞いている。そういう感じの繋がりだった。

風見さんも

「やーだあ、なんでふたりの世界作ってるの！ もう、仲間はずれなんだからあ」

とかすねてみたりはするけれども、決して私と渋谷さんの話題に割り込むことはなかった。当り障りのない話題、たとえばテレビアニメだとかぬいぐるみとかそういった話、そのあたりで盛り上げることに徹していた。きちっと硬くブローした風鈴ヘアーを振りながら、

「ねえ、ハル、今度一緒にショッピングいこうよ！」

とか話し掛けてくる。

——うまくバランス取れているふたりかもしれない。

なんとなく私の中で、そんな感じがしていた。

「ハル、ねえねえ、最近ふたりともどうしたの。落ち込んでるよお。どうしたの、秘密があるなら私にも相談してよね！」

「はいはい、言うに決まってるじゃない」

「ずるいなー、私たち親友じゃない」

「もちろんよ。私、ドリのそういう素直なところが好きよ」

互いにうまく綱を引いて均等を保っている。

ふたりはそのあたり気がついているのだろうか。私に見えただけなのだろうか。

木曜日。立候補締め切り前日。

いつものように渋谷さんは生徒会室へ向かおうとした。放課後だった。風見さんにもそのあたりは言い含めておいたようすだった。風見さんもそれほどごねずに、

「それなら選挙終わったらゆっくりあそぼ！」

相変わらず何も考えていない風に手を振って駆け出していった。廊下にはあまり人通りがなく、やっとふたりきりになれた。私が待っていたわけではなくて、渋谷さんの方がほっとしていたようだった。

「うるさいのが居なくなってほっとしたわよね」

「でも」

「私、佐賀さんと一緒にもっと話がしたいの。だから、この前あんなこと勧めてしまったけど」
久しぶりに改選の話が出た。本当だったら渋谷さんも、生徒会室に詰めていなくてはならないはずなのに、こうやってのんびりしていいのだろうか。

私はあいまいに笑みをこしらえて、向こうの出方を待った。

うっかり口を滑らせてこの前みたいなことになったら、たいへんだ。探りを入れてみようと思った。

「渋谷さん、他の立候補者はもう揃ったの？」

たぶん霧島くんはすでに会長に立候補済みだろう。そう思っていたら、渋谷さんは思いがけないことを口にした。すうっとひたいに垂れ下がった細い髪の毛をよけるようにして、

「毎年、立候補者はぎりぎりまで集まらないのよ。金曜日の放課後三十分間に集まるか集まらないか、去年だってそうでしょう。私たち、第一回の告示ではなくて、補欠選挙でようやく集まったようなものなんだもの」

「ああそうなの」

「信任投票だから、とにかく候補者が集まってくればそれでいいの。で、集まったら募集を止める。これもいくらでもやり方あるのよ。先生たちも、第一回告示で集まらなかった時に初めて他の生徒たちに声を掛けるだけ。それまでは自主的に立候補する人たちを待っていればそれでいいのよ」

「そうなの」

毒にも薬にもならない相槌を打ちつづけている私。なんだかばかみたい。

「金曜の三時半以降は今回、見物よ。とにかくみな必死になって集まってくるのよ。今回のように私とか他の生徒会役員が陰で手を回している場合は、早い段階で立候補させないで残りの三十分間ですべて片をつけるって形にしているから」

「でも、かえって早めに立候補されてしまったらどうするの？」

梨南ちゃんだったらさっさと会長に立候補しにくるかもしれない。

大丈夫、と渋谷さんは指先を軽く振った。

「ほら、勝ち目おおいにあり、と見極めたらどんどん他の人が立候補しにくるわよね。誰も立候

補していないところに足を踏み入れるのって、すごいハードルだと思うのよ」

「そうね、誰も居ないと、そうかもしれない」

「でしょう？ 杉本さんだって成績だけはそれなりにいいんだもの。きっと自分が信任投票でない当選するわけがないということくらい、わかっているはずよ。だから、杉本さんがもし来たらすぐに『すでに会長には立候補者がいるけどそれでいいか？』と聞くことにしているの。そうすれば迷うでしょう？」

「それで、霧島くんを？」

恐る恐る私は尋ねた。

「うーん、そうね。私も最初はそれがいいと思っていたんだけど」

渋谷さんは言葉を濁した。何かひっかかるようなものが感じられた。

「もちろん彼は理想といえば理想なんだけど、やはり一年よね。気負いすぎているというか、男としてのプライドが強すぎてなんか大変そうね。仕事全く知らないくせに、今の段階で威張っているというのはなんだか、私の目が節穴だったかなって気がするの」

「そうなの」

あれだけご機嫌とりをしながら、なぜだろう。

「でも、まあ、杉本さんほどではないかな。もし杉本さんが立候補したらその時は、当然そうなるでしょうね」

「ということは、まだ会長に立候補してないの？」

肝心かなめのことを私は尋ねた。

「彼も、三時半に生徒会室で待機してもらって、ぎりぎりに提出してもらうことにしているの。ほら、もしかしたら霧島くんよりもレベルの高い男子が自主的に立候補する可能性だってあるわけだし。そうなったらむしろ、霧島くんは副会長か書記、そのあたりに収まってもらえばいいのよ。どちらにしても生徒会に立候補することは決まっているわけよ。私たちが一番恐れているのは杉本さんが割り込んでくることだけだから」

そこまで話したあと、ちらちらと周囲を見渡した。誰も知り合いはいなかった。耳元にささやきかけてきた。立ち止まり耳を傾けた。

「ここだけの話だけど、最近そちらの委員長が妙な動きをしているようなの」

「そちらの委員長？」

ぴんとこなくて繰り返した。

「立村委員長よ。この三日間くらい、鬱陶しいくらいE組の杉本さんに張り付いているようね」

「梨南ちゃんに？」

「変な行動を取らないように、ご機嫌取りをしたりなんなりしているみたいよ。立候補受け付け時間締め切りまでそうしつづけて、動かさないようにしているようすよ」

思いがけない言葉だった。もちろん、立村先輩が梨南ちゃんにご執心だってことは私も知っている。だからこの前、梨南ちゃんを止めるように報告した。そのあとで手厳しくつっぱねられたけれども、そういえばそうだ。立村先輩は梨南ちゃんを「生徒会長にはふさわしくない」と断言していたではないか。

となると、やはり、そう行動したということか。

「噂はやっぱり流れていたのね。他の評議関連の人たちが情報を集めたのかしら。今の評議委員会って、実際は天羽先輩が仕切っていると聞いているし、轟先輩がその補佐にあたっているとね。ある人から教えてもらったわ。そのあたりで立村先輩に責任を取るように命令したのかなって思ったの」

「責任？」

ますます話がこんがらがってくる。助けて、佐川さん。

「つまり、こういうことよ」

私にあきれれることもなく、渋谷さんはわかりやすく続けてくれた。

「今まで評議委員会でさんざん立村先輩は、杉本さんのことをひいきしてきたでしょう。ただの後輩扱いしておけば、事が大きくならなかったのに。それを天羽先輩と轟先輩が言い含めて、杉本さんを増長させたのは立村先輩の責任なんだから、生徒会長に立候補することを力づくで止めろって命令したんじゃないかしら。評議の人たちって意外と自分たちの委員会内力関係もよくわかってないみたい。気付いていないみたいだけど、わかっている人はわかっているのね」

——当たっている、けどちょっと違う。

私は唇に指を当てて、少しかんでみた。

天羽先輩や轟先輩が命令したという可能性はおおいにある。

生徒会の情報だし、立村先輩が聞いていないなんてことはないはずだ。

ということは、私が話す前にすでに、立村先輩は情報を仕入れていたということだろうか。

佐川さんにもそのあたりのことをもっと聞いておけばよかった。

「つまりね」

口元に小さなしわを寄せ、渋谷さんは言い切った。

「自分たちでしでかした始末を自分たちで片付けてくれるみたいなの。評議委員のみなさまたちは」

「でも、梨南ちゃん、そうかんたんに立村先輩の言うこと聞くかしら」

少し不安がよぎったので私は少し、ひっかかってみた。

「私も梨南ちゃんと本当に長い間友だちでいたけれど、信頼する人に対して素直なのよ。でも一度裏切られたらとことんうらみ続けるタイプなの。立村先輩のことをたぶん、一年のうちは大切な人だと思っていたかもしれない、でも、去年の評議委員長をめぐるごたごたがきっかけで縁きりされたはずよ」

「でも、結構今は仲良しみたいけど」

渋谷さんはきょとんとした顔で答えた。

「昨日だって連れ立って、駅前のデパートでデートしていたわよ」

「うそ！」

後ろの誰かが振り向いた。慌ててふたり、指を唇にあてて「しーしーしー」と三回。

「驚くのも無理ないわ、佐賀さん。この一週間ずっとよ。三年の先輩が話していたけど、とにかく授業が終わるやいなやすぐ、E組に張り付いて杉本さんのご機嫌取りしているんだって。それもほとんどずっと。評議委員会って今の時期、暇だとは思えないんだけど」

「ううん、暇よ。今の時期はまだ」

健吾が先輩たちから聞いたところによると、生徒会役員改選が行われる時期というのは行事も一段落していることもあってわりかし暇なのだそう。だから部活動に所属している委員たちはみな、スケジュールをあわせて新人戦とかいろいろな大会に出るのだそう。もちろん委員長とかそのクラスの人たちは別らしい。立村先輩はあれでも評議委員長なのだから、ひまだとは考えられないけれども、たぶん、梨南ちゃんと一緒にいたがる程度には、時間が空いているのだろう。

「それに、今渋谷さんが話してくれたことと合わせれば、そうかもしれないなって思うの。天羽先輩や轟先輩が他のことを片付けてくれれば、たぶん立村先輩ひとりで準備するよりは早くすむだろうし」

「さすが、鋭いわ。佐賀さん、すごい」

私に珍しく、ほっこりした笑顔を見せてくれた。いつも少し冷たげな瞳で振舞う渋谷さんだけど、たまにこんな甘い顔をしてくれる。そういえばいつだったかテディベアを抱きしめて「これ欲しいなあ」と微笑んでいた時も、こんな瞳をしていたような気がする。

「でも、私、自分の目で見てみないと正直なところ、信じられないわ。あの梨南ちゃんがデートだなんて」

あの関崎さんへの気持ちが揺らいだのだろうか。それだったらそれでいいことだけど。私には佐川さんに報告する義務がある。確認したい。

腕時計の文字盤に渋谷さんはさらっと目を落とし、

「たぶん今の時間帯だったらいると思うな。E組あたりで王子さまがお姫さまのお迎えをしているかもしれないわよ。私、これから生徒会室に行くから付き合えないけど、もしよかったらっそり覗いてみたら？」

ずいぶん自信たっぷり。知りたい気持ちの方が先に立った。頷き、私は渋谷さんへ手を振り、一階へと降りた。

E組……元の教師研修室……の前を通り過ぎたけれども、誰もいなかった。なあんだ、やっぱり噂だけじゃないのかな。

私の知る限り、他の生徒たちが立村先輩と梨南ちゃんの噂をしているところを見たことがなかった。渋谷さんがどこでその情報を仕入れたのか気になるところだけでも、もし本当のことだとしたらどうなるだろう。立村先輩は梨南ちゃんのためならなんでもする人だ。梨南ちゃんが嫌がるが、とことん守ろうとする人だ。

しばらくふらふらと一階をうろついてみたけど、やっぱりやめた。

あまり遅く残っていると、健吾にまた叱られる。

「そんな暇があるならどうして体育館にこねえんだ！」とか言われそう。

玄関から見上げた空は真っ青で、風がほんの少しだけ冷たく刺さった。
遠くを眺めると、ほんの少しだけ黄色みを帯びた葉がぼろりと落ちていた。
まだほとんどは緑のままだけど、だんだんきみどりっぽい色合いに染まっている。
——こんな日は、銀杏も見て帰ろうかな。
気まぐれに足を向けようとした時だった。

「ハルー！」

いきなり背中から声がかかった。脳天突き抜けるような、空に一番近い声。

「やっぱりここにいたんだあ。よかった！　ね、ハル、今、大丈夫？」

風鈴ふりふり頭の風見さんが、砂利をすごい勢いで蹴りながら飛び込んできた。

とっくに帰ったんじゃないのか？　ほんの少し気が重くなりそうで、慌てて空を眺めた。
笑顔を取り戻し、さて振り返る。

「風見さん、びっくりしたわ」

「たぶんここで待ってたらくるよねって思ってたんだ。ごめん、ほんの少しだけいいかなあ」

相変わらず何も考えていない無邪気なおしゃべりが続くのだろう。

私も合わせればいい。

そんなことを想像していたのに、もう一度振り返った時の風見さんの表情は一気にはや代わりしていた。信じられなかった、こんなこと。

「ナミーのことで、お願いがあるの」

きちっと形を整えた風鈴髪がすとんと重みを持って下りている。

まじめな瞳がどうしてかわかんないけど、似合っていた。

私が見たいと思っていたのを勘付いていたとは思えない。でも風見さんの足はすっすと銀杏の木の下へと向かっていた。やはり青すぎる空を見上げているうちにすかっとしたくなったのだろうか。

「さっきまで、ナミーと話、してたよね」

「ええ」

「ナミー、大丈夫だったかなあ」

大丈夫？　何か違う質問を投げかけられたみたいでどきっとした。

私が予想していたのとは違う。渋谷さんが陰で風見さんに言いたい放題言っていたのを私は知っているから、もしかしたら悪口言われているかどうかの確認かと思っていた。

何にも気付かない風に、風見さんはひとりで頷いた。

「ナミー、強く見せようとしてるけど、本当はすごく、気が弱いんだ。生徒会でたったひとり、がんばっているけど、やっぱりつらいんだと思うんだあ」

「強く見せようとしているというより、強い人だと思うけど」

「うん、そうだよ、そうだよ。そう見えるよね」

またこくこくこく、繰り返した。

「ナミーはなんでもしゃきしゃきってやっちゃう子なんだ。だからね、ひとりでなんでも背負い込んじゃうの。それでいつも貧乏くじ引いちゃうんだ。せっかく生徒会が自分の居心地いい場所になりそうな時にね、あんなことがあってね」

「あんなことって？」

すぐに思い当たった。ああそう、梨南ちゃんのことか。

「男子の先輩って、ナミータイプをあまり好きじゃないみたいなんだ。今度立候補しようとしている馬鹿な女子とは違って、しっかり周りに気遣いできる子だから表立っては嫌われていないんだけど、やっぱり目の上のたんこぶみたいなんだ。特に今の会長がね」

「藤沖会長が？」

「そう、あの馬鹿評議委員長と仲がいいし、評議委員会との話し合いものったりくったりと進めて満足しているみたいだし。ほんとはさっさと大政奉還させて、ただの委員会扱いしろってナミーたちは思っているんだけど、会長がどうしてもうんといわないし」

「男子でないと会長になれないところなのね」

このくらいなら呟いてもいいだろう。素直に頷いた。

「そうそう。そうなのさなの。けどそれはそれでいいと思うんだ。霧島くんが生徒会に入ってくればナミーも嬉しいと思うんだ。けど、もしあの馬鹿女が入ったりしたら、せっかくナミーの居場所が出来たというのに、あっという間に地獄になっちゃう。ナミーと霧島くんが本当にやりたいことを、全部邪魔されて、ぼろぼろにされちゃう」

風見さんは立ち止まった。気付くとそこは、銀杏の木の下だった。見上げると空が枝の隙間からちぎり絵模様のように散らばり、かすかに天ちかくの部分が黄葉しているように見えた。草のほこりっぽい匂いがかすかにする。風見さんは片手を幹にしっかりとくっつけて、一度「わあっ！」と叫んだ。誰もいなくてよかった。

「ハル、生徒会役員選挙、明日締め切りだって知ってる？」

「知ってるわ」

短く答えた。何を聞こうとするのだろう。

「今ね、調べてみたら副会長ふたり分と書記ひとり分のポストが空いてるらしいんだ。会長は黙っててもたぶん、霧島くんが入るらしいけど、副会長にあの杉本って馬鹿女子がきたらしゃれにならないよねえ。書記だって困るよ。なんとしても、信任投票一発当選で終わらせたいんって気持ち、ナミーにはあると思うんだ。だから、ねえ」

言葉を継ぎかけ、私をちらと見た。頷いた。

「ハルなら、ナミーを守ってあげられると思うんだ。私、初めてハルに会った時からそう思ってたんだ」

「どういうこと？」

「生徒会役員に立候補してほしいんだ。どうしても！」

——もしかしてこれは、渋谷さんと風見さんとの二重攻撃なのかしら。

疑わずにはいられなかった。陰でなんと言っているように、このふたりは小学時代から親友な

のだ。私を無理やり生徒会に押し込むために何かたくらんでいるのだろうか。裏を読みたくはないけれども、やはり用心してしまう。佐川さんがいたらなんて言うだろう。どうして佐川さんは手紙をくれないの。風が冷たい。

「でも、私何も知らないし、生徒会にかかわったことなんてないのよ」

「大丈夫、ハルならナミーを守ってあげられるもん。ナミー、何でも私に言ってくれたらいいんだけど、きっと私じゃものたりないんだね。だめみたいなんだ。いつも笑顔でごまかそうとするんだ。けど、ハルにだったらきっとナミー、言いたいこと言えると思うんだ。もしかしてあの馬鹿女が入り込んできても、ハルだったら追っ払えると思うんだ」

「私無理よ、梨南ちゃんにやりかえされるかもしれないし」

「そんなことない！ だって、ナミーはハルにだけあんなふうにくたりでおしゃべりしたがるんだよ！ それってすごいことなんだよ！」

別に、風見さんへの悪口を言いたい放題ってだけのようないきもするけれど。

足元の枯草がしゃかしゃか鳴った。風見さんの早口ことばに近いくらいに。

「だって風見さんは渋谷さんの親友なんですよ。私、そこまで深い話してないし」

「そんなことないのいないの！」

また甲高い声で絶叫する風見さん。しつこいようだけど、ほんと人のいないところでよかった

。

「私、ナミーとハルのためだったら、どんなことでもしたいんだもん！ 理屈じゃないもん」

「なぜ？」

「だって、ふたりが元気だったら、私、それだけでうれしいんだもん！ 理屈じゃないもん！」

確かに、理屈じゃない理由だった。私にはどう判断すればいいかわからなかった。どうしてこういうわけのわからないことを言うのだろうか。あと一日、佐川さんからの手紙を待ちたかった。明日、立候補すべきか否か、最後の決断を佐川さんに下してほしかった。もしそれで苦しい思いをしても、それは覚悟している。でも、佐川さんが何も言わないままでこのまま進むのは怖い。たった一人、自分が踏みつけられて、足元の枯葉のようにくしゃくしゃになりそう。

逃げたかった。だから尋ねた。

「少し考えさせて。それでひとつ聞きたいんだけど、いい？」

「なあに？」

また風鈴頭をふりふりさせて、いつもの何も考えていないような表情で風見さんが答えた。

「風見さん、知ってる？ 評議委員長と梨南ちゃんが仲良く帰っているって話」

ここまで生徒会事情を知っている風見さんだったら、もしかしたら気付いているかもしれない。そう読んだだけのことだった。

「もしそうだったら、私も安心して立候補できるのだけど」

「え？ ハル？ やっぱりその気になってくれた？」

「梨南ちゃんが生徒会に入らないという前提でなら」

風見さんの細い目が思いっきりほころんだ。

「それが条件？ わかった、それなら私、なんとかする！ 絶対ね！ 親友のためならなんでも

するって言ってるでしょ！」

「なんとかするとと言われても」

しようがないではないか。そういい返したいところだけど、また一気に駆け出す風見さんを私は追いかけるしかなかった。しゃかしゃかしゃか、足に絡まる枯草を蹴飛ばし、その煙でくしゃみをしそうになりながら私も走った。どこへ行こうとするのだろう。

わざわざ遠回りしなくてもいいのに。生徒玄関にたどり着くや否や、風見さんは私に片手で「おいでおいで」をした。

「さっき、中庭にね、ふたり仲良く座って語り合ってたようすだったのは覚えてたんだ。あんなに堂々と、いちゃいちゃするなんて、相当なものじゃない？」

「いちゃいちゃってどういうこと？」

「だから、ふたりで人目につくような行動してるってこと！」

それは私も人のこと言えないので黙っていた。まず中庭入り口を眺めやると、黒い大きな石の陰に誰かが潜んでいるのが見えた。他にも女子チームや男子チームがそれぞれたむろっているので、それほど目だつことはない。実際カップルも多かった。でもその中で、明らかに異彩を放っている雰囲気だったのが、その石陰に座っているふたりだった。

「あそこに、いたの？」

「私も驚いたわよ！ ドリちゃんびっくりって感じ」

両手をほったのところにべたつくっつけてぶるぶる震えて見せた後、風見さんはまたこくと頷いた。背を翻して今度は一年廊下へと走り出した。すれ違う人がそれほどいないのがかえって緊張しそうだった。声を潜めて風見さんが一度しゃがみこみ、私が真似するのと同時に立ち上がり、

「ほら、見て！ 見て！」

小さな声で耳打ちしてくれた。

一年C組の窓がちょうど空いていた。そこからちょうど見下ろすことができる場所。ちょっとしたクッション椅子くらいはある石が三個、コの字型に組み合わさっている。途中のくぼんだ部分をよく椅子代わりにして、おしゃべりする場所として使っていた。

「まさか」

私の思わず洩れたつぶやきを、また「しーしーしー！」と声出さずに風見さんは押さえた。

梨南ちゃんと立村先輩がふたり、並んで座っていた。

空いている窓からその声は、はっきりと聞こえる距離だった。

「これから、『おちうど』に行くか？」

「私はやらねばならない用事があるのです」

梨南ちゃんの相変わらず抑揚のない、一本調子の声が響く。

「先輩には関係のないことです。いいかげん解放していただけませんか」

「杉本、昨日約束しただろ？ 今日是一緒にどこかいこうってさ。杉本も頷いただろ」

梨南ちゃん、言葉に詰っていた。約束はどんなに理不尽なものであっても破らない、それが梨南ちゃんの主義だった。立村先輩の口調は穏やかだった。

「でも昨日十分私はお付き合いしたではないですか。デパートの食器展は楽しいものでしたが、立村先輩が相手であった分感動が差し引かれました」

側で風見さんが「そうそう、駅前のデパート七階でね、マイセンの食器展が行われているのよ」と私にわからないことをささやいた。どちらにしても梨南ちゃんが好きなものだろう。

「ごめんごめん、けどさ、せっかく招待券もらったしさ。今日は無理やりつき合わせてしまったお礼に、あんみつでもご馳走できればなと思った次第なんだ」

「先輩、暇ですね。評議委員長ともあろうお方が、なぜこんなに暇にいるんですか」

「今の時期は中間テストも終わったし、学内推薦も片付いたし、だいぶ楽なんだ」

そうか、そろそろ高校へ進むための学内推薦の時期だったんだ。すっかり忘れていた。来年は私たちの番なのに。ここで風見さんも同じことを思ったのか、

「ハルは普通科？ 英語科？」

「普通科にきまっているわ」

「あーよかった！ 一緒のクラスになれるかも！」

関係ないことで顔き合ってしまった。

「だから、今からゆっくり行こうか。ほら、ひさびさに花森さんの話もうちの親から聞いてきたしさ」

ここで一瞬、梨南ちゃんがうつむいた。横顔がちらと覗いた。クラスで確か、芸者さんになるために学校を辞めた花森なつめさんのことだろう。詳しい事情は知らないけれど、立村先輩の知り合いらしいということは聞いていた。私とけんかして以来唯一の友だちだった人。梨南ちゃんなら、きっとその話、聞きたいだろう。

「どうしてですか」

また、ぼそっと答えた。してやったりとばかり、立村先輩は畳み掛ける。

「だから、その話を『おちうど』でしようって言ってるんだけどさ」

「先輩、私なんかになぜそんなしつこく張り付くのでしょうか？ 立村先輩がお暇で、時間を持て余しているのはよくわかりました。私の数学能力を買って勉強を教えてほしいというのであれば、授業の合間にいくらでも教えます。ですが放課後、少しここまでしつこくするのは、女子に対しても失礼ではありませんか、一種の変態とも申します」

笑いをこらえるのが私も、風見さんもつらそうだ。風鈴頭を必死に振っている。

目の前の梨南ちゃんもこくこくと、長いポニーテールの先をちろちろ揺らしている。

「変態、とまで言うかな、まあ、それも杉本らしくていいけどさ」

「なによりも、先輩、もっと大切なことをお忘れではないのでしょうか。そんなにお暇でしたら、立村先輩は清坂先輩にもっと尽くしてあげるべきではないのですか。立村先輩のように頭が悪くて顔も不細工な男子に、あれだけ一生懸命尽くしてくださる方に対して、失礼すぎるのではないのでしょうか。何よりも、清坂先輩が誤解して泣いてしまわれたら、私の立つ瀬がございません」

古臭い言葉の羅列。「尽くす」なんて。「立つ瀬がない」なんて。

「やはり、何か違うよね」

風見さんに答えようとした瞬間、凍りついた私の舌。

「清坂さんとはもう話が終わっている。俺は杉本と一緒にいたいから、こうしている。それだけだよ、杉本」

ごくさりりと、表情も崩れず答えた言葉だった。

隣で風見さんが何も言わず、呆然と黒い石のふたりを見つめているのを感じた。

お互い、こうやって近くにいると、驚きが二倍になって伝わってくる。

ふたりの斜めに腰掛けた姿とその横顔に私はただ、くぎ付けのままだった。

「何をふざけたこと言っているんですか。それよりも、花森さんのことですか」

「そう、一緒に行ってくれるなら話すよ」

「本当に、今回だけです。花森さんの話が終わったら私はお金を払い帰ります」

「だから、俺がおごりたいて言ってるだろ？」

梨南ちゃんはああやっておとなしく、E組で座っていれば、ほしいものが何でも手に入る。

私も、先生たちも、みなそれを知っている。

生徒会や評議委員会で惨めな思いをしなくても、私に八つ当たりしなくても、健吾を罵ったりしなくても、本当に大切にしてくれる人がいてくれる。

無理やりタルタルソースのついたキスをされたり胸をぎゅっと捕まれたりしなくてもいい、どんなにわがまま言っても嫌われるようなことしても、そのままの梨南ちゃんでもいいと言ってくれる。困った時には一週間近くも返事をおっぼりだされしないで、ずっと側にいたいと言ってくれる。

小首を傾げるように梨南ちゃんの顔を見つめて、にこにこしている立村先輩の姿に私は見とれていた。清坂先輩の側にいる時はいつも顔色ばかりうかがっていて、他の男子先輩たちに比べて小さく見えた人だった。評議委員会の壇上でも、私より年下にしか見えず後輩から馬鹿にされるのも当然と思える人だった。だけど、梨南ちゃんの側ではっきり言い切った立村先輩は、その瞬間に限って、健吾よりも、佐川さんよりも男らしかった。

梨南ちゃんは、全校生徒から昼行灯と馬鹿にされた評議委員長を、一瞬のうちに王子さまに見せてしまう、そんな力を持っているたったひとりの人だって、どうして気付かないのだろう。ほんとは、それだけで十分なのに。E組でずっと立村先輩に言いたいこと言って甘えてもいいと言ってくれる、たったひとりの人がいる。それだけで本当は十分じゃない。

梨南ちゃんをふたたび生徒会および委員会に関係させることは、せつかく梨南ちゃんが手に入れた本物の想いを、どぶに捨てさせることになる。

もう嫌われてしまった友だち、もう私にとってはどうでもいい人だけど。

でも、七年間一緒に過ごした者として、それだけは伝えたい。

——梨南ちゃんには、小学校の頃、秋葉くんがいたでしょう。

——今の梨南ちゃんには、立村先輩が側にいる。

——だから、それで十分満足して。

——生徒会に立候補しても、みんなが傷つくだけ。

私は思いっきり首を振った。耳に挙げたまるい編み込みが片方解けた。

——梨南ちゃんを、どんなことがあっても、生徒会に立候補させちゃ、いけないわ

もうこれ以上見つめつづけると、私たちが見つかる恐れがある。私は音を立てずに立ち上がり、風見さんに合図した。風見さんも大きく頷き返してくれた。

「今、馬鹿評議委員長の言葉、聞いた？」

「うん」

窓を軽蔑するかのようになめつけた後、風見さんは衿を直すしぐさをして、ゆっくりと呟いた。

「つまり、清坂先輩と、別れたってことよねえ」

「話が終わっている、ということはたぶん」

「杉本さんと一緒にいたい、って言ってたねえ」

「うん、そう言ってた」

返事するどころかが麻痺しているみたいだった。単純な受け答えしかできなかった。

「あのふたり、お似合いだと思わない？ 学校祭の時、少し変な男子がまとわりついていた時もある、双子ちゃんねえとか思ったけど、ほんとあの時と同じ、そっくり。ああいう風に同じところで、同じ風に、してるだけだったらいくらでも無視してられるのにねえ」

私の返事を待たずに、風見さんはゆっくりと靴を履いた。

「今まで清坂先輩に迷惑かけるかな、とか思ってたんだけど、もう大丈夫ってことよね。ハル。私ね、絶対、ナミーとハルがにっこり笑ってられること、するからね！ だから、ハル、絶対絶対、安心して生徒会に立候補して！」

答えは出ていた。けど、答えはしなかった。

だって佐川さんの声が聞こえない。

遅刻するぎりぎりの時刻まで郵便受けを覗いていた。

佐川さんの手紙はこなかった。

——私を助けてくれないんですか。

青大附中と水鳥中学まで走って捕まえたかった。

すがり付いて答えを聞いたかった。

そんなことできるわけもなく、立候補申し込み最終日、私は学校へと向かった。

台風が今夜上陸すると、行きがけのテレビニュースで流れていた。

どんどんめちゃめちゃに降ればいい。駅前なんか水浸しになればいい。

私が泣いてるって佐川さん、やっと気付くだろうから。

「ハルー！ おはよっ！」

昨日のまじめな顔なんてどこへやら、風見さんが廊下で私を捕まえた。

「おはよう、どうしたの」

「どうしたのってえ、やっぱり今日とうとう、決戦の時じゃない！ ハル、わかってるよね。放課後になったらすぐに生徒会室へダッシュするのよ！ ナミーも待機してるはずよ」

「うん、でも」

どうしろというのだろう？

「だかあらあ、ハル、一緒に立候補するでしょ？」

もちろん、決めたことだけど、まだ決まっていない。私はあいまいに頷き微笑み返した。

「でも、どちらがいいのかわからないの」

「立候補？ 書記？ 副会長？ それとも会長？」

「会長なわけないわ」

言葉に出してみても、思わず首を傾げた。「書記」にしても、「副会長」にしても、「会長」にしても、どれも私にはぴんとこなかった。「生徒会書記の佐賀さん」「佐賀副会長」それとも「佐賀生徒会長」？ どこにも私の居場所はなさそうに見えた。

「でも、選択肢はみっつあるのよね、ハル、いい？ ぎりぎりまで迷っていいけど、絶対、絶対、立候補してね！」

「ぎりぎり？」

言い方が少しひっかかった。風見さんは私が最初思っていたよりも、かなり頭の回転が速い人なのではと感じていたけれども、まだつかめないところがある。ある意味、渋谷さんよりもわかりづらい人かもしれなかった。いつものかっちりブローした風鈴髪を細かく揺らしながら、指をくわえて細めで笑っている。

「そ、ぎりぎりまでどれがいいか考えていいと思うんだ。ナミーも今、かなり悩んでるはずだもん」

「悩むといってももう決まってるでしょう？」

生徒会長を狙いたくても狙えない立場の渋谷さんのことだ。副会長以外考えられないはずだ。

そんな思い込みを覆すように、風見さんはぼろっと気になる言葉を口にした。

「私、ナミーには副会長になってほしいんだ」

「じゃあ私、やはり」

書記に？ そう尋ね返そうとした。やはりなじめない「書記」の言葉と立場。

「ま、あとで説明するね。ナミーにばれるとまた『親友やめる！』っていわれちゃうもん！」

あのしょうもない風見さんが、と笑うには、あまりにも意味ありげな言葉の羅列だった。まだ思い切れそうにない。佐川さんがここにいて話を聞いてくれたら、きっとどうしたらいいか教えてくれるはずなのに。

ふと、すれ違った他クラスの女子の髪が軽く肩にぶつかった。お下げ髪だった。

ごめんねも言わなかった。

——一言くらい、あったっていいのに。

珍しく気が立った。

私が何を考えているかわからないであろう、健吾が脇の机で落書きをしている。

健吾くらい成績がよいと、授業を真剣に聞かなくても結構楽に点数が取れてしまうみたいだった。このまえの中間試験も、梨南ちゃんを抜かした計算でいくと学年トップの数字だったという。梨南ちゃんがどんな成績だったのかは知らないけれども、なんだかまだ越えているとは思えない。健吾もそのあたりは気付いているはずだと思っている。

そっと横目で覗いてみる。理科のノート脇には、丸をたくさん書いて矢印をx、横線、斜めといった風書き込んでいる。なんのことだか最初わからなかったけど、見ているうちにだいたい見当がついた。きっと、バスケのポジションかなにかだ。土曜の試合で負けたから、新しいポジション取りなどを考えているのだろう。

私が相談する隙間なんてないだろう。今の健吾には。

生徒会改選が終わるまでの短い間しか、部活動に専念する時間が健吾にはない。

終わったらすぐに、後期委員の選出がホームルームで行われ、おそらく自動的に健吾と私は評議委員へ再選されるだろう。最後の半年、よほどのことがない限り、変わらない現実だ。

もともと、それは絶対ではない。ないけれど、今のところ取り立てて問題が起こる気配はない。私が波風を起こささえしなければ。

——私がもし立候補したら？

あわてて健吾から目をそらした。私はあまり成績いい方でないから、健吾みたいにいたずら書きなんてしてられない。先生の眠そうな声を聞き流しながら、必死にノートを写した。

——もう健吾と評議委員はできない。

梨南ちゃんから奪い取る形で得た評議委員の座だけど、いざ自分がその場所に座ってみると、なんだか弟の面倒を見ている時とおなじような気分になる。お砂場遊びも超合金ロボットを合体させるのも、どれもすべてがばかなかしく見える。夢中になり突撃してくる弟の相手をしていると、どうしようもなく疲れる。それと同じものを健吾に感じていた。

——だったら今度、評議委員誰になるんだろう？

思いを巡らせた。E組にまわされた梨南ちゃんが戻ってくることは十中八九ないだろう。

だったら同じだ。誰がなっても、しょせん評議委員は変わらない。

三年の先輩たちはみな、評議委員会を守ることに必死だけど、私たち二年生が答えを出すのはきっと、

「誰が評議委員になったって、すべきことはいっしょ」

それだけだろう。これから先、生徒会にすべての権限が移ったあとは、指示を出すのもみな生徒会長でありまたその役員たち。指示されたことをこなすのが評議委員会を始めとした委員会集団の役目。

——健吾、ごめんなさい。

私は一呼吸置いて、一言「ごめんね」とノートに書き込んだ。

健吾に見せる気はない。すぐにシャープで塗りつぶした。

——ものすごく怒るだろうな。

今のうちに、心の準備をしておこう。どう言い訳しようか。健吾のことだ。突き飛ばされるかもしれない。ひっぱたかれるかもしれない。もしかしたら押し倒されるかもしれない。

——押し倒される？

何を想像していたのだろう。自然と頬が熱くなる。

ここ最近、健吾が私にする行為のひとつひとつに、なぜか嫌悪を覚えている。

今までこんなことなかったというのに。

もちろん、一年の時に初めてキスを経験していたけれども、これほどまでではなかった。負け試合の後や、評議委員会で少しもめた後、ふたりきりの闇にまぎれて、いきなり抱きすくめられる時がある。最初はきっと私を求めてくれているのだと思って素直に受け入れていたけれど、最近は中学生の範疇を越えるような部分を……たとえば胸とか……触れてこようとする。もちろん意識して避けるようにはしているけれども、時々ふたりっきりになるのが怖くなる。匂いもだんだんあぶらっぽくなってきた。

健吾が何を求めているのか、わかるようでわからない。

私がしてほしいのは、たった今、生徒会に立候補すべきか否か、それをはっきりと決めてくれて、そっと隣り合って肩に触れるぬくもりだけで、にっこりしている人だった。一緒にいて、私が選択肢を選べない時に笑顔で支えてくれる人だった。

佐川さんのように健吾がしてくれたら、どんなにか。

あの人はまだ、生臭い匂いがちっともしなかった。どんなにくっついて、そうだった。

——私が欲しいのは、そなんじゃないのに、健吾。

心の中で問い掛けてみる。相変わらずポジション研究に余念のない健吾を、もう一度横目で見る。

——梨南ちゃんは贅沢よ。あんなにやさしく立村先輩が好きだって言ってくれてるのに、なんで満足しないのかしら。秋葉くんの時だってそうだったわ。梨南ちゃんはそのふたりが一番ふさわしいのに。健吾のこと思っている、もし私のようにあんな風に、胸を捕まれたり、脂臭い舌

を口の中に入れられたりしたら、嬉しい？ 梨南ちゃん、下品な男子は嫌いなんですよ？ すぐに手の届く人なんだもの、どうして妥協しないの？

ふつつつと、忘れかけていた泡立つものが湧いてきた。

——私なんて、手が届かないのよ。梨南ちゃんみたいに！

今までずっと、梨南ちゃんは私の持っているものを欲しがっていると思ってきた。手に入り用がないものばかりねだっているように見えた。でも、昨日確かに耳にした、立村先輩の言葉は、私が欲しいものだった。すぐ側で、理想の形で思ってくれて、いやらしい視線もなにもない、やさしい瞳。それだけでいい、どうすればいいかを指し示してくれる人が欲しかった。今の私にはべたべたした暑苦しさ、放りだされた寂しさがぐるっと取り囲んでいるだけだった。

もうE組に行って梨南ちゃんを覗き込む必要もない。他の人たちも生徒会選挙そのものには関心があるけれども、立候補者が揃うまではまだどうでもいいというスタンスを崩さなかった。締め切られてから、の話だ。クラスの話にも上がっていない。桧山先生がさりげなく、立候補締め切りのお知らせを帰りの会で口にただけだった。健吾よりも一秒早く私は立ち上がり、礼をした。扉へ急いだ。健吾がかたく私の肩に手をかけた。

「おい、佐賀、どうしたんだ」

「ちょっと用事あるの、先に帰ってていいわ」

さらっと手が落ちるように首と肩を降った。どうせバスケ部の練習があるのだろうし、それ以上説明する気はなかった。だって納得なんてさせられない。健吾は自分の都合いいことしか納得しようとしなないもの。

「ちょっと待てよ、おい」

聞こえないふりをして、私は生徒会室へと向かった。

二階の階段を昇る途中で渋谷さんと風見さんがふたり一緒に私を追いかけてきた。両脇から、私をはさむような格好になった。

「佐賀さん、来てくれるのね」

渋谷さんが耳元にささやいた。

「ハルー！ 今日最後までお付き合いよっ！」

相変わらず脳天に響き渡るような声で、話し掛けるのは風見さんだった。

どちらも、何に立候補するのかまでは問わなかった。助かった。ぎりぎりまで言葉を飲み込んでおけるから。

生徒会室に、副会長の渋谷さんから足を踏み入れた。

すでにたくさんの生徒たちが集まっている。満員御礼の垂れ幕が下がりそうなほどだった。もう椅子に座る余裕はない。座っているのは藤沖生徒会長と霧島くん、そして他の男子数人だった。生徒会役員の人たちばかりだった。立って壁にもたれたり、紙をいじったりしているのは女子たちだけだった。やはりこういうところでなにげなく、男尊女卑の思想が根付いているのだと感じた。

「とりあえず、これ、渡しておくわ」

「ありがとう」

渋谷さんは前髪の根元を少し持ち上げる格好でヘアバンドをしていた。額がまるくでて、いっそう顔立ちが際立っている。りりしい、というには女子っぽいふくらみがほっぺたに残っている。ちらと霧島くんが私たち三人に視線を向けた。あごでしゃくるような挨拶を送ってきた。むっとした様子の渋谷さんに後ろの風見さんは、

「ナミー、がまん、がまんよ」

肩をぽんぽん叩き、無邪気に笑みを浮かべていた。渋谷さんとしてはどちらにしてもかなり気分はよくなかったみたいだけど、風見さんときたらそんなのどうでもいって顔していた。

私は手元に届いた「立候補受付用紙」をじっと見つめた。

昨日風見さんが話してくれた通り、今のところ持ち上がり生徒会役員数人を除き、ふたり分のポジションが空いている計算となる。厳密には生徒会長をふくめた三人分。

青大附中の生徒会では、性別でポストを分け合うということがなく、男子だけ、女子だけ、という形でも全く問題がない。たまたま去年は男女半々となったけれども、別の年には男子のみの執行部という時期もあったのだという。今年はもしかしたら女子の方が比率として高くなるかもしれないといわれているけれども、生徒会長のみ男子であればプライド保つことができるはずだった。それゆえの、霧島くん立候補だろう。

生徒会長が埋まり、あとは副会長か、それとも書記か。

——必然的に、私は書記なのね。

心でまだ納得できないものを感じていた。書記の仕事というと、ノートを取りつづけることしかイメージがわからない。なんとなく評議委員会と同じ仕事のように思えた。

——それで、渋谷さんが副会長なのね。

本当は会長になりたいだろうけれど、無理に波風立てる必要もない。渋谷さんはしばらく紙をひらひらさせていたが、藤沖会長のもとに駆け寄って行って、何か話し掛けていた。何を話しているかは聞こえない。私は隣にいる風見さんと目を合わせた。

「今ね、ナミー、あと三十分、守りきれんかってこと、相談してるんだよ、きっと！」

ひそひそ声で風見さんが答えた。

「心臓ぱくぱく言ってると思うなあ。でも大丈夫。見てて。私ちゃーんと、ナミーを守るもんね」

「守るってどういうこと？」

昨日から風見さんの言葉が妙にひっかかっていた。

「ドリにはね、とっておきの魔法があるのよ。まかせといて！」

風見さん、自分のことを「ドリ」と呼ぶのはなんだか間抜け。

「風見鶏」のドリちゃんって、決して名誉ある名前じゃないと思うのだけど。

このまま書記立候補記入欄に「佐賀はるみ」と名を入れれば、それですべて終わるはずだ。同

時に渋谷さんが「副会長」に、霧島くんが「会長」に登録すれば丸く収まるはず。でもなんでみな、その話に触れようとしないのだろう。他の男女関係者はみな、ちろちろと戸口の方を眺めては不安そうに顔を見合わせている。

渋谷さんの側でもうひとり、確か会計係だという女子がまくし立てている。名前、忘れてた。あまり印象深いタイプの人じゃなかったからかもしれない。声がとんがっていた。

「大丈夫？ 本当に大丈夫なんですか？ 会長」

「ああ、立村がその点はなんとかするって言ってるしなあ」

受け答える藤沖会長に、不安みたいなのは感じられなかった。やっぱり男子かな。

そこに割り込んだのが、やはり渋谷さんだった。両脇の髪の毛を風見さんっぽくぷるぷる震わせ、机を指先で数回叩いた。

「そのんきなこと言っていていいんですか！ 最後の最後でどんでん返しされたら大変ですよ。会長、責任取れますか！」

「取るもなにも、あと十分もすれば締め切りだろ。渋谷さんも早く書いて出せよ」

「ええ、わかっています、でも」

歯切れが悪かった。渋谷さんは反対側の角でいらいらして机をはじいている霧島くんちらちらと視線を投げた。たまに視線が重なるのだが、かなり霧島くんご機嫌斜めとあって、ろくに口も利かなかった。手元には申し込み用紙がそのまま伏せてある。まだ提出していないのだろう。ということは、私も渋谷さんも霧島くんも申し込みをしていない。三人分のポストは空いている計算となる。

「ハル、準備したほうがいいんじゃないの」

「うん、わかった」

ちびた鉛筆を一本借りて、書き込もうと思った。でもやはり「書記」というのがひっかかってしまう。もし当選したとしても、することが評議委員と変わらないのなら、つまらない。書記という仕事が想像つかないだけかもしれないけれど、なんだか抵抗あり。一度書いて、すぐ消しゴムで消した。最後の一分で書き込んで渡せば、それでいいんだもの。もう少しだけ迷おう。

いきなり引き戸がぎゅっと引かれた。

見知らぬ男子だった。

「全員、戦闘準備に入れ！」

——戦闘準備？

戸惑う中、生徒会室にいる全員が立ち上がり、スクラムを組むような格好で中腰になった。私は片手に鉛筆と申し込み用紙を握り締め、壁に張り付いた。話の流れから言って、おそらく生徒会室の人たちが誰を迎え撃つのかは、想像がついていた。

「失礼します」

勢い良く走り込もうとしたのは、やはり梨南ちゃんだった。

髪の毛を高くポニーテールにし、真っ黒いリボンを大きく結んで、真正面を見つめていた。その後ろにしつこく張り付いている人も一緒に飛び込んできた。一瞬たりとも離れようとしない。

変なところで感心した。

「杉本、やめろ！ こっちに來い！」

立村先輩がおなかから出る声で怒鳴っているのを、初めて聞いた。

敷居すれすれで梨南ちゃんが立ち止まり、九十度方向を変えて立村先輩に向かい合った。

「いいかげんにしてください。私にしつこく付きまとうのは一種の犯罪です」

「だからもうやめろって言っただろう、杉本はこっちにいる方が絶対にいいんだ」

「要するにこうやって私がやろうとすることを、先輩は邪魔しようとするのですね」

いつものような棒読みの言い方。私はなれているけれども、他の人たちは生の梨南ちゃんをじっくり眺めるのが初めての様子だった。隣で黙って見据えている風見さんがいる。

「時間がありません。消えてください」

「だから入るなって言ってるだろう」

立村先輩が両手で梨南ちゃんの右腕を引っ張った。これって一步間違うと、梨南ちゃんじゃないけど「一種の犯罪」になってしまうのではないか。転ばせるほどではなかったようだけど、振り払いはしなかった。

「立村先輩、どうしてそんなに私が立候補するのを止めようとするのですか。私だけではなく、先生たちも高く評価してくれたからこそ、私は」

「違うんだ、だからこっちこい。説明してやるから」

「時間がなくなります。あと十分ありますね。失礼します」

「だから話を聞けよ」

もう立村先輩の顔は頬にうっすらと赤みがさしていた。色白だから真赤、ではない。すうっとおしろいと頬紅をはたいたように見えた。食紅でうっすらと赤が浮き出すおもちのよう。

「時間がないのです、だから離してください。先生を呼びますよ」

「呼びたいなら呼べよ。聞かれて悪いことなんてない。全部説明するよ」

ずいぶん強気だ。最奥席から椅子を引きずって、藤沖会長自ら、ゆっくりと敷居まで足を運んでいた。それを追いかける格好で、渋谷さんが私たちの側へ戻ってきた。私たちの目の前には、やはり不機嫌そうな霧島くんが唇をまげて座っている。

「とにかく、あと八分だけ立村委員長が押さえてくれればいいのよ。私たちもそろそろ書きましようか」

私と霧島くんに向けて、渋谷さんは声を掛けた。ふいっと向こうを向く霧島くんにかがみこむようにして、渋谷さんはもう一度繰り返した。声が堅い。

「早く、書きましよう」

「なんで先輩の言う通りに書かないとまずいんでしょうかね」

ずいぶんとむくれた態度だった。はつとした風に渋谷さんが言葉を投げつけようとした。霧島くんがすぐに畳み掛けた。

「最初の約束と違うんじゃないですか、僕は納得いきませんよ。僕の申し込みたい通りに書きますよ」

「あれだけ言ったじゃない、約束したでしょ」

「横暴ですよ、何が今更、先輩面するんですか。たかが一年しか違わないくせに」

「だってちゃんと約束してくれたじゃない」

いったい何が起こったのだろう。私も慌てて手のひらで「書記」のところに自分の名前を書き込もうとした。うまく掛けなくて所々穴があいてしまった。一刻一刻と締め切り時刻が迫っているというのに、目の前の立候補予定者ふたりは、いきなり言い争いをし始めている。本当に私書記でいいのだろうか。なんだか違う、そんな気がする。

廊下で、藤沖会長が見守るなか「痴話げんか」にも似たやり取りが続く。

そしてここでも。

判断に迷った。一瞬を突いて風見さんが廊下へ飛び出した。

「あんたたち、さっさと消えなさいよ！」

ちょうど藤沖会長に隠れる形で、風見さんの背中は見えなくなっていた。一步足をずらした会長と、ざわめく他の生徒会関係者たち。私は斜め前に渋谷さんたちの口論を、廊下側に梨南ちゃんと立村先輩を罵倒する風見さんの声を両方聴いていた。

人差し指を突きつけて、風見さんのけたたましい叫びが響いた。

「あんた、悪いけど立候補して、勝てると思ってるわけ？ あんた自分が先生に評価されて立候補するつもりでいるだろうけど、大嘘だってことここにいる生徒会関係のみんな知ってるって知らないわけ？ ほーら、やっぱりだまされてるのね。みんな知ってるのよ。あんた以外みんなよ。へたしたら一年だって知ってるわよ」

「何様のつもりかしら」

静かに言い返す梨南ちゃん。それが憤りのきっかけだということを私は知っている。だから緊張するはずなのに、風見さんは微動だにしなかった。立村先輩は押さえた手を離さなかった。

「杉本って言ったわよね、あんた。つくづく思うんだけど、あんたオペラが好きだとか音楽が好きだとか勘違いしたこと言ってるけど、自分の声、一度でも録音して聞いてみたことがある？ とてつもない音痴だってこと、みんな知ってるからあえて知らないふりしているのよね。だからピアノを習おうとしても覚えられなかったんでしょ。有名よ。音程取れないからでしょ？ あの、学校祭にきた男子タイプがあんたにはお似合いなのに、何馬鹿みたいに頭のいい人ばかり追いかけてるんだかって、みんな馬鹿にしてるのよ。それも知らないで可哀想に」

マシンガントークそのもの。トーンが高い、頭に響く。

その合間にも渋谷さんと霧島くんは

「だからなんでいまさら！」

「そっちが横暴だって！」

ひたすら言い合っている。

「この前学校祭で追っかけてくれた男子いるでしょう。ああいう男子だったらいくらでも好き

になってくれるのにねえ。立村程度の相手があんたにはお似合いなのよ。こいつみたいな奴を相手にして、人目につかないところでこっそりいちゃいちゃしてればいいのよ。ハルやナミーや他の人たちの迷惑にならないところでね」

「それは失礼じゃないかしら。私を馬鹿にしているとしか思えない言い方だわ、それにどんなに不細工で頭の悪い先輩であろうとも、一年上である以上は先輩と呼ぶべきよ」

またまっすぐに、感情の籠らない声が響いた。全員固唾を飲んで見守っている。いや、目の前の渋谷さんと霧島くんだけが言い合いを続けている。

「あんた馬鹿ね。先生たちがあんたを立候補させようとした理由、本気で能力を買ってくれたからとおもいこんでるわけ？ あんたの鼻をいいかげん明かしてやるために、落として痛い思いさせて反省させるために決まってるじゃないの。そんなこともわからないわけ？ きっと駒方先生けしかけたんでしょねえ。学校祭の喫茶店やった時みたいに、すごいすごい、あんたしかできないとか言って。悪いけどそんなの、他人に迷惑を掛けさせないようにするためならいくらでも嘘八百言えるのよ。わかってないわね。ほんとにあんた、十四歳？ 病院に行って調べてもらった方がいいんじゃないの？」

すでもう、それ専門の病院に行くよう命令されていることを私は知っている。

そして梨南ちゃんがなんで、ピアノをマスターできなかったかも知っている。

梨南ちゃんは、音程を区別して聞き取ることが苦手だった。自分の耳に聞こえる歌と、他の人たちに伝わっている音とは違うということ、いまだに気付かないでいるってこと、私は小学校の時、お母さんから教えてもらった。

——私、どうすればいいんですか。佐川さん。

想像もしていなかった自体に、私はそっと一步後ろへ下がった。隠れてもそばには、まだ言い合っている渋谷さんと霧島くんがいる。静かに籠ることなんてできない。陰から梨南ちゃんを覗き見つつ、ふたりのやりとりに耳を傾けた。私、ひとりぼっちだった。

梨南ちゃんは唇を尖らせた。立村先輩の手を振り解こうとし、手を払いのけようとした。ふらついた立村先輩を突き飛ばすようにして、今度は風見さんの前に立ちはだかった。要求した。

「時間がないわ、どいて」

「どかないわよ！」

ハエを叩くように思いっきり風見さんは梨南ちゃんの腕を打った。まずいそれ、梨南ちゃんが狂ってしまう。止めなくちゃ。なのに、足が動かない。

「先生たちの狙い通り、悪いけどあんたが立候補した段階で落選確実のシナリオはちゃーんと組まれているってわけ。今、空いているポストはね、書記と副会長だけどそんな人の下に立つようなのいやなんでしょ。わかってるわよ」

「選挙は役員を選ぶために存在するのよ。対抗馬が出てどこが悪いわけ。こんなところで自由な選挙を邪魔して、いんちきをやり遂げようとするなんて、腐っているわ、生徒会」

そのくせ、ちらちらと時計を見る梨南ちゃん。私にまだ気付いていないようすだった。あと四分。私も書かなくちゃいけないのに、目の前のふたりが決着つき そうになくて、まだ迷って

いる。思わず「会長・書記・副会長」すべてに書き込んでしまった。消す暇なかったらどうしよう。

「会長に立候補する？ ふうん、そうなの。勝ち目ある？」

ゆっくりと振り返った風見さんは、言い争う渋谷さんと霧島くんを指差した。あまり迫力のある状態でないのが、説得力ない。

「悪いけど会長候補はね、今のところ一年の霧島くんか、もしだめなら副会長の渋谷ナミーよ。いい、どっちが立候補しても、あんたがぼろ負けするのが目に見えてるわけよ」

「そんなことないわ」

言い切った梨南ちゃん、まっすぐすぎて穴が空きそうな瞳がぎらぎらしている。隣で立村先輩が「杉本、だからやめろ！」そう怒鳴っているのも聞こえない風に。気が付いたのは風見さんの方しかなかった。「そうだ、言っとかなくちゃ」と独り言。

「あんたのことをね、私は先輩だなんて少しも思っていないから、隠したいだろうけど言わせていただくわ」

高らかに言い放ち、次に風見さんが指差したのは、立村先輩の方だった。

「悪いけどお似合いすぎるわよね。私、品山小学校に五年の時までいたのよ。いっこ上の、救いようもないくらい泣き虫で、犯罪者で、人でなしで、あの浜野先輩を再起不能の大怪我させた馬鹿男の話全部知ってるわけよ。聞きたい？」

私はすでに健吾から聞いているから、聞きたいとも思わなかった。

硬直したまま動かない立村先輩をじっとねめつけたまま、風見さんは舌打ちした。いつもの無邪気な表情とは裏腹の炎あふれる瞳だった。隠していたのは、スケバンの仮面だったのか。

「サッカー部のスターだった浜野先輩のこと、忘れるわけないわよねえ。私、浜野先輩の妹の友だちと仲良かったから全部聞かされたわよ。浜野先輩って、いじけ虫のあんたがこれ以上いじめられないようになっていろいろかばってくれてたそうじゃない？ ずっといじめられていて、それが本当は当然だったのに逆恨みして、クラス全員から総すかんくっていたあんたのことを、『俺がかばってやる！』って懸命に仲間に入れてあげようとしてたの、知らないで！ 有名よそれ。誰にも遊んでもらえなくて、ちょっと話し掛けたらすぐ泣き喚いて、それでしかたなく放置したらまわりからいじめをやったと思われて、みんなうんざりしてたってね。ひとりぼっちで本読んでいて淋しそうだから、一緒に探検ごっこに入れてやろうとか、サッカーに混ぜてあげようとか、いろいろしたみたいよ。可哀想な馬鹿男子のために、今日はあれやろう、明日はこうしてやろうって、一生懸命考えてただって！ なのにね、最後の最後にね」

もちろん聞こえているのだろう。立村先輩は視線を逸らしていた。梨南ちゃんの方を見ようとしたけど、すぐにうつむいた。目がうつろで、かすかに風見さんの方を何か物言いたげに見つめていた。でも止まらなかった。風見さんにはそんなの関係なさそうだった。

「どんなに一生懸命遊んであげようとしても、結局どうしようもなく、しかたないからみんな静かに青大附中へ送ってあげようってしてたのに、あんた何したわけ？ なんてあんなことしたわけ？ なんて、浜野先輩を土手から突き落として、足にもものすごい怪我させたわけ？」

「怪我って、それは」

ようやく立村先輩が言葉を発した。淡い、かすれた声だった。

ゆさゆさと揺れたのは、目の前の藤沖先輩だった。腕を組むようにして、風見さんの隣に立った。まるまる風見さんが見える。

それにもかかわらず、相変わらず言い合っている渋谷さんと霧島くん。

「僕がなんで会長やったらいけないんですか！ 最初そういう話だったでしょうが！」

「だから言ったでしょう。一年で万が一、対抗馬が出てきたら落ちるかもしれないって！ 安全策だって言ったでしょ！」

「うるさいですよ。結局渋谷先輩は、僕を踏み台にして会長やろうとたくらんでただけでしょう。男子をだますなんて最低もいいとこだ。こういうこと、他の会長たちが聞いたらなんというんだか」

聞いていたのは、私だけだった。渋谷さんも私が聞き耳立てているなんて気付く余裕あるわけではない。私がからくりを発見したなんて、きっと思っていない。

——最初から、渋谷さんは会長を狙ってたのね。

——佐川さんの言う通りだったのね。

男子でないと絶対に受け入れられない藤沖会長を説得するために、まずは霧島くんを連れて来て会長候補と決める。それから渋谷さんは霧島くんと交渉して、ぎりぎりで会長の座を譲ってくれるように頼み込む。最後の数分間でその入れ替えを行う。そう計画していたのに、霧島くんがOKを出さなかった。だから、こんなに、もめている。

私のたどたどしい言葉を聞き取って、そこまで読みきった佐川さんに今どうしても会いたかった。心の奥から、あの人を呼んだ。

風見さんの告発は続いていた。

「浜野先輩と卒業式に決闘したってというのは、見方を変えれば男らしいって言われるでしょうね。恩をあだで返されたってことさえしらなければね。一生懸命仲間に入れてあげようとして、結局しっぺがえし食わされたら普通恨むわよ。浜野先輩って本当の男だわ。『あれは男同士の決闘だったんだ、だから、もうあのことは忘れろ』って、同じクラスの連中に話したんだってよ。ふうん、そうなんだ、足のどこかわかんないけど、ひどく痛めてしまって、サッカー部でいまだレギュラーに入ることができなくなったって噂聞いたけど、それって、誰のせいなのかなって思ったわ。みな、その話聞いた人、口を揃えて言うわよ。あの逆恨みの馬鹿男のせいで、将来はオリンピックのサッカー選手になれるはずだった浜野先輩が、人生棒に振ったってね」

梨南ちゃんは静かに立村先輩をにらみつけた。今の話をどう受け止めているのかわからない。もし、今まで梨南ちゃんが立村先輩にしてもらったことを考えるのならば、そのくらいのことは許すべきだろう。他の誰にも嫌われたとしても、梨南ちゃんは嫌う権利なんてないはずだ。だって、菊乃先生や健吾や小学時代の同級生、そして私にしてきたことを考えれば、当然のことに決まっている。

「先輩、本当ですか、人間として、そんな、最低なこと」

「とっくに知ってるだろう」

眩き、うつむき、横を向く立村先輩。風見さんはちらと、隣の藤沖会長に体をねじって首を傾げた。どういう表情か、私の立ち位置からは見ることができない。

藤沖会長がそのまま風見さんの前を通り、立村先輩を覆い隠す格好で立ちはだかった。背中が大きい人だった。その声が一言、響いた。

「立村、今の話、事実か」

「事実は、事実だ」

姿は藤沖会長の背に覆われて見えなかった。聞こえた声はかすれていた。振り返った藤沖会長が言い捨てた言葉だけ、はっきりと聞こえた。

「悪いが、もうお前とは、話をしたくない。理由はわかっているだろう」

戸を閉めようとしたのを、慌てて風見さんが抑え、滑り込んだ。隙間なく、今度はきっちりと閉めた。ドアの向こうからかすかに梨南ちゃんが棒読みで告げているのが聞こえた。

「私も、もう二度と立村先輩と話をすることはありません。人間として、もう近寄りたくない人です」

いつものトーンで告げたらしい。と同時に、閉められた引き戸が一気に全開した。

「申し訳ないのですが、あと一分あります。生徒会長に立候補したいのです」

全員、ふたたび、態勢を整えようとした。慌てている。まさか梨南ちゃんがそこまで罵られて、それでも立候補しようするなんて想像できなかったのだろう。私からすると、梨南ちゃんの行動は読み通り。だけど、何ができるのだろう。

「もう一度言います。私は生徒会長に立候補したいのです。申し込み用紙をお願いします」

確かに、あと一分残っていた。のろのろと誰か女子ひとりが、紙を用意しようとした。時間稼ぎをするかのように。梨南ちゃんはすでに胸ポケットの生徒手帳からボールペンを取り出し、かちっとノックを押し書き込む準備をした。渡したら、すべてが終わる。

それを見た時、私の中で何かがはじけた。

非常事態にやっと気付いたのか、渋谷さんと霧島くんが慌てて紙に自分の名前を書こうとしている。でも間に合わない。梨南ちゃんは書くのが早い。五秒もすればすぐに提出してしまえる状態だ。口汚く罵りながら隣のふたりがシャープをちくちく言わせているほんのわずかの間。

——佐川さん。

私は片手に握り締めていた用紙を取り出した。すでに書き込んであるもの。

今私が思うまま動いたら、きっと生徒会は大変なことになるってわかっている。

もしかしたら渋谷さんも、私と友だちでいてくれなくなるかもしれない。

でも、私しかいない。

梨南ちゃんを、本来いるべき場所へ返すことができるのは、幼なじみの私しかいない。

立村先輩が待っている、廊下へ私は梨南ちゃんを連れ出してみせる。

そのためには、これしかない。

前に固まっていた数人の男子の隙間から、私は梨南ちゃんの視界に入る場所まで歩いていった。初めて私がいることに気がついたのだろう。

「はるみ、あんたなんでそこにいるの」

目を大きくまん丸くしている。教室で接するのと同じように、私はにっこりした。

「もちろん、立候補するためよ。梨南ちゃん」

「あんたなんかが、何できるというの」

怖くなかった。なぜだろう。小学校時代は一度も逆らえなかったのに。言われた通り、梨南ちゃんが絶対に正しい、そう言いつづけてきたのに。かつては親友だと思い込んでいたけれど、今は一緒にいるだけで憂鬱になる、できれば話もしたくない、通りすがりの女子だった。私を見下すことによって梨南ちゃんは自分がえらいって思おうとしている。ほんとは誰もそんなこと思ってくれないのに。立村先輩や秋葉くんがいくらでも可愛がってくれるのに、健吾や関崎さんのように立派な肩書のある人ばかり欲しがっている。

——梨南ちゃんを、立村先輩のもとへ戻すのよ。

私は用紙の「書記」「副会長」の部分に記した名前を二重線で消した。

開いて梨南ちゃんの鼻先に突きつけた。

「私、会長に立候補することに決めてたの。今出すわ」

後ろで立ちすくんでいる会計の女子に手渡した。彼女は黙って受け取ってくれた。

「もし梨南ちゃんが会長に立候補したら、私に勝てると思う？ 周りはみな、梨南ちゃんのことをいじめた悪い子だと思い込んでいるし、二年はみな梨南ちゃんの敵に回るわ。もしかしたら立村先輩たちが三年の票を取りまとめてくれるかもしれないけどそれだけよ。それに」

思いついたまま、私は言葉を続けた。

「もし副会長か書記か、それに立候補してだまって信任投票となったとしても、私の下で梨南ちゃんがまんでできる？ 私なんかの命令を聞く気になれる？ 私なんかに命令されて、がまんでできる？」

目がぎらぎらしている。片手の握り締めたこぶしが震えている。唇を震わせていた。

「私、梨南ちゃんがそんな恥ずかしいことがまんでできるなんて思ってないわ。だからお願い、ここから出て行って。これ以上、人を傷つけないで。早く、立村先輩に謝ってあげて。今、味方でいてくれるのは、立村先輩と秋葉くんだけなのよ」

私と梨南ちゃんは黙ってにらみ合った。私は見つめただけだった。

頬が真赤に膨らみ、梨南ちゃんの肩がががすかに揺れている。でも平気。梨南ちゃんはこれ以上何も言い返せない。私の風下に立つ以上に、梨南ちゃんにとって惨めなことはない。

「ナミーも霧島くんも、ほら、さっさと書いたでしょ。ほら私が持ってってあげる」

後ろの方で三つ巴の言い争いがまだ続いているようすだった。それを仕切っているのが風見さんらしかった。

梨南ちゃんを一切入れるわけにはいかない。背中には熱いものが支えてくれているようだった

。隣でひそやかに男子たちが、

「おいおい、ちょっと予定が狂ってるぞ」

とささやいている。ごめんなさい。私もこんなことになるなんて思っていない。渋谷さんか霧島くんかどちらかが会長に立候補すれば、私はたぶん落とされる。それでいいのだ。私の役目は、梨南ちゃんを不戦負で生徒会から出て行かせることだけ。

——梨南ちゃんを止められるのは、私だけ。

私と対決して、今の梨南ちゃんに勝ち目はない。霧島くんや渋谷さんと対決しても同じだけど、私とぶつかったらかつての恥をすべてあらわにされるだろう。

プライドを何よりも大切にする梨南ちゃんが、それを捨ててまでつかかって来るわけがない。

明らかに負け戦なだけなら、梨南ちゃんも勝負に出るだろう。

でも、女子として、健吾への片思いや立村先輩の横恋慕や秋葉くんとの追いかけれっことか、絶対に認めたくないものをあらわにされるようなことは、死んでもしたくないだろう。

「あの一、すでに四時過ぎたんですが、いいですか。締め切って」

会計係の女子ふたりが、机の上に置いてあった大きな目覚し時計を持ち上げて揺らした。

全員私たちに視線を集中させていたけれど、すぐにだらだらと元の位置に戻り始めた。

「もう用はないでしょう。外には立村がまだ待っているようだから、帰った方がいいでしょう」

ぶっきらぼうながら丁寧な言葉遣いで、藤沖会長が梨南ちゃんをエスコートし、戸まで連れて行った。おとなしく外に出て、また梨南ちゃんが振り返ろうとするのを見計らい、藤沖会長はその鼻先でぴしゃりと戸を閉めた。一気に全員から「ほおっ」とため息が洩れた。

「ナミー、そんなしょんぼりしないでよ！ ナミーのためなんだから！ これからよこれから！

霧島くんも、今回は副会長でいいじゃない。ナミーとハルのために、ばりばり働いてよ！」

さっきまで立村先輩を口汚く罵った風見さんが、いきなり手のひら返したように甘えてしゃべっている。力が抜けたように椅子に腰掛け放心状態の渋谷さんに、私はどう声を掛けたらよかったのだろう。風見さんは私にピースサインを送ってきた。

「ありがと！ これで完璧な生徒会になるわよね！ ねえ会長、女子だって悪くないですよねえ！ でしょでしょ！」

藤沖会長はじっと私の顔を見詰めていたが、黙って頷いた。

「もう俺は、口出ししないことに決めた」

「どうしてですか」

尋ねていた。藤沖会長が無理やり笑おうとしている風に見えたから。

「人間を見る眼が、俺にはなかったってことだ」

思わず私は耳のほつれ毛を押さえてうつむいた。

——佐川さん、私、こんなことになるって思ってなかったのに。

信任投票、全員当選確実。私はもう、来週の選挙が終わったら、生徒会長になってしまう。
ひとはしゃいでいる風見さん、脱力している渋谷さん、机を叩いている霧島くん。

会計係の女子が片手に持っている立候補申し込み用紙には、「書記」に渋谷名美子と、「副会長」に霧島真と殴り書きで綴られていた。二枚とも「会長」の欄に書き込まれた後があり、二重線で消されていた。

「お前何考えてるんだ、ばか！」

健吾の反応は予想通りだった。

頬に飛んできた手を私はそのまま受けた。覚悟はしていた。ただ生徒会室を出てすぐとは思っていなかった。そして平手打ちが一度だけではなく、両頬に向かって飛んできたことも。

「ごめんなさい、私、そうするしかなかったの」

泣けば許してくれるなんて、甘いことは考えていなかった。

激しく揺さぶられて怒鳴られているのが、生徒会関係者の前だというのがどうしようもなく恥ずかしくて勝手に涙が出てきた。

叩かれるのはわかってる、でも、みんなの前でなんて、ひどい。

「健吾、私、私」

「佐賀、お前、生徒会長なんてなにをするのかわかってるのかよ！ なめてるんじゃないぞ！」

「うん、わかってる」

「わかってねえだろ！ お前たった一人で、なんにも知らないところで、何からはじめろっていうんだ？ 評議委員長が俺だから助けてくれるとでも思ったのかよ！」

——それは絶対考えてないのに。

火に油を注ぐような言葉を口にしてはいけない。

私に許されている言い訳は、これだけだ。

たったひとつの武器を私は用いるしかなかった。

「泣いたってもうどうしようもねえんだぞ！ 誰か、おい、藤辻会長は？」

打たれた両頬を押さえて顔を覆っている間に、健吾は生徒会室へすれ違う人を突き飛ばさんばかりの勢いで飛び込んでいった。背中で健吾の、少し礼儀をわきまえた声が聞こえた。

「すみません、あいつ、たぶん間違っただと思うんです。だから、立候補の取り下げをお願いしますか」

健吾は丁寧語を使っている。気に入らない先輩にはどんどんつかかかっていく健吾なのに、時々どもりながら。

「きちんと規則にしたがって立候補したのだから、翻すわけにはいかない」

藤沖会長の落ち着いた言葉にさえぎられている。それを聞いてほっとしている私。

「けど、どう考えたってあいつなんかにできるわけねえし」

「いや、そんなことはないと思うな」

背中をぎゅっと抱きしめてくれる気配がした。しゃべり方ですぐにわかった。風見さんの無理やり押さえ込んだ声だった。

「ハル、大丈夫、私が守る、大丈夫よ」

——風見さんが？

そっと顔をあげた。ちっとも乱れていない風鈴髪の風見さんが、ポケットからやたらとレース

の多いハンカチを手渡してくれた。私が受け取ると、いきなりまた取り返しごしごしと目をこすってくれた。

「今のうちに逃げようよ。ね、彼とはあとで話せばわかってくれるよ」

「でも、もし立候補が」

「絶対大丈夫！ 立候補は取り消されたりしないから！ ちゃーんと規則どおりなんだもん！」

私が心配していたのは、健吾の嘆願よりも生徒会室に残された霧島さんと渋谷さんだった。私が下りてくれることを願っているに決まっている。本当はどちらかが会長になるべき人だったのに、とんびにあぶらげさらわれたようなもの。私の顔なんてもう二度と見たくないって思っているきつと。でも絶対にあと一年間顔を合わせないといけないってことも。本当は健吾に泣きついて、立候補を取り下げてもらえばいいのだ。わかってる、でも。

「ナミー、悪いけどハルをちょっと借りてくね。会長、どうも」

「おい、逃げるな、お前言うことあるだろうが！」

健吾の怒号から私は耳ふさぎ、廊下を駆け出した。

「台風だね。今ちょうど来てるね。あと一時間くらい待てば落ち着くよ」

あっけらかんといつもの口調で風見さんはしゃべり笑った。

「その間さ、ここにいようよ」

どうして私って、秘密の場所にばかり籠ることが多いのだろう。

さっきまで鼻水じゅるじゅるするくらい泣いていたから、顔を隠せるのはありがたかった。「音楽準備室ってね、意外と出入りが少ないんだ。吹奏楽部の人たちがたまに楽器を取りにくるくらいだけど、今日は台風だしさっさとみんな家に帰ったみたい。鍵はめったにかからないし」

「でもどうしてそんなところ」

「いろいろとね、情報あるのよ」

なんだか渋谷さんとしゃべっているような話なんだけど、側でかいがいしく世話をしてくれるのはやはり風見さんだった。私に泣くだけ泣かせてくれた。

「どちらにしても、ハルがこうなるってことは、私もわかってたんだ」

「わかってるってどういうこと？」

「そう、あのね」

私に風見さんは、いつもの明快な笑顔で答えた。

「私、ハルに会長、ナミーに副会長になってほしかったんだ。絶対！」

喉に何か詰ったみたいだった。せきこんだ。風見さんは背中をさすってくれた。

「けど、ハルがやりたくないのにさせるわけいけないしね」

「やりたくないに決まってるわ」

「けど、ちゃんとやってくれた」

あっさりとした答えた風見さんは、くるっと表情を変えた。木曜に見せた大人っぽい瞳をきらめかせた。

「何がなんだかさっぱりわかんないよね。ハル、ごめんね」

「わかんないわ。だってこんなことになるなんて」

だって風見さんがいきなり梨南ちゃんや立村先輩を罵ったりしなかったら、私もおとなしく書記あたりで立候補していたはずだった。書くことこそ迷っていたけども、私の居場所はそこしかなかっただろうし、健吾も多少は怒ったかもしれないけどあとで「まあ、書記ならな、たいした仕事もねえしな」とあっさり受け入れてくれたかもしれない。

「生徒会長なんて、そんな、私」

「ハル、あのね」

窓のない音楽準備室、風は入ってこない。ただ壁がかすかに揺れる。

「どちらにしても、話すつもりだったんだ。だから、全部聞いてくれないかなあ」

おぼかっぽくない、どちらかというと渋谷さんに近い話し方だった。

いや、違う。似てるのは、あの人だ。

——佐川さん、どうして何にも連絡してくれないんですか。

恨みを言いたくて、でもそれを言う相手は風見さんではなくて。

私は頷いた。にっこり頷いて、また一枚ハンカチを取り出し目と鼻を拭いてくれた。そのハンカチには紺の糸で白地にいて座のマークがクロスステッチで記されていた。

風見さんは床に安座した。スカートの上に両こぶしをのせて、あごを支えるように持ってきた。私の知っている風見さんらしくない語り口だった。

「私、五年の時にね、品山小学校から柵氷小学校へ転校してきたんだ。最初から青大附中受験するって決まってたし、もし落っこちてもできたら市街地の中学に行きたいなって思ってたし。品山離れたくなかったよ。友達いっぱいいたし。けど、パパとママの決めたことだし、しょうがないよね」

かすかに口元をほころばせた。意味なく片手で指を折り、数えていた。

「転校して最初の頃って、なかなかクラスのグループ分けが読めないところあるでしょう？ 気の合う子がどのチームにいるかとか。だから最初のうちは、クラスで少し変に思われているタイプの子と一緒に行動してたんだよね」

「変に思われる？」

つまり、風見さんとぴったりのタイプの人だろうか？

「今思えばね、その子も決して悪い子じゃなかったと思うんだ。ナミーたちが中心のチームに最初入れてもらっていたらしいんだけどなかなかうまくいかなくて、ちょっと仲間はずれっぽい扱いされてたらしいんだ。なんというか、みんなに笑ってほしくてわざとうけないギャグを飛ばしたり、間違った当て字作って手紙書いたりする子いるでしょ。で、その場は盛り上がるけど、あとでばっかじゃないのって言われちゃうタイプの子。みんなに関心持ってほしくて、わざと髪の毛ぼさぼさにしてきて、『きゃー、あの子って髪形変、直してあげるよ』みたいに面倒見てくれる人を探す子とか。なんかね、それを狙っているってことが、すぐに私、わかったんだ。だからね、すぐにナミーたちのチームに混ぜてもらおうと決めたんだ。その子には悪いけど、やっぱり気の合う子同士の方がいいかなって思ったの」

私はハンカチで頬を抑えながら、思い当たる女子たちの顔を思い出した。

なんだか風見さんが私に対してしていることと、その「変に思われている子」の行動は全く同じに思えてならなかった。「私を見て、私をかまって」って、さっきみたいいきなりずっときょうな行動を取る風見さんの意図はそこにありそうな気がした。

「本当ならね、その子と仲良くしながらナミーたちと遊んで、自然と輪を作ってあげられればよかったんだと思うの。無視したつもりはなかったけど、きっとその子は傷ついたんだと思う。しばらくしてからいきなりその変な子、先生に告げ口したんだ」

「告げ口？」

「私に無視された、って言うんだったら本当のことだし、ごめんねって言うしかないよね。だけど、その子が標的にしたのがね、ナミーひとりだったんだよね」

「渋谷さんを？」

「そう、自分は何にも悪いことしてないのに、ナミーが自分のチームから追い出そうとして、転校してきた私に無理やりその子を押し付けようとしたって。私みたいな『変』な子とくっつけて、ナミーたちのチームから引き離そうとしたって。だからナミーはいじめっ子だって」

返事するのに困った。だって、もし渋谷さんの立場だとしたら、そうしたくなるのはごく自然のことに思えたから。風見さんの言う「変な子」はきっと、風見さんとお似合いに見えたんだろう。もともと気の合わない「変な子」と同じチームにいるよりも、本当に気の合いそうな転校生とくっついてもらったほうがいろいろと楽なもの。なぜか渋谷さんの弁護をしたくなった。私はハンカチで目頭を抑えながら、

「なんで、なんで」

そう尋ねた。

「何が起こったのかつかめなくてしばらく私も様子見してたんだ。それがきっと甘かったんだと思うのね。ナミーっていっぱい話さないと、冷たい女子に見えるでしょう？ それがかきと損だったんだね。いつのまにかナミーのチームにいた子たちが一人、二人、って離れていって、あっという間にナミーひとりぼっちになっちゃったんだ」

「なぜ？」

鼻水を少しすすりあげてしまった。声が詰る。

「もともと気取っているとか、お高いとか、頭悪いくせにできる振りしてるとか。すっごく悪口聞かされたよ。私が転校する前からそう思っていたけど、ご機嫌取らないといけないからしかたなくがまんしてたんだって。でも、それ、今更なんでそんなこと言うのかなって思ったよ。そんなに嫌いだったらさっさと離れればいいのにねって思ったもん。けど、ナミーも悪かったと思うよ。無理に学級委員になりたがったり、何か集まりがあるとすぐに仕切りたがったりするのが、鼻についたんだと思うんだよね」

「なんか、信じられない」

首振ってそう言うと、風見さんはこくこく頷いた。

「うん、ナミーといっぱい話すと、そんなことないってわかるのにね。それでね、私その、変な子にはっきり言ったんだ」

「なんって？」

舌足らずな言い方で風見さんは答えた。

「『かまってかまってってわざとらしくアピールするのがむかつくのよ！ そんなにあんたの面倒をみてやらねばならない義務って私たちにはないし、ひまだってない。かまわないからってそれをいじめだと決め付けて騒ぐのは、あんたが私たちを攻撃してるのと同じなのよ』ってね」

「それで、受け入れてもらえたの？」

恐る恐る尋ねた。渋谷さんが言い放つのならば説得力もあるけど、この風見さんがなら、どうだろうか。

「どうなのかな。私はそのあと全然いじめられなかったし、その子とも卒業までうまく付き合っていたし、友だちもあつという間にたくさんできたし、問題はなかったよ」

「でも、渋谷さんは？」

また、震える声で尋ねる。風見さんは首を振った。

「なんか私が、ナミーの居場所を奪っちゃった形になったんだよね。どうしてだろ。ずっと淋しい顔してて、ひとりぼっちになっちゃったんだ。きっとナミー、その変な子と話が合わなかっただけなんだよね。合わない子とあわせることも大切だけど。けど、その子はナミーとその仲間たちだけでしゃべりたい時にも割り込んでこようとしたり、内緒にしていることを無理やり知ろうとしたりするんだよ。大親友でないと話せないようなことを、その子は同じチームだからって理由でしつこく聞いてくるんだよ。いじめる気はないけど、しつこすぎて鬱陶しい子をどうやってうまく遠ざければいいのか、きっとそのやり方がわからなかったんだなあ、ナミーは」

そこで言葉を切った後、風見さんはもう一度首を反対側に傾げて、

「私もね、結構言われたなあ。せっかく親切にしてあげたのに、結局頭のいい子や可愛い子のチームがいるところを選んだんだ、恩知らず！ってね。別にそんな気全然ないのに。私よりずっとその子の方が顔、可愛いのに。頭のいい子だったって、転校してきたばかりなのに成績がいいとか悪いとかわからないよ。とにかく、勝手に自分の基準で物事決められたらたまったもんじゃないってね。悪いことしてないのに、あつという間にその子の基準だとみんないじめっ子になっちゃうの。最低だよ」

頷いた。誰かさんの顔を思い出した。

「私はすっごく楽しい思い出がいっぱいだったけど、ナミーは私がきたせいで友だちをみんななくしちゃったってことだよ。責任やっぱり感じちゃったんだ。その頃はやっぱりナミーのイメージ、私もあんまりよくなかったし、仲良くおしゃべりって感じでもなかったけど、私なりに償わなくちゃと思って、夏休みに一度、ナミーを家に呼んで泊まってもらったんだ」

「いきなり？」

風見さんの発想が極端だ。「あまりイメージのよくない」渋谷さんを「償い」のためになぜ「家に泊める」のか？ もっと別の順番があるんじゃないだろうか。

涙も止まった。顔拭いてごまかす振りをするのもやめた。私は前かがみになり風見さんの話に聞き入った。

「そこで初めて聞いたんだけど、ナミーの家では、成績が悪かったりなんかの長になれなかった

りすると、ものすごく責められるらしいんだ。うちみたいに脳天気なお兄ちゃんお姉ちゃんじゃないし、できることが当然って決め付けられてるんだって。だからどんなにみんなから馬鹿にされても、学級委員にならなくちゃいけなかったし、勉強も一杯しなくちゃいけなかったんだって。いっぱいいっぱいナミーとその時話して、やっとわかったんだ。だからそれ以来、私、ナミーをささえていこうって決めたんだ。だって私のうち、そんなこと一度も言われたことないんだもん。そんなこと言われたら家出したくなっちゃう。せめてね、私と一緒にいる間は、おうちのいやなこと忘れさせてあげようって決めたんだ」

自業自得じゃないの。ぽそっと口走りそうになる。

なんでだろう。

さっきまで渋谷さんの味方をしていたくせに、いきなりすうっと冷えてくる空気。

瞳が乾いてきた。

「もしね、ナミーが他の子たちのように、私の話をぜんぜん聞いてくれなかったとしたら、こんなに仲良くなりたいと思わなかったんじゃないかなって思うよ。何日も話をして初めてわかったんだけど、ナミー、こんな風にしゃべる機会っておうちでも学校でも全然なかったみたいなんだよね。本当の気持ちを話したら怒られちゃうからって感じみたい。だから私のうちではいくら話してもいいんだよ、って何度も言ったんだ。一年くらいずっとそう話し続けて、それでやっと、親友になれたと思うんだ」

風見さんは「なんども、なんども」と繰り返した。

「あの子は、聞いてほしかったんだなって思ったの」

私ももう一度頬をハンカチで抑え、別のことを考えた。

——梨南ちゃんも、話を聞いてほしかったんだろうか。

——私も、風見さんみたいに、しつこく話をしたいと思ったことあるだろうか。

——ない、そんな気持ち、ぜんぜんなかった。

「私、ナミーと青大附中に入ってから別のクラスになっちゃったでしょ。私はすぐに友だちができる方だからそれほど不安もなかったけど、ナミーはきっと周りトラブル起こすだろうなって思ったから、できるだけクラスでべったりすることにしたの。私みたいに頭のねじが外れたような子が側にいれば、ナミーも安心して堂々としてられるし、周りからもナミーが評価してほしい形で評価してもらえと思ったんだ。本当は評議委員会に入りたかったけど別の子がすぐに立候補してしまったから勝ち目なかったしね。けど、生徒会が穴場だってことはいろいろなところから情報もらってたから、去年の秋にね、ナミーを立候補させたの」

「風見さんが？」

煽り立てたのか？ あっさりと頷いた。

「そう。だってナミーのおうちでは、何かの長とか役員とかなってないと、ばかにされるんだって聞いてたから。評議落とされてからかなり落ち込んでたし、それなら生徒会の役員の方がずっと上だよって言ってね。ほんと、副会長になってからはうちの人たちから馬鹿にされなくなった

って喜んでたよ。私も嬉しかったんだ。ナミーが笑ってくれてて」

信じられない。すべての状況が風見さんの言葉で塗り替えられていく。それをすべて信じるわけにはいかないと、心でブレーキをかけてみる。まゆつばまゆつばと呟いてみる。でも説得力がありすぎて、私にはどう否定していいかわからなかった。

佐川さんだったらすぐにきれいな切り分けをしてくれるだろうに。また涙がこぼれそうだった。勘違いした風見さんが、

「ハル、大丈夫？」

髪の毛をかすかに揺らして見上げてくれた。私は首を振り、話の続きを待った。

「信任投票だから余裕で入ると思ったけど、この学校ってやたらと委員会が威張っているなって印象は最初から私、感じてたの。友だちを通じていろいろ情報集めてて、それで、次期評議委員長がまさかあの立村だと聞いた時、私何かが間違ってるって思ったんだ」

「立村先輩の、過去のこと？」

ぶんぶん首を振った。

「違うよ。いろんなことがあっても罪を償ってればいいよ。私、浜野先輩の妹と仲良かったし、文通もしてたし、よく遊んだりしてたし、品山の人たちがどう思っているかはだいたい聞いてたの。もともと立村のうちはちょっと気取りすぎてて、うんそうだね、ずうっと前のナミーみたいな感じだったみたいなんだ。頭がよくないくせに『他のばかどもとは違うのよ』って振舞ってて、目だつような格好したりして差をつけようとしたり、町内会の行事をシカトしたり。やはり大人たちもむかついてたみたいなんだ。私たちでもやはりあるんだよね、そういうむかつくことって。だから無視されてただけなのにね」

風見さんはそこで言葉を切り、人差し指をくわえた。

「浜野先輩のことだってそうだよ。もしもね、立村があっさりあの事件の後で頭を下げて謝るとか、あの事件の事情を説明したりすれば、また変わったかもしれない。実際、周りはそれを見ていたからこそ黙っていたらしいよ。けどね、ぜんぜんしらん振りして、学校に行く時はわざと早めに逃げ出すようにすり抜けてるとか、みんなばればれなんだよ。自分が悪いことに気付いてないならはっきり言うだけでもいいと思うけど、あいつは自分が何をしでかして、どれだけの人を傷つけて、精一杯の思いやりを踏みにじったんだよ！ そんな奴がなんで、青大附中の評議委員長なんてやれるのかって、私、許せなかったんだ。浜野先輩の足のことを聞いているからなおさらね」

さっき、立村先輩を罵った風見さんの言葉に、少し言い過ぎなのではないかって思ったのだけど、事情をそのまま信じるならば当然だろう。周りが思いやりを示してくれたのに、一切受け入れようとしない、それどころか自分の要求だけを押し付けようとする。まるで梨南ちゃんと同じだ。いや、だからこそ立村先輩は梨南ちゃんに惹かれたのだろうか。

「だから私、どういう手を使ってもこの事実だけははっきりさせたいって前から思ってたの。ナミーが立候補する前からね。せめてきっちりと、浜野先輩に土下座して謝ってもらい、きちっ

とけじめをつけるなりしてほしいって思ってたんだ。関係ない評議委員の人たちには悪いなって気持ちはあるけど、間違っていることは間違っていると認めてからすべてを巻き直さなくちゃ。ほら、ニューディール政策ってあったでしょ。だからなの。びっくりしたよね、ハル。私って最低の人間だって思われちゃうよね。ごめんね」

いきなり謝られて戸惑った。慌てて首を振った。

「さっき、私、はっきり立村相手に言ったことはほんの少しだけよ。ほんとはもっと怒鳴りたいこといっぱいあるの。だけど、あそこでの目的は杉本をさっさと追い出すことと、藤沖会長に立村の本性を暴露することだったからあれだけにしといたの」

——あれだけ？

だんだんわからなくなってきた。風見さんの言葉はすでに計算されつくしていたことなのだろうか。しゃくりあげた振りをして、口を覆った。私がまたショックを受けたと思っているのかもしれない。何度も風見さんは「ハル、ごめんね」を繰り返した。

「藤沖会長って本当は応援団に入りたいって思ってるような人なのよ。単純すぎるくらいまっすぐで曲がったことが大嫌いなんだ。そんな会長がなんであんなひねくれた立村を応援しようとするのかな。ものすごく不思議だったの。ほんとだったらはっきり告げ口したかったけど、会長の性格ならその言った相手を軽蔑すると思うんだ。だから成り行きを待つしかなかったのよ。たまたま今、グットタイミングだったから言っちゃったけど、ハルはびっくりしたよね」

「うん」

グットタイミングなんて。私はてっきり風見さんがたまたま機嫌が悪くて叫んでしまっただけだと思っていたけど計算ずくだったなんて。誰かに似ている。いったい誰だろう。思い出せない。

「でもこれで、評議委員会からの権限移行はずっとスムーズに行くはず。今までは立村率いる評議委員会に気を遣って藤沖会長がのったりのったり進ませようとしていたけど、もう義理立てする必要なんてなくなっちゃったもん。さっきも会長言ってたでしょ。『もう口出ししない、人を見る目がなかった』って。あれ聞いて、もう大丈夫だなって確信したの。ハル、あとは楽よ。あとは生徒会側の要求をどんどん要求していけばいいの」

「そんな、私わからない」

今はまだ、改選が行われていないから、評議委員の私。

「大丈夫大丈夫。生徒会選挙が終わってから今度は委員会の改選でしょ。他のところはもう決まっているから動かないと思うけど、評議は大変よ。さっき私が言ったこと、みんな生徒会関係の人たちが聞いてたし、あいつも認めたし。そういう最低な自己保身人間を委員長に選びたいと思う？」

首を振った。風見さんは頷いた。

「よね？ もちろん簡単に委員長が変わるとは思えないけど、でも、信頼感がゼロになったってことは、団結力ががたがたになるだろうし、そうなったらこっちの思う壺よ。あとはどんどん攻めていけばいいってわけよ。ナミーと霧島くんたちと一緒に、評議委員会をただの学級委員会にしちゃえばいいの。ハル、大丈夫。私があとは守るから」

「風見さん、どうして？」

やっと搾り出した質問を、私は投げかけた。こくこくっと答える準備をする風見さんが微笑んだ。

「こんなにいっぱい計画立てることができるなら、どうして風見さん、生徒会長に立候補しなかったの？ 私なんかより、ずっとずっと、渋谷さんたちを守れるでしょう？ 私なんか、何にも知らないのよ。私」

そうだ。なんでこんなに頭の働くところを風見さんは隠してきたのだろう。

一時間前までは、風見さんがただの風鈴頭のなんも考えていない幸せな女の子としか思っていなかった。渋谷さんには「親友」になってもらって、かろうじて輪に入れてもらっているだけの子。でも今の話を聞いていくとふたりの関係が逆転して映る。

実力がないのに強がっている渋谷さん。

親友を守るために精一杯走り回っている風見さん。

そんな図が、まだ私にはなじまない。

風見さんは胸ポケットから生徒手帳を取り出した。中から四つ折りの紙を私に見せた。立候補受付用紙だった。「会長」の欄に「風見百合子」と丸文字で書いてある。

「もしハルが動かなかったら、私も覚悟はしてたんだよ。とにかく杉本を蹴落とすためにだけね。でも私だったらもしかしたら、知名度低くて選挙戦で落ちたかもしれないなあ。ね、だからその点ハルの方が絶対向いてるよ」

「そんなことないわ。だって、私、流されてるだけなのよ」

「ハル、自信を持って！」

いきなりぴしりと言葉が響いた。どきっとした。

「杉本をおっぱらった時のハルはかっこよかったよ。ほんとだよ。私、ハルとこうやっておしゃべりするようになる前から噂を聞いてたけど、いい悪いは別としてすっごく自分を持ってる子なんだなって思った。馬鹿な女子たちが流されて、威張ってる杉本の方についた時も、一人ぼっちになっても怖がらないでしっかり立ってたハルって、強いなって思った。そういう子と私、友だちになりたかったんだよ。それにね」

びっくりする言葉を風見さんは続けた。

「ナミーには私より、もっとしっかりした子が友だちでいた方がいいと思うんだよね」

「しっかりした子？」

うそでしょ？ だって私のどこが「しっかり」してるんだらう。

いまだに佐川さんや健吾に甘えっぱなしの私に。

すねもせず、にっこりしたまま。

「これ、ナミーに確認してないことだけど」

ちろちろと周囲を見渡した。誰もいないのに。つられて私もきよろきよろした。思わず笑った。

「たぶん、ナミーは、好きだと思うんだあ」

とろんとした口調で、何を言い出すのか。身構えた。恐る恐る尋ねた。

「何を」

「霧島くんを」

「え？」

私の頭には、ぎりぎりまで「約束したじゃない！」「押し付けるな！」言い合っているふたりの様子が一気によぎった。まさか、あんなふたりが。私がまた首を振ると、

「私の勘。結構当たるんだ、これって」

——佐川さんだ！

風見さんと重なった顔、それが信じられなかった。

私を導いてくれる、たったひとりの人を思い浮かべてしまった。

気付いてない。風見さんは自分なりの疑問を挙げている。

「ハルもびっくりした？ でもね、ナミーの性格から考えて、いつのまにかみんなにばれてしまうと思うんだ。ナミーってね頭がよくて美形の男子が好きなんだ。だから霧島くんはぴったりなの。でも、あの霧島くんって年上の女子を馬鹿にしてるところあるね。ナミーには合わないと思う。けど、ナミーが好きなら応援するしかない。だからね」

また「だからね」だ。

風見さんの言葉に震え上がりながら私は次を待った。

「霧島くんが会長に出なかったのはきっとハルに勝てないって思ったからだと思うの。だから副会長にしたんだろうな。けど、もしナミーが副会長で並んだりしたら選挙戦になっちゃうし、ナミーが下にならない限り、恋愛の対象にはしてもらえないって気がしたの。だからナミーには、書記で出てもらって、霧島くんを安心させて、それからアタックあるのみ！ だからよ」

「だから？」

風見さんは自信たっぷりに言い切った。

「だから、私、ナミーに書記にしなさいって書き直させたの。会長よりも絶対にうまくいくポジションだって思うもの」

何も言えなかった。風見さんの風鈴ヘアをはずした中には、佐川さん並の鋭い頭脳が隠れていた。ずっと渋谷さんの言葉ばかり追いかけてきたのに、すべてをひっくり返されてしまった。わけがわからないくらい涙が流れた。ハンカチを押さえすぎて、糸の部分がにじんでいた。どうしよう、しみが残ってしまう。

「ハル、ちょっと待っててね」

私をしばらく覗き込み、手をひらひらさせたあと、風見さんはひとりで廊下に出ていった。台風、上陸したのだろうか。がたがたと揺れている壁。私は耳を澄ませ、今聴いたことをすべて頭の中に通していった。針に糸を通すような感じだった。飲み込むのが難しかった。

風見鶏。三百六十度ぐるぐると回り、すべてを見渡している。

どうして私は気付かなかっただろう。

佐川さんだって教えてくれなかった。

ドアが開いた。風見さんかと思った。廊下の空気と温度差を感じた。熱く感じた。

「おい」

ネクタイをはずしたまま、ジャンパーを羽織っている健吾がいた。

「帰るぞ」

一言告げて、荒々しく入ってきた。

「泣くんじゃねえ」

「ごめんなさい」

健吾の顔にはもう、私をひっぱたいた時と同じような荒々しさはなかった。

「台風、すげえぞ」

言われた通り、私は制服の衿を直し立ち上がろうとした。健吾が腕を振り回すように私の前に立ちはだかった。怒られるのだろうか。許してくれないのだろうか。気持ちがついていかない。と、その手がいきなり腰に回った。両腕でぎゅっと健吾と密着させられるようになかった。誰もいない。唇に食いつかれた。こんなに痛いことされるのは初めてだった。怖い。動けずされるままだった。

「佐賀、いいか」

唇を離し、また擦り付ける。合間に呟いた。

「覚悟はあるな」

「うん」

「俺も決めた」

もう一度ちくちくする口を頬にくっつけられた。耳元にささやいた言葉に私は動けず、何度も健吾の頬ずりを受けるはめになった。

「後期評議委員長を奪う」

土曜の朝に、生徒会役員候補者名が告示された。

すでに私と健吾、梨南ちゃんと立村先輩を含めた激しいやりとりは、二年B組のクラスメートたちにも知れ渡っていたようだ。もともと女子たちは私から一歩か二歩距離をおいているし、男子たちも健吾が怖いのかあまり近づいてこない。噂話を固まってしているのはわかるけど、私に直接尋ねてくる人は誰もいなかった。

担任の桧山先生も、朝礼時にいきなり私を名指しして、

「佐賀、よく選んだな。えらいぞ」

誉めてくれた。もともと男尊女卑っぽいところのある先生だ。特に梨南ちゃんのようにプライドが高い女子は大嫌い。梨南ちゃんが評議委員から引き摺り下ろされ、唯一可能性のあった保健委員の路も閉ざされ、最後にはE組へ島流しにされたのも、いわばこの先生の意志が強かったと聞いている。普通だったらPTAから非難ごうごうになりそうなのだけど、あっさり流されたのは、やはり梨南ちゃんが普通でなかったからだろう。

桧山先生にとって私は「女子」の枠に入らないのだろうか。

黙って話を聞くことに専念した。女子たちから流れる冷たい空気をあえて耳元で遮断した。

「今まで生徒会は先生たちが裏で手を回して、無理やり立候補させるのが常だった。ところが今年は全員、自分の意志でやりたいということで全員役員席が埋まった。これは本当にすごいことだ。本当だぞ、佐賀。本来佐賀は、自分の意志でどんどん行動してよい人間だったんだが、小学校時代からいろいろと邪魔されて結局、力を発揮できずにいた」

梨南ちゃんのことを当てこすっていると誰でもわかる。女子たちも何も言わない。男子たちがひそひそと「だよな」「あれな」とささやいている。

「そういう佐賀が、二年以降自分自身の正しいと思うことを、正々堂々で行うことができるようになり、見違えるように強くなったのが俺はたまらなく嬉しいぞ。新井林、そうだろう」

隣の健吾はしかたなさそうに頷いた。朝、「おはよう」とだけ言ったっきり、話していない。なんだか、昨日のことを思い出すと恥ずかしくて、うまく言えない。

「とにかく、新井林、お前がいざという時支えてやるんだぞ。そういうポジションにいるだろう？」

意味ありげに笑う桧山先生。逆らうとまたぴしゃっとやられるだろう。女子には手加減しない。私に対してはひいきに近いくらいやさしくしてくれるけど、一度梨南ちゃんに味方したことのある女子たちには遠慮しない。すでに反省の色が見えているけれども、「一度犯した罪は消えない」とばかりに厳しく当たっている。私からすると少しやりすぎのように見えるけども。

「男として、やることが、あるだろう？」

もう一度健吾は頷いた。私を横目でちらっと見て、またノートにぐちゃぐちゃと悪戯書きをはじめた。私には読めない文字だった。

台風が去った後の秋晴れ、夏に近い太陽が窓からのぞいた。

こんなに暖かい秋の日は久々だった。汗ばむくらいだった。

健吾が今、何を考えているのかわからない。雨の中、痛いくらい抱きしめられ、それでも雨でびしょびしょになりながら歩いたことを私は思い出していた。あの時何を話したのか、私がいなくなったあと生徒会室で何が起こったのか、それすらも聞いていない。

——後期評議委員長を奪う、ってどういうこと？

尋ね返すべきか迷ったけど、黙っておくことにした。

たぶん、健吾にとっても私にとっても、それが一番正しいと思えたからだった。

四時間目後、健吾はこれから部活があるはずだ。話をこれ以上しないですむ。

「先に帰るわね」

「言うことはねえのかよ」

他のクラスメートたちが私たちを興味しんしんの目つきで見つめていた。こんなところでまたひっぱたかれるようなことされたくないし、私も説明をきちんとする自信がない。

「またあとで、ふたりの時に話したいの」

どう受け取ったかはわからないけど、健吾はあっさり納得したようだった。

「あとで電話するからな。家にいろよ」

「うん」

ひそひそ声なんてどうでもいい。廊下をすれ違う他クラスの生徒たちの視線も無視した。

私は一呼吸した後、渋谷さんのいる教室へと向かった。

どうしても、早く話さなくちゃいけない人がいる。

どうしても、風見さんよりもきっちりと、話をつけておかねばならない人がいる。

役員選挙は来週の金曜六時間目を予定しているという。それまでに私は立会演説用の原稿をこしらえなくてはならないし、私なりの理念のようなものも考えねばならない。昨日、発作的に立候補してしまい、信任当選が確定している私であっても、会長としてやるべきことを考えなくてはならなかった。

最初、生徒会に誘ってくれたのは渋谷さんの方だ。去年の経験ももちろんあるだろうし、きっと教えてくれると思う。ただ、本来渋谷さんが望んでいたであろう路を断ってしまった私を、彼女は許してくれるだろうか。

風見さんは、「ナミーは書記の方がいい」「霧島くんより下の役職についたほうがいい」と言っていたけど、渋谷さんは不本意に決まっている。あの時、私が立候補する以外に梨南ちゃんを追い出す方法はなかったと言い訳しても、やはり難しいだろう。

でも、どちらにしても、早く決着をつけておかねばなるまい。

私が会長で、渋谷さんが書記。一緒に一年間、生徒会室で同じ空気を吸う仲間として。

「渋谷さん」

私の方を見て、一度どっきりした風に口を尖らせた。すぐに笑顔をこしらえた。

「もう、帰るの？」

「ええ、渋谷さんは、これから生徒会室？」

あえて何も考えていない風に私は振舞った。心臓がドキドキしているけど、そんなの見せないようにしなくちゃ。気付いていないのか、渋谷さんは首を振った。ヘアバンドがやはりきっちりと決まっていた。

「改選まで生徒会室に入ってはいけない決まりになっているのよ。不正があるといけないからという理由でね。だから来週までは近寄れないわ」

そうだったのか。私は知らなかった。聞いてよかった。

「そうなの、それならこれから、時間ある？」

腕時計をちらっと見た後、渋谷さんは私を用心深く見つめ返した。

「大学の学食で、もしよかったら一緒にごはん食べていかない？」

明らかにどきんとした表情だったけど、すぐに自然な笑顔を見せてくれた。

「そうね、心配なことあったら、相談に乗るわ」

私が考えていることを一切気付いていない証拠かもしれなかった。

何事もなかったかのように、大学食堂に到着するまでの間、私たちは関係のないことばかり話しつつ聞いていた。互いに今何を考えているか、知りたい気持ちは見え隠れしている。でも、ここでうっかり口を滑らせたらずいとは、本能でささやきかけてくるものがあった。どこから湧いてくるのかわからないけれども、とにかく心を読まれないようにしなくちゃ、そう用心していた。

「渋谷さん、ぬいぐるみ好きなの？」

ティディベアのぬいぐるみを抱きしめて、「うわあ、可愛い！」そう呟いていた姿を思い出し、話を次いだ。髪の毛を耳にひっかけるようにして、優等生顔で渋谷さんは答えた。

「ええ、でもああいうのって子どもっぽ過ぎるから、見るだけにしているの」

「そうなんだ」

「中学生でそんなの赤ちゃんっぽすぎるでしょう」

そうなんだろうか。首を傾げたくなかった。あの時、ちらと見たただけだけど、渋谷さんは本当に大好きなものを見つけたって顔をしていた。赤ちゃんっぽすぎる、って誰が決めたのだろうか。

「私も好きよ。食事終わったらまた観にいかない？」

おねだりする風に持ち出してみると、渋谷さんはたちまち楽しげに、

「いいわよ、佐賀さんってぬいぐるみとか好きなの？」

背をぴんと伸ばし、微笑んだ。

たぶん風見さんが渋谷さんに対して話したことはほとんどが本当のことだろう。

なんとなくそう感じていた。

家でも、教室でも、その違和感が抜けずに頭を悩ませていたのだけど、こうやって直接渋谷さんと言葉を交わしてみると、裏に隠しているらしきものが見えてくる。

渋谷さんがこうやってぬいぐるみの話に、一步高いところから見下ろすような態度を見せるのもそうだろう。ぬいぐるみの好みは人それぞれだし、年齢で分けられるようなものでもない。もしティディベア大好きな子が渋谷さんの言葉を耳にしたら、傷つくかもしれない。そこが風見さん

の言うところの「ナミーの冷たさ」なんだろう。

でもどうして、そんな風にしなくてはならないんだろう。

風見さんは渋谷さんのおうちの事情と話していたけれども。

「長」にならないとばかにされる家の事情ってなんだろう。

大学学食に中学生はそれほどいなかった。いつもだと委員会関係の人たちが時間をつぶすために集まっていることもある。私も何度か二年生評議の集まりに参加したことがある。なによりも時々健吾に連れられてふたりきりでラーメンを食べたこともある。でもあまりなじみがある場所ではなかった。

「あまりいないのね」

「よかった」

渋谷さんは私に「え？」とびっくりした風な瞳を向けた。

「あそこのふたり席空いてるわ。席とってくるわね」

広い多数がけのテーブルは、ほとんどが大学生の人たちで埋まっていた。大学生はたいていがトレーナーとジーンズ姿だったのですぐに見分けがついた。文句言われそうなのですみっこを選ぶのは、中学生としての世の習いだった。おにぎりとジュースを買って私は席に戻った。渋谷さんも同じくたらこのおにぎりを一個買って席についた。女子だし、あまりたくさん食べるつもりはなかった。

「渋谷さん、あのね」

おにぎりを半分に割り、ひとつぶずつお米を口に入れながら、私は切り出すタイミングを計った。うちの弟の話とか、髪形の話とか、女子っぽい話がなかなか途切れなかった。

思い切っていくしかない。

「昨日、風見さんから聞いたの」

すべて喉に流し込んだ後、私は口を切った。

「小学校の時のこと、教えてもらったの」

驚きは見せなかった代わりに、渋谷さんは無表情に私を見つめかえした。それだけで十分、動揺のしるしだと思った。

「昨日、私、新井林くんにはたかれて泣いちゃったでしょう。かっとなるらいつもああなの。だからつい、がまんできなくてごめんなさい」

「でも男子が暴力をふるうなんて最低よ」

健吾の悪口に持っていかれたくないので、私は素早く主導権を握った。

「それで風見さん、心配してくれて、いろいろ話してくれたのよ」

「そうなの、またあの子のことだから、大げさにいろんなことしゃべったんでしょうね」

まただ。やはり風見さんを見下すような言い方だ。注意せよ。自分にささやく。

「ううん、悪口は言ってなかったわ」

また風見さんを肴にした悪口の応酬になりそうだった。気を付けなくちゃ。なんとなくそう思った。

「たぶん事実関係は全部聞かせてもらったと思うのだけど」

「そう、全部？」

少し気が立っているような返事が返ってきた。ほんのわずかだけ。

「きっと風見さん、渋谷さんのことが大好きなのね。本当の親友だと思っているんだなって」

「そう思わせるようにしているから当然じゃない」

渋谷さんは指先で、おにぎりを包んでいたビニールを手の中で丸めた。あせっているって感じがした。

「そうなの、渋谷さんはそう思ってるのね」

「何言ってたのかわからないけど、佐賀さんはそれを信じたの」

「わからないわ、でもね、風見さんはいいことしか話してなくて、どう答えたらいいかわからなかったの」

私は言葉をゆっくりと選びながら、首を傾げて時間を稼いだ。

「風見さんがどうやって渋谷さんと友だちになったのかとか、生徒会副会長に立候補するきっかけとか。本当にいいことばかりなの」

反応を見た。渋谷さんは水を口に持っていった。視線は私から動かさなかった。

「だから、本当に、風見さんは渋谷さんのことが好きなんだなって思ったのよ」

「あの子はね、誰にでもそうなんだけど、人に受けるためならなんでもするのよ。佐賀さんのことが好きだから、私はいい人なのよってアピールしようとするのよ」

半分当たっているとは思う。でもすでに風見さんから先に事情を聞いている私はその言葉もまゆつばものとして受け取ってしまう。

「そうかしら」

私はもう一度反対側に首を傾げた。

「親友になる契約を結んでいる」と渋谷さんは言う。そこには軽蔑の感情しかない。

風見さんの言葉を信じたくなるのは、そこに本物の「友情」の匂いが漂うから。

「もうひとつ聞いていい？」

「なに？」

だんだん刺が増えている。ひとくち、水をふくんだ。心を落ち着けて。

「きっと、大変だったんだなって私、思ったの。渋谷くんが」

「え？」

「本当はああいうタイプの人、友だちにしたくなかったんだらうなって思って」

一瞬だけ渋谷さんの眼がひょっこりになった。

——やはりそうなんだ。

私は確信した。続けた。

「風見さんが転校してきた時、渋谷さん、なんとかしたかったんでしょ」

「なんとかってどういうこと？」

いまや完全に刺だらけの言葉が飛んできた。おなかに力を入れた。

「自分のことばかり見てほしがってる困った人を、風見さんとくっつけたかったんでしょ？」

つりあいが取れてるから、きっと仲良くなれるって見抜いたのかしら」

「佐賀さん、何をあの子に言われたのかわからないけど、すべてを信じちゃだめよ」

「うん、わかってるわ」

頷きながら、それでも私は言い切った。

「その問題の女子の話聞かせてもらって思ったの。その人、梨南ちゃんとそっくりな子だなんて。だからきっと、渋谷さんもそういう子と友だちやめたかったんだろうし、そのためにチャンスをうかがってたのかなって思ったの」

しばらく口を閉ざした。渋谷さんの反応を待った。

「そうかもしれない」

「やはり？」

「転校してきた時の、風見さんの態度がね、あまりにも受け狙いでクラスのみんながうんざりしていたのを感じてはいたの。だってそうよ、いきなり『私は風見鶏百合子でございまーす！』なんて、笑っていいのか悪いのかわからない自己紹介したのよ」

想像はつく。喉の奥で笑った。

「学校の雰囲気とキャラクターが合わなかったといえばそれまでだけど、私としてはあまり積極的に友だちになりたいとは思えなかったのよ。わかるでしょ。一言で言うと下品なの」

「だいたいわかるわ」

相槌を打った。

「そしたら、たまたま問題になった子が風見さんに興味を持ったみたいで、近づいていったの。私たちは『あーそうなんだ』って眺めていただけ。仲良くなるんだったらいいんじゃないのってね」

「でも、その女子は風見さんにくっつけられるのをいやがったの？」

「きっと同じタイプの間が嫌いなのよ。変よね。自分にそっくりな人見ると腹が立っちゃうなんて。最初のうちは仲良くふたりで給食食べていたりしたけど、ふたりとも私のいるグループに入りたがってしょうがなかったから適当に付き合っていたら、いきなり濡れ衣着せられてしまったのよ。ひがまないでって言いたいわよね」

やはり事実関係は私の読み通りだったのだろう。

でも、これって認めてしまっているものだろうか。渋谷さんはここで何をしたいのだろうか。私も少し不安を感じてきた。もっと力強く「違う違う！」と言い張るものだと思っていたのだけでも。ある程度本音を伝えた方がうまくいくと判断したのだろうか。

「私も、渋谷さんの気持ちがわかるつもりよ」

少し様子見しながら言い直した。

「きっと大変だったのね。だってその問題の女子、梨南ちゃんにそっくりなもの。渋谷さん、もっとうまくやればよかったのにな、って思うわ」

いつだったか、渋谷さんに同じことを言われたことがある。どうして梨南ちゃんを早い段階で斬らなかったのかと。今思えばそれは、自分がそれをしようとした証なのだろう。ただそれは渋谷さんの場合成功しなかっただけだ。それどころか余計なお荷物まで背負わされてしまったとい

うわけで、さぞいらだったことだろう。今渋谷さんが言った「同じタイプの間が嫌い」だとしたら、同じ経験をしている私はさぞむかつく存在だっただろう。

「でも、まあ、あの子も悪い性格じゃないし。それはわかっているのよ」

「そうね」

「ただね、同じことしている子同士がいがみ合っているうちに、とぼっちりが私の方へ飛んできたってわけ。もともと私のことが嫌いだったのかもしれないけど、勝手にいじめられたと思っ込んで他の友だちに言いふらすのはやめてほしかったわ」

「昨日、風見さんが立村先輩に言い放ったことと同じかしら」

呆然として立ちすくんでいた立村先輩の様子を見たわけでもないのに、なぜか感じ取ってしまったあの日の空気。

「ほんと、よく先輩に恥をかかせるわね。あきれてしまうわよ。あの時と一緒によ。ああ、またやっちゃったかって思ってみていたけれど、ほんといらいらしてしまうのね」

「梨南ちゃんに対してもそうだったのかしら？」

「そう思うわ。きっとそっくりなものを感じたのよ。気に入らないなら無視すればいいのに」

——そうか、あの時のように。

両方の言い分、どちらを信じるべきか。迷った。

どちらの気持ちがわかるだろう。

私はどちら側の人間だろう。

もし渋谷さんの言うことを信じるならば、風見さんが悪目だちしすぎていて、まともな女子なら近寄りたくないと感じてしまったというのが真相だろう。もし、風見さんとその女子が同類同士だと認めて仲良くしていたら、とぼっちりを受けることもなく、無理やり「親友」になることもなかったわけだ。しかし、今の渋谷さんは「ナミー」とあまりセンスのよくないあだ名で呼ばれている。「親友」の関係だ。

それは本当に、彼女の求めたものなのだろうか。

しかたなくそうするしかなかったのだろうか。

「渋谷さん、私ね、もし渋谷さんの立場だとしたらどうしていたかなって思ったの」

一度水を取りに行き、呼吸を整えた。目の前の渋谷さんはまだ言い足りなさそうだったが無視して続けた。

「ううん、きっと私、同じ経験していたのよ。ただ渋谷さんと違うのは、私が梨南ちゃんを受け入れてしまったことなの。私ももし、同じように梨南ちゃんをつりあいの取れる転校生が来ていたら、押し付けて逃げていたと思うし、どうしてそうしなかったのかなって今でも思うわ」

「そうね、できればそうしたかったわ」

だんだん安心してきた様子。ふたりで話している時の渋谷さんに戻ってきた。

「でしょう？ あの頃の私は、梨南ちゃんに逆らったら大変なことになると思っていたからそうしていたけど、でも今なら私、きっちり言うと思うの。迷惑だから、別の人と仲良くしてねって」

大きく頷いた渋谷さんに、

「私、最初からそういうべきだったと思うの。小学校に入ってまもなく、梨南ちゃんが私をがんじがらめにしようとする前に、そういうのがいやだ、って断るべきだったの。そうっておけば梨南ちゃんは私にはりつかないで、もっと自分を可愛がってくれる人を選んで友だちになったはずよ。でも、今の風見さんの話聞いていると、簡単にあきらめてくれるわけではないし、困るわね」

共感しているように続けた。

佐川さんに相談したいと無理なことを思う。

生徒会役員としてこれからやっていく以上、わだかまりのあるまま一年間過ごしたくない。今までの私だったら、梨南ちゃんに対してしたのと同じように、相手の顔色を見て合わせ、ご機嫌取りをしているだろう。むくれられて八つ当たりされるよりはそれの方が楽だろうと判断したからだった。

そして、渋谷さんに対しても同じだった。

風見さんはおそらく、私に渋谷さんを守らせたいと思っているだろう。私の直感が正しければ、風見さんは純粋に渋谷さんを親友だと思っている。と同時に渋谷さんがこうやって私に悪口を言っていることも知っているだろう。口ぶりからそんな感じだった。それでも友だちでいるのは、それなりに覚悟があるのだろう。

けど、そんな覚悟、私に求められても困る。

「家庭の事情でどうしてもプライドを守らなくてはならないナミー」を、風見さんと一緒に守るなんてことは、私はどうしてもしたくなかった。

目の前の渋谷さんが、一瞬、梨南ちゃんに見えた。

「あの、それと昨日少し気になったことがあったの」

「何？ またあの子ばかなこと言ったわけ？」

渋谷さんは一気に水を飲み干した。

「風見さんがちらっと話していたのだけど、間違っていたらごめんなさい」

一呼吸置いた。口が勝手に回っていた。

「渋谷さん、霧島くんのこと、好きなのかなって。私も同じ風に見えてたからそう思ったのだけど」

渋谷さんの置いたコップが、ほんの少しだけかちんと音を立てた。

「そんなことまたばかげたこと」

「うん、そうね。風見さんも『もしかしたら』って話していたから、違うかもとは思ったのだけど」

まずは自分を守る言葉を間にはさみこみ、

「でも、もしそうだとしたら、今の渋谷さんは危険なポジションにいるなって気はしたの。私も、健吾と付き合ってるから男子がどういう風に考えやすいのかとか、どういう風に扱えば機嫌よくなるのかとか、大体わかっているから」

自分の話に持ち込んでみた。どうだろう。渋谷さん、私みたいにお付き合いしたことあるのだろうか。風見さんは何も言っていなかったけど。

「私がなぜ、健吾にあんな酷いことされてもがまんしていたかわかる？」

「はたかれたことよね。許せないわよね」

「そう思うのがふつうだと思うわ。でも、あそこでうまく押さえていたから、たぶん健吾は評議委員長を奪う決断をしてくれたのだと思うの」

切り札を、おずおずと出してみた。

賭けだった。

渋谷さんがいきなり身を乗り出した。大きく目を見開いていた。

「あの時もし、私が何か言い返していたとしたら、健吾はただかあっとなってまた騒ぎ立てただけだと思うわ。もともとそうなの。健吾は何かあるとすぐパニックになってしまって、変なことばかりするの。本当は叩かれたくなかったけど、少し落ち着けばきっとまともに物事考えられる人だってわかっていたから、だから、私、風見さんと一緒に逃げたの。あの後、生徒会室で何かあったの？」

健吾が何も言わないのでそのあたりの事情はわからなかった。聞き出したかった。

「わからないわよ。会長とふたりで廊下にさっさと出てしまったから」

そうか、藤沖会長と健吾との間に何か、内密の約束が交わされたのかもしれない。あとで探りを入れてみよう。

「そうなの。その間に決めたのかしら。わからないけど健吾にはありがちなことなのよ。きっと健吾は、私と同等の立場に立たないといやだと思って、それで後期評議委員長を立村先輩から堂々と奪おうと決めたのだと思うの」

あてずっぽだけど、思いつくまま述べてみた。

「そう考えると、これからどうすればいいか、大体見えてくるの。私がつい、生徒会長に立候補してしまったのは、単純に言えば梨南ちゃんをこれ以上傷つけないからなの。でも、もし渋谷さんと霧島くんが評議委員会から権力を奪いたいのだったら、私を利用してくれればいいと思ったの」

「佐賀さんを、利用？」

少し言葉に甘味が含まれていた。

「そうなの。これから評議委員会は委員長改選を建前上行うはずだけど、誰もがまだ立村先輩の連投だと思っているはずなの。でも、健吾は私より上の立場に立つために、絶対評議委員長を狙うはずよ。男子のプライドなのかしら。女子よりも上でないといやみたいなの」

「最低ね、それも」

「そう思うわ。健吾って単純だわ。でも、もしそうだとしたら、健吾の性格を知らない霧島くんよりも、それなりに扱い方を知っている私に対応した方がもしかしたらうまくいくかもって思ったの。私、渋谷さんのおかげで、強くなれたから、どうしても何かをしたいの。感謝してるの。だからなの、お願い、手伝わせて」

数珠繋ぎの言葉がどんどん流れていく。どうしてだろう。佐川さんになったみたい。

「それに、霧島くんのことだけど、私評議委員だったから、お姉さんの霧島先輩を知っているわ。いろいろ意地悪されたけど、恨みはないの。だってもともと、この学校にいるべき人じゃなかったのだから、気にする必要はないと思っているの」

霧島くんの話をすると、また目がきろっと光った。やはり風見さんの読みは当たっているのだろう。心にメモしておかなくては。

「ただその影響がきっと、霧島くんに出ているのかなという気はするのよ。渋谷さん、霧島くんってどうして年上の女子に対してきついのか、わかる？」

「お姉さんの影響？」

「そう、それは絶対あると思うの」

断言した。

「だから、上からものを言われたり、頭が悪い女子はきっと嫌いだと思うの。お姉さんを思い出すからじゃないかしら。本当だったらやはり霧島くんを会長に立候補させればよかったけど、私が邪魔をしてしまった以上責任を取るつもり。きっと怒っているわ」

あえて何も言わなかったのは、渋谷さんもその後遺症を感じているからだろう。

「私、きっと霧島くんにはばかにされていると思うし、年上の女子としても軽蔑されちゃうかもしれないわ。だからきちんと、霧島くんには話をするわ。一応、名前だけは私が会長だけど、本来は霧島くんであり渋谷さんがなるべきはずだったんだってこと、言うわ」

「そんなこと言わなくても」

戸惑う言葉をさえぎった。私が言い切らなくてはならないこと、まだある。

「ううん、そうなの。私は象徴会長なんだってこと、ちゃんと説明するわ。そして、これから先ふたりのために精一杯努力するわって言うわ。私、渋谷さんがどれだけ素敵な人なのか知っているもの。そうすればきっと」

目に少し力が入ってしまった。私はテーブルの上に片手を置いた。そうしないと言葉が乱れてしまいそうだった。

「男子って基本的には健吾と同じ、プライドが高いと思うの。きっと霧島くん納得すれば、健吾のように渋谷さんに協力してくれると思うし、尽くしてくれるはずよ。どうか支えてほしいの」

ゆっくりと、渋谷さんの口角が下がっていった。

私は畳み掛けた。

「風見さん言ってたわ。たとえ渋谷さんがどんな風に思おうとも、友だちだと思っているって。今、渋谷さんが言ったことをすべて気が付いているのね。私、風見さんほどの覚悟はないけれどいろいろなこと、協力するわ」

渋谷さんの表情がこわばり、やがてうつむき、鼻をすするようなしぐさをした。私から目をそらしたまま、片頬に手を当てた。まるでぶたれたみたいだった。かすかに目を潤ませたまま何度も手の甲で拭いた。無理に笑顔をこしらえながら渋谷さんは呟いた。

「ごめんなさい、なにか変ね」

理由を私は尋ねなかった。

ふたりに語り合う機会はいくらでもある。その時答え合わせすればいいことだった。

日曜日、私は駅前の「佐川書店」の前で躊躇しながら立っていた。

台風後のお天気は相変わらず秋晴れそのもので、来週いっぱい続くと天気予報では流れていた。今日の服装は、薄い茶色のワンピースにチェックのブレザーを羽織り、カモフラージュ用にエレクトーンのおけいこに使うかばんをぶら下げるといふ格好だった。たまたま、おけいこ帰りに立ち寄っただけ、そう見せたかった。もし青大附中の知っている人に見られても、これならいくらでもいいわけができるから。

入っていけば、きっとあの人に会えるだろう。

佐川さんはいつも、休みの日はおうちのお手伝いをしているそうだ。もうそろそろ公立高校入試の準備で忙しいはずなのに、おうちの人たちは決して休ませてくれないそうだった。たぶん、今入っていけば、レジにいるはずだ。そこで声をかけて、あの人の手が空くまで立ち読みをしていけばいい。

ほんとに、単純なことなのに、なぜか自動ドアのステップに足をかけることができない。

私はしばらくきらきら光る自動ドアのガラスを見つめて、手提げの柄を握り締めていた。

——どうして連絡してくれなかったんだろう。

ずっと待っていたのに。佐川さんが答えを出してくれるのを、信じて待っていたのに。

私は結局ひとりで全部決めざるを得なかった。

一週間前なら決して思いつかなかった、生徒会長への立候補。

健吾が激昂し、周囲が絶句してしまうようなあの結末を、私は佐川さんに伝えたかった。そして、それが正しかったのかどうか、なによりも佐川さんは私にどうさせたかったのか、あの人の口から聞き出したかった。

私は間違っていないのだろうか、あれでよかったのだろうか、と。

「佐賀さん、ですか？」

背中から声をかけられ、私は振り返った。

「はい、そうです」

お下げ髪の、たぶん同じくらいの年頃の女子が、新聞紙で包んだ花束を持って静かに立っていた。一瞬誰かわからなかった。髪形ですぐにぴんときた。何度か会ったことがある、あの人だった。

「水野さんですか」

しまった、先輩とつけなくちゃいけなかったかしら。慌ててしまった私に、その人はこっくりと頷いた。

「佐川くんを待ってるんですか？」

少しぴりっと響いたのは「佐川くん」という呼び方。驚くことはないのに。水野さんと佐川さんとは同学年なのだから、「くん」付けでも、もしかしたら呼び捨てでも違和感何もないのに。私は頷いた。

「そう、今ならいるんじゃないかしら」

「でも、お忙しいと思います」

ちょうど十二時過ぎたばかり。ガラスの自動ドアをすかした向こうには、親子連れやら高校生やら小学生やら、いっぱい人が群がっているのが見えた。奥にいるはずの佐川さんは見えなかった。

「大丈夫だと思うわ。だって佐川くんは、時間作ってくれるはずなもの」

また「佐川くん」の響きに、私は身をすくめた。

「私が呼んできてあげるから、少し待っててね」

「ありがとうございます」

堅苦しい返事しかできず、私は邪魔にならないところに場所を移動した。

すでに水野さんは、佐川さんからすべての事情を聞いて、私たちをカモフラージュするためにいろいろと動いてくれているはず。そう佐川さんからは聞いている。佐川さんと水野さんは学校でも公認のカップルとして行動する一方、青大附中がらみの問題や私との連絡などをこっそりしてくれるはずだとか。ただ、私と佐川さんとがこっそり会って話をしていることを知っているかどうかはわからない。今の態度だと、すべて了解済みなのだろうか。

どちらにしても、会わないで帰るつもりはなかった。そっと、ガラスの自動ドアが開いたり閉まったりするのを眺めた。なかなか出てこない佐川さん。私ともう会いたくないのだろうか。一切連絡をくれなかったのは、その意志そのものだったのだろうか。

「佐賀さん」

少しこわばった雰囲気の声に、戸惑いながらも振り返った。

佐川さんが立っていた。

白いトレーナーにデニムシャツの衿と裾を覗かせた、ジーンズ姿。

この前会った時とほとんど姿形は変わっていないのに、なぜか声だけが心持ち低くなっていた。男子の声変わり、なのだろうか。健吾よりもがらがら声ではないけど、太い弦をはじいたような落ち着いた響きが耳に染みた。

「このチケットで、この前行った喫茶店で、待ってて」

汽車の切符みたいな細いチケットを手渡された。

「いいんですか？」

問い掛けると、佐川さんにはこりともせず頷いた。やはり、機嫌が悪そうだった。

「俺も、佐賀さんに話したいことがあるから。ごめん、ちょっとだけ待ってて」

周囲を見渡し、私にもう一度佐川さんは確認するように、

「今日ここに来ること、誰かに言った？」

首を振った。まさか、そんなこと、どうして。

「健吾くんにも話してないよね」

「もちろんです」

「知ってる人には会わなかった？ さっきたん以外に」

強く首を振った。佐川さんは少しだけ口元を緩めた。

「だったらいい。とにかく、行ってから話す」

佐川さんは素早く背を向けると、お店の裏の方へ回っていった。

指示された喫茶店は、今年の二月、エレクトーンのおけいこの帰り、発作的に佐川さん呼び出して連れて行ってもらったところだった。確か、呼び出す理由に、エレクトーンのグレード試験で失敗したからということ告げた記憶がある。実際、調子がよくなかったのは確かだったけど、その後試験には通っていたことを私は話していない。ただ、外が真っ暗で雷が鳴り響き、突然何もかもが怖くなってしまい、以前貰っていたレシートにプリントされていた電話番号にダイヤルしてしまっただけだった。

傘を持って迎えにきてくれた佐川さんは、今とは違ってまだ声も高くて、私と同級生みたいな感じだった。もちろんそれは話すまでのことだけでも、迎えてくれた顔を見つけたとき思わず泣きそうになったことを覚えていた。健吾に連絡してもよかったのに、どうしてあの時佐川さんに会いたかったのか、わかるようでわからなかった。

一人で入る勇気がなかなかなかったけれど、ちゃんとチケットも持っているし、怖いことはないはず。今にも壊れそうな木目まるだしの小屋の戸を開けた。やはりこの前と同じ、暗い照明の中だった。奥で隠れていたかった。ドキドキしながら一番奥の席に座った。お客さんのほとんどは、うちのお父さんたちと同じくらいの年代の人ばかりだった。

ウェイトレスさんがメニューを持ってきてくれた。

ココアを注文した。チケットを見せて問題ないかどうか確認だけした。

——佐川さん、いつもと違う。

カモフラージュ用のかばんから、エレクトーンの譜面を読んでいる振りをしながら、私は佐川さんと水野さんの顔を思い浮かべた。あの二人が水鳥中学では公認のカップル。たぶん健吾と私のような感じで見られているのかと思うと、届いたココアも苦く感じる。

——私のこと、どうでもよくなったのかしら。

もう一度胸を抑えてみた。佐川さんとふたり、雷の鳴り響く中語らった時、ずっと私のことだけ見つめてくれていた。梨南ちゃんのこと、立村委員長のこと、その他青大附中と水鳥中学を巡るいろいろな問題のこと、たくさんおしゃべりしたけれど、一瞬だって佐川さんは私から目をそらしたりしなかった。

でも、さっきの態度は、違う。

——水野さんだって、私になんで親切にしてくれたんだろう。

私と連絡を取り合っていることが他の人たちに知られると、とんでもないことになるから、そ

の風除けに水野さんがいろいろ手伝ってくれていることは知っている。梨南ちゃんが関崎さんにプレゼントした葉牡丹を、本当は水野さんが世話をしていることも聞いている。

そこまでなぜ、手伝ってくれたりするのだろう。

私がずっと生徒会関連の出来事で混乱している間に、もしかしたら水野さんともっと何かの進展があったとしたら。他の学校で、ひとつ年下の女子になんて、かまっている暇なんてなくなったとしたら？

気温に比べてココアが熱すぎた。オレンジジュースかミックスジュースにすればよかった。

苦味の残るココアをすすりながら、少しだけ震えていた。

——私に話したいことがあるって、なんだろう。

思ったよりも待たなかった。佐川さんが息を切らして現れたのは五分くらい経ってからだった。きょろきょろ見渡した後、すぐに私のいるところへ小走りでやってきた。目の前の席に着くと、ウエートレスさんに、

「すみません、アイスコーヒーください」

やっぱりチケットを手渡した。私のカップを覗き込み、

「ごめん、待った？」

私は首を振った。無理に笑みをこしらえた。つい耳に手がいってしまう。お食事中に髪の毛を弄ってはいけないと叱られそう。

「佐川さん、私」

「聞いている、全部知ってる」

アイスコーヒーのグラスが届く前に、佐川さんはじっと思いつめた風に私を見つめた。

口を開こうとしたとたん、「お持ちしました」とウエートレスさんの手がテーブルに伸びた。言葉を飲み込まざるを得なかったのだろう。テーブルを指先でつんと叩いた。

「俺がすべて悪かったんだ」

アイスコーヒーのストローに口をつけず、佐川さんはうつむきながらつぶやいた。

「こんな奴の、どこが天才参謀だって」

——天才参謀。

健吾も、佐川さんのことをそう評していた。

——あの人、ぜってえ公立よか青大附中で活躍すべき人だと思うぞ。佐賀、お前もそう思うだろ？ あんな立村なんかと違ってな。

当時の健吾は立村先輩に敬称をつけなかった。最初から佐川さんには「さん」をつけていた。

「どうしてですか？」

おずおず、尋ねてみた。

「佐賀さん、生徒会長、立候補、したんだろ」

知っているということは、たぶん隅から隅まで事情を把握しているということだろう。佐川さんの使う「知っている」はそういうことを意味する。

「なりゆきなんです」

「佐賀さんなら、できるよきっと」

「でも、私」

「大丈夫。佐賀さんなら、絶対に大丈夫だよ」

ぜんぜん太鼓判押されているように聞こえない。苦しそうな佐川さん。声がさらにぎすぎすしてきている。

「本当は最初から、そういう形で計画すればよかったのかな」

「計画ってなんですか？ 佐川さん、私を本当はどうしたかったんですか？」

佐川さんは私の選ぶ役職が「会長」だとは思っていなかったらしい。そうさせる気はなかったようだ。やはり私は手を出すべきではなかったのだろうか。書記か、せめて副会長であきらめるべきだったのだろうか。怖い、不安がよぎる。意味もなくココアをすすった。やはり苦かった。

「私、佐川さんが連絡くださるのを、毎日、毎日待っていたんです。佐川さんだったら、私がどの役職を選べばいいか、わかっているはずだったから。でも、どうしてなんですか？ 私、ずっと待ってたのに」

喉に染みて咳き込みそうになった。自然と涙が溜まりそうだった。

「どうして佐川さん、私に手紙を送ってくださらなかったんですか」

責めてはいけない。怒ってはいけない。自分に言い聞かせたいのに、できない。

「私だって、こんなことになるなんて、思っていなかったのに」

しばらく私は顔を覆ったままでいた。そんなに涙があふれたわけではなく、ちょっとだけ切なくなっただけのことだった。でも、顔を見られたくなかった。自己嫌悪だった。

「佐賀さん、ごめん」

ふっと顔をあげると、佐川さんのコーヒーがまだ手付かずのままだった。氷がどんどん溶けていって、かえって量が増えていた。

「俺もそうすればよかった」

声が少し詰っている様子だった。まさか、佐川さん、泣いているなんてこと。だって男子なのに、健吾みたいな人じゃないのに。私は恐る恐る覗き込んだ。すぐに佐川さんは横を向いた。

「俺が直接健吾くんと話をすればよかったんだ」

「健吾、と？」

思いがけない相手の名前に、思わずカップを取り落としそうになる。

「健吾くんに、はっきりと、そう言えばよかったんだ」

「何をですか？」

どきどきしてくる理由がわからず、私は声を潜めた。

「いいよ、言ったって言い訳になるだけだよ」

「佐川さんは、私に言い訳する義務があると思います」

首を振りながら私は言い募った。

「お願いします、教えてください」

——佐川さんが私のことを忘れていて、連絡しなかったわけではないってこと。

——健吾と何かかかわりがあるってこと。

——私が立候補するってことは、佐川さんにとって予想外の出来事だったってこと。

理由を聞かぬまま、すべてを終わらせたくはなかった。

佐川さんはしばらく黙っていた。私をじっと、黒目勝ちの大きな瞳で見つめていた。見返しているうちに気付いた。佐川さんの表情がだんだん立村先輩のものに似てきていることを。それも梨南ちゃんを時折見つめている時の重く、静かなものに近いことを。

どうしてそんな目で、私を見るのだろう。

「たぶんこれが最後になるよな」

ひとりごちた後、佐川さんは背を伸ばし、初めてアイスコーヒーに刺さったストローへ口をつけた。一口すすり、いつものきよときよとしたいたずらっぽい瞳に戻した。

「俺、健吾くんを青大附中の生徒会長に立候補させるつもりだったんだ」

——健吾を？

生徒会立候補受付後の、いつもよりも激しく憤った健吾の顔が浮かび上がった。

私は首を振った。何かを言いたかったのだけど、言葉にならない。

「佐賀さんがね、渋谷さんって人に誘われて生徒会に入るのはいいことだと思ってたんだ。けど、生徒会に一度も関係したことがない人がいきなり割り込んでいくというのは、正直大変だろうなって思ってたよ。ほら、うちの生徒会だって、もし生徒会長の立候補者が俺たちと同じ学年の奴だったとしたら、副会長のおとひっちゃんや総田とぶつかり合って大変だったんじゃないかな。その点、一学年下の内川が会長になったのは、結局よかったんじゃないかなって俺は思ってる。一年だったら、なんも知らなくて当然だし、むしろそういう奴だからこそおとひっちゃんたち生徒会役員たちはめんこがって仲間に入れようとするしさ」

言葉を切った。またストローでアイスコーヒーをすすった。

「佐賀さんは今、二年だろ。もし一年のうちだったら先輩たちに教えてもらえるけど、二年でいきなりということだったら、きっとベテランの生徒会役員たちと人間関係苦労するかもな。そんな気がしたんだ。もちろんその渋谷さんって人がかばってくれるとは思うけど、女子って怖いらしいしさ。それに佐賀さんにはもう二度と、杉本さんの時のような苦労をしてほしくなかったんだ。渋谷さんって人との付き合いが下手したら上下関係になっちゃったら、また同じことになるんじゃないかって思って、俺なりに考えたんだけど」

「でも、なぜ健吾？」

「うん、健吾くんは次期評議委員長なんだろ？」

私はあいまいに頷いた。現在の段階では、の話だから。

「立村が指名したんだろ？」

「一応、そういうことになってます」

「けど、これから先は生徒会に権限が移るってことだろ？」

「はい」

「だったら、難破船状態の評議委員会をずっとひっぱっていくよりも、思い切って生徒会長に立候補した方がいいと俺は思ったんだ」

佐川さんの飲むスピードが速い。もう、水面から氷が丸ごと顔を出している。

「生徒会長に健吾が立候補、ですか」

「うん、立村の顔に泥を塗ることになるけれど、どうせ三年生はあと半年で卒業だよ。次期評議委員長が誰になったとしても、健吾くん以上の奴はいないだろう？」

問われて私は頷いた。付き合っているから言うわけではなかった。健吾にかなう男子は、まずいない。

「そのまま生徒会が評議委員会を吸収していけばいいんだ。そうすれば立村がどんなにがんばったって、時間の問題。あっさり『青大附中版大政奉還』は今年中に完了するよ。それで健吾くんが会長に立候補した段階で、佐賀さんが副会長に出ればいいんじゃないかって」

「私が副会長、ですか？」

佐川さんは目を伏せるようにして頷いた。

「健吾くんがいれば、きっと佐賀さんは他のベテラン生徒会役員たちにいじめられても守られるしね。もし立村や杉本さんが嫌がらせをしようとしても、健吾くんが黙っちゃいないよ。それに水鳥中学生徒会との交流も、評議委員会を通すんじゃなくて生徒会同士の流れになるし、あとはうちの内川会長と仲良くやってくれればそれでいい。結構内川と健吾くん、仲よかったしね」

そうだった。健吾は内川会長と電話掛け合う仲らしい。

「でも、健吾は立候補しようとしませんでした」

「そうだよね」

佐川さんはため息をつき、一気に黒い水分をストローで吸い取った。

「内川に説得させるつもりだったんだけど、だめだった。やはり、最初から俺が健吾くんと話をするべきだったんだ」

「どういうことですか？」

言っている意味がわからず、私は両手でカップを支えた。

「俺の立場、知ってるよね？ 俺、生徒会となんも関係ないんだよ。おとひっちゃんにも絶対にかかわるなって言われてるんだ」

それは聞いている。頷いた。

「だから、俺がもし健吾くんに伝えるとすれば、生徒会役員を通して話をするしかないんだ」

「どうやって話をされたのですか？」

苦々しい表情で、また佐川さんは項垂れた。

「副会長の総田に協力してもらって、伝言で内川に話をしたんだ。俺が提案したんじゃなくて、総田が考えたってことにしてもらって。できれば、生徒会長は健吾くんがいいと水鳥側では思っているとか、評議委員長としてよりも生徒会長として付き合った方が連絡しやすいんだとか。内川もそれなりにわかっていたとは思う。けど、やっぱり健吾くんはまっすぐだろ。正々堂々としてるだろ。俺、健吾くんがあんなにまじめで義理堅いおとひっちゃんタイプだとは思わなかったんだ」

「関崎さん、タイプ？」

確かに長距離は強そうだけど。でも、あまり認めたくない言葉だった。私、関崎さんはタイプじゃない。

「健吾くん言ったらしいんだ。これも内川、総田経由で聞いたことだけだね」

首を細かく振りながら、佐川さんは一息で呟いた。

「『俺を評価してくれた立村さんを裏切るわけにはいかない』って」

すっかりぬるくなったココアのカップを握り締めたまま、私は今の言葉の意をつかもうとした。

佐川さんが私のために一番いい方法を選んで、誰にも頭を下げることなく守られるポジションを見つけ出してくれた、そのことがまずは胸に染み入った。私は見捨てられたわけではなかったのだ。

健吾がもし生徒会長となれば、対抗馬が霧島くんであろうが渋谷さんであろうが勝ち目はないだろう。評議委員長としての座をあえて捨ててまで勝負にしようとした行為を、全校生徒はきつと認めてくれるだろう。実績だってたんとある。

もちろん評議委員会はもめるかもしれないけれども、すでに単なる「委員会」への路をひた走っているのだから、むしろそれは自然な行動と取られるだろう。私も、もし健吾のようにたくましい男子だったとしたらそうしているだろう。

その上で健吾の下に私がひざまずく格好になれば、いつものことだ、必ず両腕で守ってくれるだろう。かっとなったら何をするかわからないけれど、私のことを大切にしたいと思っていることだけは百パーセント確実だ。完璧なシナリオのはずだった。

健吾が会長となった段階で、私はその中で一番上のポジション、つまり副会長を選び立候補すればよい。たとえ渋谷さんと並んだとしても、健吾の寵愛が私に向かっている以上、彼女の下に立つことはない。また渋谷さんも私が上に立つわけではないのだから、余計ないらいらを抱えないですむはずだった。

——佐川さん、やはり、あなたの才能が欲しい。

佐川さんに一緒にいてほしい。どうして、健吾は佐川さんが組み立てたこの案に乗れなかったのだろうか。

もちろん、健吾らしい言葉だとは思う。

——俺を評価してくれた立村さんを裏切るわけにはいかない。

人を裏切ったりするなんて、健吾の性格ではできないだろう。

正々堂々とまっすぐに生きる健吾だからこそ。でも、健吾に問いたい。

——評議委員会なんて、もう、終わっているのに。どうしてプライド抱えてしがみついているの？ どうして、そこから抜け出せるチャンスを佐川さんが与えてくれたのに、どうでもいい立村先輩なんか義理立てて、残ろうとするの？

「内川・総田経由で聞いたことだけど、佐賀さんが生徒会長に立候補した段階で決意したみたい

なんだよね。評議委員長の座を後期奪い取るってことをね」

頭の奥がしびれたまま佐川さんの言葉を聞いていた。

「佐賀さんが立候補した経緯についても、一応話は聞いている。杉本さんを追っ払うためだったんだよね」

「はい」

安心した。ふっと声が出た。

「佐賀さんがたったひとりで、生徒会を守るために立ち上がったんだって健吾くんは思ってるよ。だから、すごく健吾くんショックだったみたいだけど、佐賀さんを守るために立村へ反旗を翻す決意をしたんだって。最初は先輩の立村を裏切れないって言ってたけど、佐賀さんの立場を見たらもうそんな甘ったれたことは言ってられないって。佐賀さんを守れるのは自分だけだから、後期の評議委員長に立候補して、邪魔な三年先輩たちを追っ払い、せめて佐賀さんが余計な気を使わずに会長としてやっていけるようにするってね。佐賀さんのことを、ほんとにあいつ、好きなんだね」

どう答えればいいのか。健吾が私を好きなこと、それを認めるのはたやすい。

でも、私は？

あの生臭いキスを、いきなり抱きしめられる汗臭い腕を、受け入れられるのだろうか。

「わかりません、そんなこと」

「男子同士、なんか、それはわかる」

「でも私」

「だから、もし評議委員長に健吾くんがなったら、あとはもう大船に乗った気持ちでいればいいよ。立村と対決することになった場合、正直、すごく大変だと思う。佐賀さんは立村をただの蠟人形昼行灯だと思っているかもしれないけど、あいつは杉本さんのためにだったら何でもやらかすし、人だって平気で張り飛ばす奴だ。たぶん、佐賀さんのことは目の敵にすると思う。だからできるだけ早く、評議委員会から隠居してもらった方がいいんだ」

「そうですね」

立村先輩の、梨南ちゃんに向けるやわらかい表情と思いつめた瞳。

私に対して冷ややかに見据える、凍ったまなざし。

「とにかく、そうなればもう、佐賀さんは安心して生徒会長になれるよ。俺の計画は狂ったけど、あとは健吾くんがいる。健吾くんがいれば、あとは言われた通りにやっていけばいいよ。俺よりもずっと、それの方がいい」

「佐川さんよりも、健吾の方がいい、ということですか？」

尋ねた自分の声が震えているのに、ぴくりとした。

「健吾がいれば、私、守られるってことでしょうか？」

「うん、そうだよ」

「佐川さん以上に、頼れるということですか？」

「だってそうでなくちゃ、付き合っていないんだろ」

いきなり語尾が投げやりになった。背筋が凍る。

「俺、公立だし、本当だったら青大附中のことになんて口出す権利ないんだ。健吾くんの方が絶対いいよ」

「よくありません、だって私」

また涙が溜まってきそうだった。でもこらえる。泣かない。

佐川さんはいらだちを隠さずにそっぽを向き、さらに続けた。

「佐賀さんだって、もしこうやって話しているところ、健吾くんに見られたらどうする？ 俺はいくらでも言い訳するけど、もし健吾くんに疑われたらどうする？ 健吾くん、命がけで守ろうとしてくれてるんだよ。俺みたいな、頭の悪い奴よりずっと頼りになるだろ？」

「どうしてそんなこと言うんですか！」

思わず叫びそうになり、両手で口を覆った。ここはふたりきりじゃない。ふたりきりだったらいくらでもしがみついて叫べるのに。

「私、健吾には内緒で佐川さんに会いに来てます。私がそうしたくて、来てるんです」

「でも、俺はそんなたいした奴じゃないんだよ。青潟工業に行くような奴なんだ。佐賀さんの周りでそういう奴いるか？ そんなレベルの低い学校進学したいなんて、佐賀さんの周りの人は思わないだろ？」

「いいえ、私は思います！」

話がこんがらがっているとわかっている。でも言わずにはいられない。何が公立進学なのだろう。何が職業科進学なのだろう。そんなの、関係ない。

「私は、佐川さんのようになりたいんです。佐川さんのように、鋭い頭脳が欲しいんです」

「鋭くないよ。俺、はっきり言って志望校すら受からないかもしれないんだよ」

「いいえ、立村先輩より、健吾より、梨南ちゃんより、ずっとずっと上に決まっています！」

前かがみになり、ぐいと佐川さんに密着したくなった。テーブルが邪魔すぎる。席を移動した。佐川さんの隣に座った。すっと窓際に身を引こうとする佐川さんを逃したくなかった。

「佐川さん、私と一緒に話をするのが、いやですか？」

目から涙がこぼれそうだった。必死に見開いてこらえた。

「私、佐川さんの邪魔、してますか？ 水野さんとのこと、邪魔してますか？」

「そんなことない！」

首を思いっきり振った佐川さん。少しだけ、呼吸が楽になった。

「さっきたんのことなんて関係ないよ」

「だったら、私を支えてください。私、生徒会長、どうやってやっていけばいいか、わからないんです。健吾が支えてくれるって佐川さん、おっしゃいますけど、そんなの無理です。だって健吾」

私は精一杯、低い声で呟いた。

「もう立村先輩と共感してるんです。だから、生徒会長に立候補してくれなかったんです！」

「佐賀さん、それは」

「いいえ、聞いてください。私、健吾がもしずっと立村先輩を軽蔑していたら、言われた通りにしていたかもしれませんが。健吾が平気で立村先輩を踏みつけて、追い払うことに何にも罪悪感感

じてなかったとしたら、私、そうしてました」

ころころっと一粒、頬に伝った。手の甲で押して拭いた。

「健吾はきっと、次期評議委員長に立候補すると思います。私にもそう言ってました。でも、健吾の性格だと、自分に正々堂々と接してくれた立村先輩を見下すことはもう二度としないような気がするんです。あの、梨南ちゃんに対してもE組に消えた段階で、どうでもいい人扱いするようになりましたし。小学校の頃の健吾だったらきっと命がけで守ってくれたでしょうが、今は違います。もしかしたら健吾、私に、立村先輩の味方をしろとかそんなこと言いそうで怖いんです」

「立村の味方をしろ、と？」

「そうです。佐川さんがおっしゃったように、健吾はまっすぐで曲がったことが嫌いです。さっさと生徒会に評議委員会を吸収させようとしても、立村先輩の義理でそれを引き伸ばすかもしれません。私、健吾に百パーセント守られる保証なんて、どこにもないんです！」

佐川さんはじっと私の顔を不思議そうに眺めていた。

「私、健吾がそういうこと言い出したら、どうすればいいかわからないんです。私が一番信頼できる人は、ひとりしかいないんです」

もうかたっぽの眼からも涙が転げ落ちた。一粒落ちるとまた一粒。両手で顔を覆った。バランス崩しそうになり、佐川さんの白いトレーナーに頭を持たせかけてしまった。健吾みたいに汗臭い匂いがしなかった。

「俺、ほんつとに、頭悪いんだよ」

「そんなこと絶対ないです！」

「青大附中の生徒会長を守れるだけの力、あるわけないよ」

「いいえ、今まで私を守ってくれました」

涙が次から次へと零れ落ちる。

「この前佐川さんが勇気付けてくれたから、私、女子の友だちがふたりできました。生徒会という居場所だってできました。梨南ちゃんのことを嫌っているってこと、教えてくれたから私、今の自分でいられるようになったんです。ずっとそうなんです。佐川さんがいなくなったら、私、どうしていいか、わからないんです。佐川さんがいてくれなかったら、どうすればいいんですか。私、健吾と別れてもいいんです。佐川さんが一緒にいてくださるなら」

「それはだめだよ！」

厳しい声に、はっと私は顔をあげた。

「健吾くんを敵に回したら、佐賀さん、本当に一人ぼっちになっちゃうよ」

「じゃあ、健吾を敵に回さないで、佐川さんと会うことはできないのですか？ 佐川さんならきっとわかっているはずですよ。私、佐川さんでないと、だめなんです」

まだ私には、佐川さんに相談しなくてはいけないことが山のようにある。

これからおそらく始まるであろう、立村先輩と健吾との評議委員長選挙。

まだよく理解できずにいる渋谷さんと風見さんとの関係。

梨南ちゃんの恋と逆恨みによるトラブルを防止するやりかた。

何よりも、私が生徒会長として立ち続けるために、どう振舞えばいいのかとか。

一年前の私は、自分が生徒会長として学校のために尽くす立場になるとは思ってもみなかった。ただ、梨南ちゃんという火の粉を振り払うのだけで精一杯だった。健吾に守られるのが当然とさえ思っていた。いやだと思うことを拒否することも、怖かった。

けど、佐川さんがすべて教えてくれた。

私が本当は梨南ちゃんのことを嫌っていることも、梨南ちゃんを「どうでもいい人」として扱うすべを、自分にとって大切な友だちを得る方法を、学校の成績では図れない鋭い才能のを見つけ方を。佐川さんがなんと言おうとも、絶対に手放したくなかった。

これから先、健吾と別れることになったとしても。

私が顔を押し付けるのを、佐川さんはしばらくそのままにさせてくれた。

そのままにくぐもった声で、

「ごめん。公立の模試の結果がすごく悪くてさ」

呟いた。

「佐賀さんに八つ当たりしちゃったね。ごめん」

言葉で答えるには涙が溜まりすぎていた。佐川さんの

「俺を、佐賀さんの天才参謀でいさせてくれる？」

唇を細く開き、私は佐川さんの腕にしがみついたまま、横顔を見上げた。

健吾だったらきっとしようとするであろうことを、佐川さんがしてくれるのをじっと待った。

——佐川さん、もう二度と、離さない。

——終——